

ヨーロッパ文化専修
学 び の 扉

Portes ouvertes sur l'Europe
Offene Türen nach Europa



関西大学文学部 ヨーロッパ文化専修

はじめに

この小冊子は、関西大学文学部のみなさんに、ヨーロッパ文化専修ではどんな教育・研究がおこなわれているかということをご紹介することを目的につくられました。当専修のスタッフが、それぞれの専門の立場から、ヨーロッパ、特にフランスとドイツの言語・文学・文化についてなにも知らない読者を想定して、なるべくわかりやすいことばで、それぞれのテーマについて書いたものをひとつにまとめたものです。これをきっかけに、ヨーロッパがみなさんにとってすこしでも近い存在となり、ヨーロッパの言語・文学・文化に興味をもっていただければさいわいです。

執筆者一同

ヨーロッパ文化専修教員一覧

【フランス言語文化コース】

大久保朝憲 教授 フランス語学、言語学
塚島真実 准教授 近現代フランス文学、詩
友谷知己 教授 古典主義文学、フランス演劇
リコ・ヨコヤマ・アドリアナ 教授 談話分析、日仏比較文化論

【ドイツ言語文化コース】

工藤康弘 教授 ドイツ語の歴史、英語とドイツ語の比較
林英哉 准教授 ドイツ文学、詩
ローベルト・F・ヴィットカンプ 教授 比較文化、比較文学、ドイツ事情

ヨーロッパ文化のススメ

ヨーロッパに憧れる

多くの日本人にとってヨーロッパとは、憧れの海外旅行の目的地だと思います。

もし今すぐ出かけられるものならば、どの国に行ってみましょうか。

例えばスペインなら、バルセロナに飛んでガウディの建築群の奇妙キテレツな美しさに見惚れ、現地人お気に入りの庶民的バルに入って、タパスをムシャムシャ食べます。

イタリアでは、本場の生ハムやパスタやピザの味を満喫しつつ、さらにジェラートをもう頬張って、オードリー・ヘプバーンのようにローマの休日を通します。

ドイツに行くなら、ロマンティック街道を歩いてノイシュバンシュタイン城（ディズニーのお城のモデル）を目指し、その絢爛たる姿に圧倒されて、つついソーセージをモグモグします。

フランスならば、パリでオペラ座に潜入し、ルーブル美術館で疲れ果て、エッフェル塔によじ登ってから、洋服や靴や小物やお菓子やの買物地獄に落ちてしまいます。

みんなヨーロッパ大陸の、何に憧れているのでしょうか。

ひと言で言えばそれは、欧州各国の持っている豊かな文化的財産だと思います（海や山といった自然もちろん素晴らしいのですけれど）。

洗練された食文化、美しい建築と都市空間、無数の名画や工芸品の傑作、ほかとは何かが違うファッション、夢幻のような舞台芸術……。われわれを魅了してやまないのは、ヨーロッパが長い時間をかけて磨きあげてきた、こうした輝く宝石のような文化財の数々です。アメリカが「新大陸」「新世界」と言われるのに対して、ヨーロッパは「旧大陸」「旧世界」と呼ばれます。けれど「古さ」とは、決してヨーロッパの弱点ではなく、むしろその強さです。新興国が容易に手に入れることのできない旧大陸の文化的豊饒は、紀元前5世紀のアテネに花開いた古代ギリシア文明に遡る2500年の伝統によって裏打ちされているものなのです。そして、やはり歴史ある日本の伝統文化に親しんでいるわれわれは、恐らくそうした時間の重みというものを直感しているのです。

ヨーロッパに魅せられる

けれども今すぐ海外に飛び立つというのは、簡単にはいきません。昔、洋行の難しさを嘆いて、萩原朔太郎という詩人はこんな詩を書きました。

ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背広を着て
きままなる旅にいでてみん （「旅上」）

この朔太郎の「きままなる旅」のようにして、みなさんこれから、憧れの土地ヨーロッパにしばしの「バーチャルな」旅行をしてみませんか。つまり、ヨーロッパの文化について、ことばについて、芸術について、あるいは文学について、知的な探検に出かけてみませんか。

「探検？ 海外？ 要りません。日本が一番」。そんな風に考える人ももちろんいることでしょう（し、確かに日本は居心地のいいところです）。けれどホームグラウンドから一度外に出て、より広い視野を獲得したほうが、自国のこともより良く見えてくるというものです。これまでとは違った何か、自分とは異なる他者に触れてみるということは、必ず若いみなさんの知性と感性を大いに鍛えてくれるはずなのです。ドイツ留学を経験しなかった文豪森鷗外など想像することもできません。また、若き日の三島由紀夫はフランス心理主義小説の天才ラディゲに心酔して作家となったのでした。

文学部ヨーロッパ文化専修のスタッフは、旧い大陸ヨーロッパへの知的探検が、日本の新しい世代のみなさんにとっても、魅力的で有意義であることを確信しています。欧州とは、本物の文化の精華が綺羅星のごとく存在しているワンダーランドであって、そこで生まれた数も知れぬ天才たちの作品、無数の偉人たちの仕事は、今なおわれわれを刺激しているのです。

ヨーロッパに学ぶ

そんなヨーロッパの叡智の例を、ここでひとつだけ紹介しましょう。

ヨーロッパの良心と呼ばれる、16 世紀のオランダ人エラスムスです。血なまぐさい政争や宗教対立を目の当たりにしたルネサンスの人文学者は、切実に平和を希求し、真剣に平和の意味について考えました。そして青年カール5世（神聖ローマ皇帝）に向けてこう述べました。「平和とは、たとえ不正な平和であろうとも、最も正しい戦争よりも好ましい」（『君主教育論』）。神の名において殺し合い、正義の名のもとに傷つけ合う人々の愚かしさを批判するエラスムスは、他者を全否定する狂信をしりぞけます。そして、反目する人間たちが許し合い、相手の異論を認め合う「寛容」の徳を説きました。自分と全く異なる意見を持つ人々にも寛容であるということは、もしかしたら打算的で、いかがわしい、不正な振る舞いに見えるかもしれません。ですがそれで人々が平和に「折り合い」をつけていけるのであれば、それは偏狭な正しい暴力よりも数等優れていると、エラスムスは考えたのです。

エラスムスの時代からわれわれの現代まで、世界はかわらず戦乱と闘争で満ちています。けれどエラスムスの平和主義の理想を知るヨーロッパ人たちの努力は、20 世紀にひとつの形をとりました。政治経済の結束を通してヨーロッパ全域の安定と繁栄を目指す、欧州連合（EU）です。EU の合言葉は、「多様性のなかの結束」——ラテン語 *In varietate concordia*, ドイツ語 *In Vielfalt geeint*, フランス語 *Unie dans la diversité*——と

います。ヨーロッパ大陸の複数の文化・伝統・言語の多様性は、団結した時には自分たちを豊かにし強くするものなのだと、ヨーロッパ人たちは肝に銘じているのです。多様な生のあり方を受け入れ、共に平和に生きることを目指す EU の理念は、遠い日本に住むわれわれにもひとつの指針となるのではないのでしょうか。

ちなみに、さきほどエラスムスはオランダ人だと書きましたが、ヨーロッパ各国を飛び回ったエラスムス本人は自分のことを「世界市民のひとり」だと言っていました。そして現在 EU は、ヨーロッパ域内の学生の留学を推進するプログラムのことを、「エラスムス・プログラム」と名付けているのです。

みなさんはきっとこれから 4 年間、本を読み、文を書き、歌を聴き、アニメを観、ダンスに酔い、映画に打たれ、つぶやき、論争し、学問に励むのだと思います。それなら、その文化的な生活を、できるだけ「多様性のなかで」*in varietate* 送ってみてはどうでしょう。ヨーロッパ文化専修は、現在 EU を牽引するふたつの地域を主たる研究対象とするコース——ドイツ言語文化コース、フランス言語文化コース——を設置し、みなさんに多様なヨーロッパ文化の発見を提案しています。

これからこの小冊子では、ドイツ、フランスの言語、文学、絵画、音楽、食文化などについて、その面白さをごく簡単に紹介していきます。手に取って、どの章からでも、気になったところを読んでみてください。そこにはヨーロッパ文化の魅力の一端が覗いているはずですから。

関西大学文学部 総合人文学科
ヨーロッパ文化専修 スタッフ一同

目 次

はじめに	i
ヨーロッパ文化のススメ	iii
目次	1
フランス篇	
第 I 章 フランス語への招待 ―しんどい外国語学習の意義―	4
第 II 章 何故フランス語か？	12
第 III 章 フランス小説への誘い	21
第 IV 章 フランス演劇―劇的状況の探求―	34
第 V 章 物語の楽しみかた、味わいかた（人生論編）	46
第 VI 章 韻文とは？	53
第 VII 章 時の流れと言葉の変遷	56
第 VIII 章 フランスの食	67
第 IX 章 フランスのファッション	71
ドイツ篇	
第 I 章 グリム兄弟の「メルヒェン」とは何か	76
第 II 章 ドイツ語の歴史	85
第 III 章 ドイツの現代社会と文化を知るためのキーワード ―ホロコーストと過去との対峙―	92
第 IV 章 ドイツの食文化：伝統と流動性	95
付録 1：フランス留学のすすめ	103
付録 2：ドイツ語圏への留学	105
付録 3：履修の手引き	106
卒業生寄稿	110
おわりに	113

フランス篇

I

フランス語への招待

しんどう外国語学習の意義

1. はじめに

「国際人としての感覚を身につけるために必要なのはなによりも英語です」と言われ続けて、それでもその英語さえわたしたちは満足に話せない。その上フランス語なんてどうして？と思うかもしれません。しかし本当の国際人とは、「世界標準」の言語文化をただつかいこなせる人ではなく、世界のさまざまな地域文化の価値観を理解し、それらの違いをみとめられる人のことではないでしょうか。もちろん、中国語やドイツ語や、あるいはスペイン語、ロシア語、朝鮮語でもいいのだけれど、フランス語文化も、じつはわたしたちの生活文化に深く結びついた、そしてとても魅力的な文化です。フランス文化のさまざまな魅力については、ほかの章でくわしく述べられていますから、そちらを読んでいただくことにして、ここでは、文化への入り口ともいえる言語、外国語を学ぶことの本当の意義をみなさんに気づいてもらいたいと思います。

2. フランス語はなじみのない言語か

いまでも書いたように、みなさんにとって外国語といえばまず英語で、とくに日本語でカタカナ表記する「外来語」とよばれる語は全部英語からきたものだと思っている人も少なくないと思います。ですから、「フランス語」というと、なにか自分からは遠くのなじみのない文化の、難しそうな言語、という印象をもつ人が多いのではないのでしょうか。ところが、実際には、わたしたちが話す日本語の中には、フランス語に由来する単語が思ったよりたくさんあります。この章の最後に、『広辞苑』第五版（岩波書店）に収録されている単語で、フランス語起源と明記されたものの一部をリストアップしてみました。これをみてもらえればわかるように、みなさんが小さなこどものときから知っている「ズボン」という語も、テレビ番組でみる「コント」も、友だちの音楽の趣味をきくためにつかう「ジャンル」も、カフェ（これもフランス語ですが）でいただく「パフェ」も、あるいはときどき新聞の国際面などでおめにかかる「クーデター」も、全部フランス語からきたものなのです。また、このように日本語のなかにすっかり定着してしまった単語だけでなく、日本で生活していると、フランス語をカタカナにしたものを目にするのはとてもひんぱんにあることです。服飾店や美容院の名称、飲食店のなまえ、マンションのなまえ、雑誌名などの分野では、ありとあらゆる（ときにはナゾの）

フランス語がつかわれています。

もちろん、その数は、英語起源の単語の比ではありませんが、この英語という言語自体が、語彙の上で歴史上のある時期にフランス語の強力な影響下にあった関係で（「時の流れと言葉の変遷」（本冊子 p. 56 以下）参照）、英語の単語の約半数は、フランス語起源のものであることも考慮に入れると、わたしたちが話す日本語とフランス語とは、直接・間接にかなり深いつながりがあるということが出来ます。

3. 文学部で外国語をまなぶこと

さて、フランス語がわたしたち日本語文化圏にすむ人間にとってそれほど遠い存在ではない、ということはすこしわかってもらえたかもしれませんが、それだけでは、大学の文学部でわざわざフランス語フランス文学を専門的に学ぶということを動機づけるにはものたりないかもしれません。そこで、ここでは、フランス語をはじめ、外国語一般を深く勉強することの意義について、順をおって話していきたいと思います。

3.1. ことばを話す能力と母語

わたしたち人間は、言語を話す動物で、生まれてから早い時期に、自分が養育される環境で話されている言語を習得しはじめ、3歳ぐらいまでに、特に体系的な言語教育もなしで、基本的な語彙と文法をマスターしてしまうというおどろくべき能力をもっています。ですから、わたしたちにとっては、言語を使用して他人と意思の伝達をしあったり、さまざまな情報をえたりすることがあたりまえのように思えてしまいますし、みなさんにとってはそれが日本語によるものであるということも、とても普通のことでしょう。今書いたように、わたしたちは生後驚くべきスピードと効率で母語を習得してしまうのですが、これは、人間がことばを話す潜在的な能力をうまれながらにもっているからであるといわれています。この能力とは、日本語やフランス語など、具体的な言語を話す能力ではありませんが（だから新生児がいきなりしゃべることはない）、人間として、どの言語でもすぐに習得できるように準備された、より一般的な能力をさしています。みなさんが日本語を母語とするのは、みなさんが「日本人」だからではありません。日本語環境で育てられたからなのです。ですから、もしみなさんが、何らかの事情で生後すぐに、たとえばフランスの、フランス語話者の家庭にひきとられていたら、みなさんの顔かたちはいまと同じようなものでしょうが、言語的には、フランス語を母語とする人になっていたはずです。つまり、特定の言語を母語として習得する前のわたしたち人間は、生まれてきてからほんの少しのあいだは具体的な言語は話せませんが、逆に、日本語でもフランス語でも英語でもアラビア語でも中国語でも話せる可能性があったということが出来ます。

それではみなさん、自分が日本語を話すようになる前の短い時期のことをすこし思い出してみてください。ことばを通さず、純粋にまわりの世界をながめていたころのこと

です。そう、残念ながらぼくたちにはそれができません。いったんある言語を習得してしまうと、ぼくたちはそれなしで世界を感じることができないのです。もちろん、哲学的な思索、芸術的な想像力によってそのような境地にいたることができる場合もあるし、日常的にも「ことばにできないかんじ」をあじわうことはあります。しかし、前者はともかく、後者については、そのように感じるこそそのものが、通常は言語を通した世界こそがみなさんの世界であることをしめしていると言えるのではないのでしょうか。

3.2. 母語メガネのくびき

さて、それでは「言語を通した世界」というこのものものしい言いかたはどういうことを意味しているのでしょうか。これを説明するのには、いろいろな例をあげることができますが、ここでは親族をあらわすなまえをつかって考えてみましょう。

3.2.1. 日本語とフランス語

みなさんの多くは中学校から英語を勉強しはじめたと思います。そして英語の先生から、sister/brother という単語をおそわったときのことを思い出してください。きっとこんな説明だったのではないですか。「英語では、アネのこともイモウトのことも sister といいます」そしてそれをみなさんはあまり深くかんがえずに、そういうものかとおぼえたのだと思います。これはフランス語でもおなじで、フランス語では sister にあたる単語は *sœur*、brother にあたる単語は *frère* です。この *frère*、つまり日本語でアニとオトウトの意味のある単語について、私はちょっとおもしろい経験をしたことがあります。学生時代、フランス語がそこそこできるようになったときに、フランス人の友人と雑談をしていたのですが、そこでその友人が自分の *frère* について話をはじめました。内容はよくおぼえていませんが、「ぼくの *frère* が…」というようにいいかたで、その友人はなんどもこの単語をつかいながら、その人物の話をずっと続けていました。ぼくはしばらくは普通にそれを聞いていたのですが、途中でどうしてもがまんができなくなって、「で、そのきみの *frère* というのは、*petit frère* (オトウト) か、*grand frère* (アニ) かどっちなの？」と質問してしまいました。その友人は話をやめて、ちょっとぽかんとした顔で私のほうをみて、「え、*petit frère* だけど、それがなにか？」とこたえました。

このエピソードはなにを意味していると思いますか。英語でもそうですが、今みたように、フランス語でも、アニ／オトウトを区別して表現することはできます。けれども、それは、特にそれを言いたい場合にいうことで、通常はわざわざそのようにいうことはありません。英語話者やフランス語話者にとっては、sister/brother、あるいは *sœur/frère* という単語だけでじゅうぶんである、つまり、自分のキョウダイが、自分より年上か年下かということは、通常わざわざ考えることではないのです。いいかえれば、中学校の先生の、「アネのこともイモウトのことも sister」という説明は本当はただしくなくて（もちろん中学の先生がそれをわかっていないということではなく、わかりやす

いようにそう説明するのですが)、英語には、あるいはフランス語には、そういう区別がそもそも意識されていない、ということなのです。ところが、わたしたち日本語話者は、「日本語を通した世界」しか知らないのです、それではなんとなく落ち着かない、他方で英語話者やフランス語話者は、それぞれの言語を通した世界しか知りませんから、日本語でそのような区別があることを知れば、なぜそう細かくわけののかとふしぎに思う。それがぼくの友人のぽかんとした顔の意味なのです。

3.2.2. 日本語と中国語？

この話をもっと実感してもらうために、中国語の話を少しだけしてみます。「伯父」「叔父」という漢語は日本語でも使用されますが、これはどちらも「オジ」と発音されます。この2つの表記の（中国語では別の単語ですが）意味の違いをしてみてください。「伯父」というのは、自分の父母のアニにあたる人のことで、「叔父」のほうは、自分の父母のオトウトにあたる人ことです。これはまだたしかめていないのですが、上のフランス語の話から類推すると、つぎのようなことが考えられます。日本語ができる中国語話者に、私がたとえば自分の「おじさん」の話をする。「ぼくのオジサンはね…」となるべくこの単語をたくさんいれて意地悪に話を展開する。そこでもしかしたら、その中国語話者は、とうとう私につぎのように聞いてくるかもしれません。「と、ところで、きみのそのオジサンというのは、きみのお父さんかお母さんのおにいさん、それともおとうと？」

みなさんにはこの話が冗談のようにきこえるかもしれませんが、これは、私がフランス人と話している途中に思わずあのように言ってしまったときと、まったくおなじ気持ちにもとづくものなのです。そして、このようなことは親族のなまえにかぎったことではなく、言語のほとんどすべてについて言えることです。つまり、言語がちがうと、おなじものをみても、それをどのようにとらえるかということが全然ちがっている、そしてそれだけではなく、おなじ人間の言語なのに、ちょっとした違いもわたしたちはそう容易には受け入れられないということです。母語としてひとつの言語をいったん習得してしまうと、わたしたちにとっては、母語というメガネを通して見る世界が基本になってしまい、メガネをかける前、つまり生まれたころの何語話者にでもなれたときの感覚は忘れてしまっているし、またそれを忘れることが、母語習得、ということさえできるのです。

3.3. 母語メガネをひっぱがせ

それでは、母語を普通に話せるようになったわたしたちが、別の言語を学ぶ、というのはどういうことでしょうか。それは簡単にいえば、日本語のメガネを、たとえばフランス語のメガネにかけかえるということです。そして、メガネのかけかえは、いまでも話

したように、そう簡単にできるものではありません。母語は生得のものではない、日本人が日本語を話すのは日本人だからじゃなくて日本語環境に育ったからという話もすでにしましたが、いったんかけてしまったこの日本語メガネは、実はまるで生得のもののように私たちがみる世界につきまとして、簡単にはかえられないものなのです。外国語を学ぶむずかしさというのは、まさにそこにあります。たとえば、フランス語を学ぶことになって、いったん日本語で定着した私たちの言語能力をリセットして、フランスに行って、フランス語を話す家庭で生活するということができれば、きっとわたしたちは、こどもとおなじように、とくに語学学校などにかよわなくても、3年ぐらいで普通にフランス語を話すことができるようになるでしょう。しかし、それは無理です。なぜかというと、人間がある言語をそのように習得できるのは、こどものときだけ、せいぜい12歳ぐらいまでと言われていて、それをすぎると、母語がわたしたちにはりついてしまって、どうしても母語を経由して、あるいは母語と比較しながらでしか、新しい言語を学ぶことができないようになっているのです。

それならこどものときからいろんな言語をたたきこんでおけば、わたしたちは簡単にバイリンガル、トライリンガルもしくはそれ以上になることができているか、という問題については、いまここでお話する余裕がありません。少なくともそれはそれで大変な努力が必要なこと（たとえば国際結婚で生まれたこどもが簡単にバイリンガルになるというのは大ウソです）で、通常の社会環境ではむずかしいことですから、その話はおくとして、では、もう成人も近い大学生の年になって、なぜ外国語を勉強する意味があるかということに話をうつしましょう。

たとえばフランス語には、上でお話した親族語彙の例だけではなくて、日本語と意味の範囲がちがう語はいくらでもあります。また単語のレベルだけでなく、文法もおなじです。フランス語には、過去をあらわす動詞の形が複数ありますし、自分が話すことが現実なのかあるいはそうでないのかということでも形がかわります。他方でフランス語には、日本語とおなじような意味での「敬語」はありませんが、それでもことばで敬意を表現することはできます。こういうこまごました文法事項を理解し、自分のものにするのはたしかに簡単なことではありませんが、それが簡単でないのは、まさに、いままでお話ししてきたように、ぼくたちは、話す言語によって、ちがうしかたで世界をとらえ、表現するからなのです。知らない世界の、知らない言語を理解することはちょっとむずかしい、他方で外国のことは英語ができればだいたいわかるようだ、そういう理由で英語以外の外国語の学習に興味をうしなってしまう人がすくなくありませんが、文学部の学生として、ほんとうにそれでいいのでしょうか。

3.4. 異文化理解への遠くて近い道

グローバルゼーション、国際化、異文化理解、といったことばを最近よく耳にします。この地球上をこまかくへだてていた文化の垣根がどんどん低くなって、これからのみな

さんが生きていくためには、日本というせまい国にとどまっているだけではなく、世界をわたりあるいて、さまざまな情報や知識を獲得し、利用していかなければなりません。そして、そのためには英語が「世界標準」のコミュニケーション・ツールであり、この道具なくしてはそのような活動は不可能であると言われています。それはその通りですから、みなさんには、大学でしっかりと英語を勉強していただく必要がありますが、同時に、そういう意味でみがきをかける英語は、国際人としてのツールのひとつでしかないということも理解してもらわなければいけません。

文化の垣根が低くなったと言いましたが、それは、わたしたちの異文化へのアクセスの可能性がふえたということであって、さまざまな地域文化の違いがなくなったということではありませんし、またなくしてはいけないものです。外国に旅行に行くたのしさは、歴史的な名所や美しい観光地を訪れることにもあるでしょうが、わたしたちが慣れ親しんできた文化とは違うものにふれ、違う価値観をすること、そしてそれを違うからといって遠ざけようとししないで、なんとか理解しようとする、どうしても理解ができなくても、そのような文化が地球上にはいろいろと存在しているのだということを知ること、そういうことをみとめることで、わたしたちの心はゆたかになり、異文化体験が、ただの物見遊山から異文化「理解」につながります。

このように、旅行などで直接異文化にふれることで学ぶことはとても大きなことです。もうひとつ、日本にいながらにして、ある地域文化の真髄に近いものにふれる方法があります。もうおわかりでしょうが、これが外国語の学習なのです。

先にも書いたように、わたしたちは言語を通して世界をみています。つまり、言語というのは、文化を規定するもの、とは言えないまでも、それぞれの地域文化の基本にあるものなのです。先の親族名称の話についても、日本語圏や中国語圏での、年齢の上下を重んじる儒教道徳とのむすびつきを考えることができるかもしれません。また、年齢の上下が単語に反映されないフランス語や英語では、キョウダイ関係そのものが、わたしたちの文化とはきつとちがうものなのでしょう。時間やものごとの現実性によってさまざまな動詞の形があるフランス語とフランス語圏の地域文化にはどのような関係があるのでしょうか。また、しばしば省略が多いとかあいまいだと言われる日本語と日本の地域文化は関係があるのでしょうか。外国語学習とは、単語を暗記し、さまざまな文法事項を習得するという、かなり地道な努力をしいるという点で、たしかにそれほど楽な勉強ではありません。しかし、ある外国語に習熟すればするほど、わたしたちは、いままで自分がみていたのとは少し違うしかたで世界をみつめることができるようになります。それは、ただ、その言語が話される地域の文化の理解の助けになるだけではなく、自分がそこで生きてきた文化が唯一絶対的なものでなく、世界に多々ある言語文化のひとつのかたちにすぎないのだ、という認識を、頭の中だけでなく、身をもって感じるきっかけになります。わたしは、外国語学習のもっとも大切なところは、ただその言語がペラペラになるということ以上に、むしろそういうところにあるのではないかと思

うのです。

3.5. メディアの操作をのりこえる

さて、そのようにして外国語に習熟することで、現代社会を生きる上でまたもうひとつ重要な利点があることを最後に述べたいと思います。高度情報社会が形成されたと言われる 20 世紀は、その末期から、インターネットの発達によって、「情報収集」の概念そのものが変わったと言っていいくらい、さらに大きく変化しました。いまや、なにかわからないことがあれば、グーグルの画面にキーワードを入力するだけでたいいのことがわかるようになりました。そして、いままでそう簡単にふれることができなかった外国のメディアにも、自宅や大学から簡単にアクセスできるようになりました。ただ、そのようなメディアにはいろいろなものがあり、いろいろな言語で発信されています。英語をすらすらと読めることで、わたしたちは英米を中心とする英語のメディアがあたえる情報を得ることができますが、たとえばフランス語を読むことができれば、世界でおこる大事件について、フランス語圏での報道のしかたに直接ふれることができます。湾岸戦争のときも、またイラク戦争についても、アメリカのメディアによる報道が、あくまでもアメリカからみた報道であるということがよく話題になってきました。そして日本のメディアさえ、その報道に追従ぎみのところがあることは否めません。ところが、フランスのメディアは、いま述べた 2 つの戦争についても、アメリカのメディアとは大きく違う報道姿勢をもっていました。そのような事実は、英語ができるだけ「国際人」には、少なくとも直接的に感じることはできないことです。冷戦終結以来現在にいたる世界では、経済的にも政治的にも、そしてある程度までは文化のレベルでも、まるであるひとつの価値観がすべてであるように思わされる瞬間があります。そしてこれは、文化の多様性ということを考える上では、あまりプラスのことではないように思われます。そのような事態を避けるためにしなければならないことはふたつ。ひとつは、自分が生きる地域文化をみなおし、尊重すること、そしてもうひとつは世界のさまざまな地域文化に、なるべく直接にふれることです。文学部には、特定の地域文化を言語から学び、研究できる専修がいくつもあります。わたしは、言語学者として、みなさんにこれらの研究教育の重要性を強調したいと思います。そしてとくにフランス語の教師として、ゆたかな文化をもち、歴史があり、また現在も世界全体の中で重要性の高いフランス語の世界を、みなさんにぜひ紹介してきたいと思っています。

4. フランス語の世界への招待

これからこの冊子でみなさんに読んでいただく各章には、以上をふまえた上で、フランス語やフランス文化が、それだけの苦勞をして学ぶためにどれほど魅力的なものであるかということが書かれています。みなさんは、フランス語というと「音がきれい」「おしゃれ」というようなイメージをもっているかもしれません。わたしもはじめはそうで

した。新しい言語や地域文化を学ぶきっかけは、そのようなものでも全然かまわないし、またあるいは「高校時代からフランス文学に親しんできた」「フランス映画が好き」というような動機も立派だと思います。そういうちょっとしたきっかけから、わたしたちはときどき、とても遠くへの心の旅にでかけ、うつくしいもの、いとおしいもの、あるいは自分の人生にかかわるとても大切なものをみつかることがあります。関西大学文学部で、どうかみなさん、そういう自分だけの大切なものをみつけてください。フランス語フランス文学の勉強が、そのための小さなきっかけになることをいのっています。

(大久保朝憲／おおくぼ・とものり：文学部教授)

『広辞苑』にのっていたフランス語から

アップリケ、アトリエ、アベック、ア・ラ・カルト、ア・ラ・モード、アンケート、アンサンブル、アンニユイ、エクレア、エスカルゴ、エチュード、オー・デ・コロ、オート・クチュール、オードブル、カフェ、カフェ・オ・レ、カムフラージュ、キャバレー、ギロチン、クー・デター、クーベ、クーポン、グラタン、グラン・プリ、クルトン、グルメ、クレープ、クレバス、クレヨン、クロッキー、クロワッサン、コニャック、コンクール、コンソメ、コント、サブレー、サボタージュ、サロン、シェフ、シガレット、シック、シニョン、シネマ、シャンソン、シャンパン、ジャンル、シルエット、スエード、ズボン、セロファン、ソテー、ソムリエ、ソルベ、タルト、テアトル、デジャ・ビュ、デッサン、デビュー、トラバーユ、トリコロール、ナポリタン、ニュアンス、ヌガー、ネグリジェ、バカンス、パステル、ババロア、パフェ、バラード、パラシュート、パラソル、バリカン、バレエ、パンタロン、ピーマン、ピエロ、ビストロ、ヒレ、フィアンセ、ブーケ、フォア・グラ、ブティック、ブリオシュ、ブルジョア、ブルゾン、プレタ・ポルテ、プロムナード、プロレタリア、ページュ、ベレー、ペンション、ポシェット、ポタージュ、ポプリ、マドレーヌ、マヨネーズ、マリネ、マロン・グラッセ、マント、ミル・フィーユ、ムース、ムニエル、メニュー、モチーフ、モン・ブラン、ランジェリー、ランデ・ブー、リキュール、リットル、リトグラフ、リムジン、ルーレット、ルポルタージュ、レジュメ、レストラン、レトロ、その他

II

何故フランス語か？

1. 何故外国語を勉強しなければならないのだろう？

1.1. フランス語のことを何か知っていますか？

毎年4月、大学の授業が始まるときに、これからフランス語を学習する1年生に必ずする質問があります。

「フランス語で知っていることがありますか？」

この質問に対して、フランス語の学習経験が無い人は一様に、何も知らない、と答えます。

それでも、教室からいくつかの声が聞こえ始め、知っている単語や表現が出てきます。こうして教室のあちこちから、「ボンジュール (bonjour!)」や「メルシー (merci!)」、「ギャルソン (garçon)」、「ジュチーム (je t'aime)」、「カフェオレ (café au lait)」などが聞こえ、20ほどの語彙リストが出来上がります。リストにはさらに、「ベレー (béret)」や「デビュー (début)」、「アンコール (encore)」等のように、カタカナで書かれ日本語に取り込まれているけれども、語源がフランス語だとは知られていない語が加えられます。この種の語は100以上あります。



しかしこの語彙リストが、フランス語という言葉について私たちの知っているすべてでしょうか？ これは現実を反映しているのでしょうか？ フランス語というまだ習ったことのない言語に対する知識や運用能力は、このようないくつかの表現に限られているのでしょうか？ 新しい言語を前にして、私たちは何も手がかりを持っていないのでしょうか？



この問いに対する答えはもちろんノーです。

私たちは母語でコミュニケーションを取り合っています。私たちは否定、喜び、後悔を表現できます。私たちは、聞き手がどのような人か、年齢はいくつか、どんな職に就いているか、文脈は何か、やり取りの目的は何か、等によって話題や話し方を合わせる

ことも知っています。状況によってまた、敬意を示すべきときがありその逆もあります。たとえば、お母さんが子供に持ち物を片付けるように言うとき、「音楽をお聴きになっているときにお邪魔して申し訳ありませんが、あなたのお部屋は片付いていないように思われますので、もしお忙しくなければ片付けていただけますでしょうか」という言い方はやらないでしょう。きっと、「急いで部屋を片付けなさい」とこんな具合に言うんじゃないでしょうか。

私たちはまた、知人と朝会えば挨拶をする、親切にしてもらった人にはお礼を言う、そうでなければ失礼にあたる、ということを知っています。同様に、笑顔がいろいろな可能性の扉を開くことも知っています。

要するに私たちは母語の経験から、コミュニケーションが行動の規則、言語教育法の用語で言い換えれば「在り方」や、文法、語彙、構文といった純粋に言語の規則によって支配されていることを、既に体得しているのです。動詞、形容詞、名詞などを文の中で見極めることもできるのです。これらの行動と言語の規則はもちろん文化、言語、国によって異なります。だからこそ言語的アプローチと文化的アプローチを組み合わせることが重要になるのです。しかし重要なことは、この規則の存在と重要性を認識することです。いくつかの規則は普遍的であり、したがって異なる文化にも見られます。このような規則のおかげで自分の規則体系を他の社会に当てはめても大きな間違いをおかさずに済むのです。

こうして見ると、ひとつの外国語を習得するときに、その基礎を構成する知識を提供しているのが母語であることが分かります。中学生は英語を習い始める時、母語の提供するベースをすでに持っているのです。しかし英語は日本語から極めて遠い存在なので、英語の習得は決して楽ではなく、また必ずといってよいほど壁にぶつかります。まずアルファベットを習いますが、日本語のかなとは全然違います。語彙も、文法規則も、イントネーションも、発音も、姿勢も、なにもかも母語からはかけ離れています。しかし若さと年数をかけることで驚くほどの知識量と言語能力が身につきます。

この言語能力は非常に有益なものになります。以下の2つのテキストを見てみましょう。新聞記事の抜粋です。ひとつはアラブ語でもう一つはフランス語です。どちらも皆さんがまだ習ったことのない言語です。どちらのテキストの方が親しみやすいでしょう？

資料 1

تقرير واشنطن - محمد الجوهري

إلى منطقة الشرق الأوسط تتردد في George W. Bush ما تزال أصداء زيارة الرئيس الأمريكي جورج دبليو بوش الأوساط الإعلامية الأمريكية ، التي واصلت اهتمامها بأهم فعاليات هذه الزيارة ، خصوصا ما تعلق منها هذا الأسبوع بقضايا الديمقراطية والإصلاح السياسى فى منطقة الشرق الأوسط والمجتمعات العربية .فضلا عن محاولات الرئيس الأمريكى إنشاء كتل عربى ضد النفوذ الإيرانى المتصاعد فى المنطقة.

資料 2

George Bush au moyen-Orient sur fond de tension Iran-USA

FRANCE INFO - 8 JANVIER 2008

C'est par Israël que le président américain George W. Bush entame aujourd'hui sa tournée d'adieux dans les pays du Moyen-Orient. La guerre en Irak et les tensions avec l'Iran seront les principaux sujets, alors qu'un incident naval a failli dégénérer entre iraniens et américains.

きっと多くの人が、フランス語のテキストの方が親しみやすいと答えるでしょう。しかし、どちらも習ったことがないという点では同じであるはずなのです。なぜこのような印象を持つのでしょうか。なぜフランス語の方が親しみやすく感じるのでしょうか？

もし、内容が分からないにもかかわらず、フランス語の方が分かりやすいと思ったとすれば、それはおそらく、既に知っているアルファベットのおかげ、英語を習ったおかげです。しかしそれだけでしょうか。先の資料をもう一度見てください。理解できる単語がいくつかありませんか（下線を引いた語）。もっと注意して見ると、たとえば iraniens や américains が、どちらも s で終わっていることに気がつくでしょう。これは英語と同じく複数の印であることが推測できます。人によっては文の構造、つまり動詞の位置や形容詞、名詞などまで分かるかもしれません。

ではアラブ語のテキストはどうでしょう。記号の羅列にしか見えないんじゃないでしょうか。見た目はとても美しいけれども、私たちには完全に不透明です。それは文字の手がかりがなく、言語や構文、語の形のどれ一つとっても分かる物がないからです。この言語を理解するに到る道は、とても興味深いとは思いますが、フランス語よりはるかに遠く困難なものになるでしょう。

今述べたことを音楽を例に見てみましょう。まったく楽器もソルフェージュも習った

ことのない人に比べると、何かひとつの楽器の弾き方を習った人は、違う種類の楽器を演奏する場合でも、ずっと容易なはずです。楽器を初めて引く人にとっては、道のりは遠く、難しく、上手に引くレベルに到達するチャンスは限られています。

ことばの問題に戻しましょう。もし英語を習っていなかったら、フランス語、アラブ語両方とも私たちには不透明だったと思われます。このことは、私たちの総合的な言語理解能力の発達を示しています。たとえば、英語というインドーヨーロッパ語族に属する言語をすでに学んだということと、母語という言語操作をするもともとあったコミュニケーション能力を出発点として、フランス語を習得する能力が発展的に獲得されたということです。

言い方を変えれば、言語を学ぶにつれ、私たちの中にコミュニケーション能力が構築され、その能力は学習した言語に適用されるだけでなくより容易に、特に同じ語族の言語を学ぶ時に顕著な傾向を見せますが、他のどの言語を学ぶことが可能になるということです。確かにこの能力は、言語（と文化）を区分するわけではなく、私たちの言語に対する知識と経験のすべてが入る「袋」を形成します。言語を学ぶごとに把握する能力は発達するのです。



このコミュニケーション能力は、相手と気楽にコミュニケーションを始めることを可能にします。それは自分が持っている言語の持ち札から片言でも、使えるものや必要なもの、あるいは非言語的要素（身振り手振りなど）を動員することができるからです。

1.2. 第二外国語の役割

しかし、皆さんは英語ができれば十分なのでは、と言うかもしれません。では何故、二つ目の外国語を習う必要があるのでしょうか。

理由はたくさんあります。

少し前まで、写真を現像する時には「現像液」を使っていました。この液により絵が見える状態になるのです。この「現像液」にあたるフランス語 *révélateur* には2つの意味があります。ひとつは写真を現像するという意味で、もう一つは「(実態などを)明らかにする」という意味です。二つ目の言語というのはまさにこの二つの意味で *révélateur* なのです。私たちが言語を学ぶ能力を持っていることに気づかせ、それを発展させるのは二つ目の外国語なのです。

先ほど指摘したように、中学生が英語を習う時は、若さと長い年月をかけることで、困難を乗り越えることができます。力づくで、無意識のうちに英語が体の中に入るので。その意味で、いわば受け身の学習となり、そこに問題があるのです。

第二外国語の習得は大学で、年齢が高くなって、より意識的に行われるので、学生は多少積極的になります。それに、大学の教育は学生に自立を求めます。理由は簡単です。一つの言語をマスターするためには時間がかかりますが、大学の授業時間数は限られています。この条件下で、学生に大学以外でも学習を続けられるツールを与えなければなりません。二つ目の言語の学習により、学生が自身の多言語能力の発達を意識することで、このことが可能になるのです。学生は言語学習の方法そのものをよりよく理解でき、それ以前に習得した能力を自分自身の学習で強化することも可能になるでしょう。

学生の多言語能力を発展させ強化することは、大学の果たすべき義務でもあります。多言語能力は、国際感覚を持つ若い市民の育成を目的としています。複数言語の学習は、様々な文化との出会いを可能にします。コミュニケーションができることは、他者を理解する最良の方法です。ある文化が持つ違いや特徴を感じるためには、いろいろ説明を聞いたり読んだりするよりも、その言語を通して学習するのが最も直接的な方法です。

この点では、EUに関する考察はとても興味深いものがあります。



1.2.1. EU の例

歴史を少し遡ってみましょう。

第二次世界大戦が終わった頃、ヨーロッパは長年にわたる、おそらく人類史上例のない殺戮が行われた戦闘により荒廃し、怨恨と憎悪が渦巻いていました。フランスは長年にわたるドイツによる支配から解放され、ドイツは壊滅状態にありました。このような互いに憎悪の積もった状況下で、それにもかかわらずフランスとドイツの国家指導者は昔から敵国同士であった2国間の和解が、二度と恐怖の年月が訪れないようにするために、緊急かつ絶対的に必要であることを理解したのです。しかし、この和解は二国民の歩み寄りの上に成り立つのです。第一次世界大戦のあとのように国家主席だけによって決定された条約へのサインではなく、市民が一方から他方へ相互に歩み寄らなければならないのです。

この和解への意志はエリゼ条約締結によって具体化されました。両国の言語の学習の役割と必要性がそこに明確に記述されています。

「外国語を理解し使えるということは、これら文化的、実用的な次元を超えて、人々の間の相互理解や、国家内のものであれ国家間のものであれ多様な共同体間の寛容の精神においてもっとも重要な要素であり、同様に国家間の平和の決定的な要因であり、あらゆる非文明的な行為が再び行われることに對抗する非常に優れた手段となる。」

同様に多言語主義についても、それは「複数の言語においてある程度のコミュニケーションができる能力として理解されなければならない、これらの言語の完全な習得と理解されるべきではない」と、明確にされています。

そのときから、今日の EU に至るまで、ここで述べるスペースはないのですが、様々の段階を経て、ヨーロッパは多言語主義を見据え、多文化主義を強調した政治を倦むことなく探し求めてきたのです。この政治の積極的な介入は、約 10 年前、「言語のためのヨーロッパ共通参照枠」の作成によって決定的な展開点に達しました。

1.2.2. 「言語のためのヨーロッパ共通参照枠」CECR とは何だろう？

それは、多言語主義の理想の追求という目的のもとに集まった高名な言語学者、教育者、文法学者、心理言語学者、その他あらゆる分野の専門家に導かれた、20 年にわたる研究の成果です。

CECR は、関係するすべての当事者、すなわち、教育者や学習者、教育官庁（国民教育省）、評価責任者、出版社に向けられた、語学に関する教育、学習、評価による共通の原則を明確にしました。この原則は、EU すべての国に同じく適応されます。

このプログラムの統一には次のような利点があります。これによりすべての国が、それがすべての国に共通であることから、容易に識別できる指標を持つことができ、若者たちのヨーロッパにおけるより大きな移動が可能になることです。エラスムス・プランのようなプログラムは、学生たちがきわめて容易に、1 年または複数年にわたって、彼らの選ぶ 1 つのあるいは複数のヨーロッパの大学に行くことを可能にする奨学金を与えることを目的に作られたものです。

CECR は、初級から上級まで、6 段階のレベルを設定し、それぞれのレベルでの能力基準が記述されています。たとえば、どのレベルでは学習者がどれだけの口頭、筆記による表現力、理解力を必要とするのか、どのような行動の規則を持っていなければならないのか、等々。

政治がこのような成果を持ちえたのは、ヨーロッパの若者たちの出現によるものです。ある際立った例を引用しましょう。2002 年、一人のフランスの指導者がドイツを訪問した際に仏独の高校生たちが、前世紀の悲劇的な出来事を含めた、両国共通の歴史教科書を希望すると表明したのです。この教科書は 2006 年に上梓されました。

以上で、外国語を学ぶ重要性を分かってもらえたのではないのでしょうか。では、「なぜフランス語を学ぶのだろう」という問いに対する答えの手がかりをいくつか試みてみましょう。

2. 何故フランス語を学ぶのだろう？

ラテン語から派生した他のいくつかの言語、スペイン語やイタリア語、ポルトガル語さらにはルーマニア語を学ぶための近道として、フランス語を学ぶメリットがある、などと無謀なことを言い出すつもりはありません。偉大な思想家や作家、科学者、哲学者など、世界的な名声を得て、フランス語に興味を抱かせる人物はたくさんいますが、彼らを想起する必要があるのでしょうか。そうではなく、この疑問のもうひとつ別の面をここでは見ようと思います。言語を学ぶことを選択するということは、世界の政治、文化、経済、社会といったいろいろな面でその国が体言していることに興味を持つということです。



2.1. 今日のフランスは何を体現しているか？

思想、情報さらには趣向の一元化へと進むこのグローバリゼーションの時代に、みずからがその一員である EU やフランコフォニーでのリーダー的、積極的な役割、そして世界の中でのポジションと取り組みなどを通して、フランスは多様性の道を示しています。

2.1.1. ヨーロッパにおいて

前述の理由から、ヨーロッパは文化と言語の多様性を重視する政策を実行しています。この選択はその逆の方向が危惧された可能性があっただけに特筆する価値があります。逆の方向とは、ヨーロッパを、単一通貨のように、一つの共通言語を中心に構築するという可能性です。この言語は英語になっていたでしょう。なぜなら英語は世界中のやりとり全てで支配的な言語であることは反論の余地がないからです。例としてはインターネットを見るだけで十分です。2000 年の世界のコミュニケーションと情報に関する資料によれば、インターネットの 81% のページが英語で書かれ、4% がドイツ語、2% が日本語とフランス語、1% がスペイン語で書かれています。その他の言語は全部まとめても 8% でしかありません。

ヨーロッパの政治選択—たとえば守るべき豊かさとしての、ヨーロッパの平和を保証する相互理解への条件としての多様性に価値を置くこと—におけるフランスの役割は中心に据えられるべきものです。時には EU に関する最近のフランスの国民投票に見られるように、フランス国民は国家の指導者とは意見を異にします。というのも、経済、社会政策の選択は、欧州連合の構築を必要とするものではありませんが、コントロールの効かない影響をもたらすような大規模な変化を引き起こす可能性もあるからです。大幅なインフレを起こし、その結果として購買力を減退させたヨーロッパでの単一通貨を例としてあげることができるでしょう。EU の構築は一日で出来るものではありません。いろいろ困難な問題がありますが、ヨーロッパは前進し、フランスはそこで中心的な位

置を占めています。

2.1.2. フランコフォニーのなかで

フランスは国際フランコフォニー機構 OIF の加盟国であり、その中心的役割を担っています。しかしその役割に触れる前に、フランコフォニーとは何か、その組織と成り立ちを確認しておきましょう。

フランコフォニーはまず第一に、国としてあるいは地域として、それぞれの状況でフランス語を話したり使ったりしている人の集まりを意味します。また、同時に国際組織も意味し、1970 年に創立され、同胞愛と連帯のもとにフランコフォン（フランス語話者）共同体のメンバーに共通する利益のための活動に取り組む国によって構成されています。フランコフォニーの運動は、平和の発展と維持のための相互扶助の上に築かれたものであり、国際的な舞台で重要な位置を占めることができない国にとって協議の場を持つことが可能な場でもあります。

OIF は現在 68 カ国が加盟しており、原則として加盟国は同じ言語を継承していますが、だからといって社会文化的、政治的、経済的な面で均一なまとまりを見せている訳ではありません。フランコフォニーに見られる文化の多様性はこのことから、豊かさと想像力と活力の源となっています。

OIF が 1970 年に、チュニジア、カンボジア、ニジェール、レバノン、セネガルの独立指導者たちによって、フランス語を中心にした歴史¹と共通のよりどころによって築かれた関係を、活発な状態で維持することを望んで設立されたことを付記しておきましょう。

2.1.3. 世界のレベルで

世界的には、大規模な国際組織（国連、ユネスコ、NATO、など）でのフランスの発言は、重要な位置を占め、影響力があり、たとえばアメリカ合衆国のスタンスとは明らかな違いを示しています。例として、イラクや地球温暖化に関する姿勢の違いを挙げておきましょう。

地球温暖化については、EU は公害の程度に応じた税金を導入することで具体的な環境問題の解決策を講じています。もちろんお金を払えば地球の破滅につながるような重要な問題が、これで解決するというわけではありません。しかし、この問題ではすべての国が解決策を見つけなければならないのです。抜本的で決定的な解決策があったとしても、それを否応なしにすべての国に受け入れさせることは不可能です。

¹ それが植民地問題であることは言うまでもない。フランス帝国主義はあらゆる点において非難されるべきだが、植民地化の過程でいくつかの貢献（健康、教育など）があったことも事実である。

3. 結論

結論として、他の文化、他の考え方を発見するために提供された機会を十分利用してほしい、と言っておきます。言語を学習することは、胸躍らせるような営みであるばかりではなく、非常に重要な営みでもあります。この私の文章が、いささかなりともそのことを示すことが出来れば、と願っています。



☆この文章の挿絵を快く引き受けてくれた私たちの友人 Jean Lamare (JIHEL) に心から感謝します。

(Adriana RICO-YOKOYAMA／アドリアナ・リコ＝ヨコヤマ：文学部教授)

III

フランス小説への誘い

ずいぶん昔のことだが“フランスの小説は暗いから嫌い”とある学生さんが言ったことがいまだに記憶に残る。確かにそうした側面は無きにしもあらずだが、それはフランス小説に限ったことではないだろう。どこの国の小説も“明るい”材料だけで成立しているわけではない。また“明るさ”“楽しさ”“快感”を鮮明に描くためには必然的に“暗黒面”を対置させなければならない。フェルメールやドラクロワの絵画が証明しているように、“影”あつての“光”であり、光を演出するためには影が必要なのである。

とりわけフランス小説は人間存在の理想的な姿を念頭に置きながら人生や生活を、また人間のあり方を提示してきた。実人生においても私たちが幸福感や楽しさを味わうことは稀なことである。それが、ある意味では人生を映す鏡でもある小説が必ずしも明るくないものとならざるを得ない所以ではなかろうか。

人間は日常的に何かコンプレックスを感じたり悩んだり、理不尽な思いをさせられたりすることがあるが、小説作品の様々な登場人物の境涯に思いを馳せることによって救われることがままある。そのような読み方だけが小説の正しい読み方とは言えないとしても、主人公の生き様に共鳴・共感できた時、われわれはなにかしら心が洗われて豊かな気持ちになったことがある、という経験持つ人はいるはずだ。

人間は、どこにも救いの無い辛い状況を堪えに堪えて、その暗いトンネルを脱した時、あるいは長期に渡る（受験勉強のような）刻苦勉励を自らに強いた後、なにほどこかの実りを手にした時、言い知れぬ“充実感”を味わうことができる。その解放感に満ちた“サッパリ”した気分は、魂が洗われたからなのだ。これをアリストテレスは **katharsis**・カタルシス（浄化・排泄）と呼んだ。下世話な譬えで恐縮だが、たとえば腹具合の悪い時、京都に出向くに際し十三駅から特急に乗り込むや否やすぐさま強烈な便意を催してくるとする。しかし、電車は高槻駅まではとまらない。“しまった、各駅停車に乗ればよかった”などと悔やみながら、脂汗を垂らして身を振りながら我慢を重ね、高槻駅で猛然とトイレに駆け込んで排出したあとの爽快感が、いわばカタルシスである。人間の心の奥底に潜む非合理で暗いもの、道徳・倫理や法律などではどうにもできないものの浄化がお芝居や小説に託されていると考えられる。

I. 中世 9世紀から13世紀

1. 修道院文化の文学 「聖者伝」と「武勲詩」

フランク王国の創始者クロヴィスが自ら改宗してカトリックに帰依して以来、カトリ

ックが時の権力と結びついて発展し、爾来キリスト教がフランス文化とフランス精神を連綿と根底から支え続けることになった。フランス文学史上最古の代表的作品といわれるものが聖者伝の『聖アレクシ伝』となる所以である。

987 年カペー朝が成立すると、主君が封土 féo を与え、騎士がその対価として恭順 homage を誓うという相互の信頼関係を軸とした封建制 féodalité の確立が急務となった。権力者側は主従関係や家来同士の絆を緊密にするために「名誉」と「信仰」の観念を利用した。名誉は「勇武」を意味したので、聖者伝のほかに「武勲詩」Chansons de geste が生まれることになる。このジャンルの代表作は第一次十字軍の興奮の最中の 1100 年頃成立したと見られる『ロランの歌』である。この当時の十字軍は正規の軍隊ではなかった。騎士（と言っても大半は食い詰めたならず者）のみならず、百姓、町人までもが荷車に家財道具を積みこみ、鋤、鍬、棍棒を武器にして参加した武装巡礼団であり、約二万人ともいう巡礼団に二千人の従軍慰安婦が伴う遍路の旅であった。宿泊所となる宿坊での娯楽として、武勲詩はヴィエルという楽器の伴奏で語られ、旅人を癒した。

778 年サラセンに対する勝ち戦（スペイン諸侯の内紛）を治めて帰途にあったシャルルマーニュの後衛軍 arrière-garde（前衛は avant-garde）にバスク族の山男たちが襲い掛かり、全軍を虐殺した。戦死した要人のなかにブルターニュのロランドゥス伯爵がいた。この歴史的な事件をモデルにして生まれたのが『ロランの歌』（作者不詳）である。

「ロランは猛く、オリヴィエは聡し」と謳われた両雄の率いる二万騎に十万の異教徒が襲い掛かる。多勢に無勢、親友オリヴィエはかねて合図の角笛を吹いて本隊に知らせようロランに進言するが、恥を恐れ名誉を過度に重んじるロランは危険な持ち場を自若として引き受けることにこだわり、結果オリヴィエが死に手勢 60 人となってやっと角笛を吹く。詩人は英雄たちの崇高な狂気と悲壮な死を、共感をもって描くことにより、悲劇的境遇、悲痛で壮大なドラマを、哀愁をおびた情緒に彩っている。作者のメッセージは結局、人生とは神への奉仕に捧げられた永遠の十字軍なのだ、ということのようである。

2. 宮廷文化の文学 宮廷風騎士道物語

歴史家セニョボスは、「恋愛は 12 世紀の発明である」と言った。女性を男性と対等以上にみなし、恋愛を狂気でなく精神の飛翔の契機とする考えは中世の発明なのである。戦時は男が強く、平和時は女権が強くなる事実は歴史が証明するところだ。因みに、永世中立国として世界中が羨望の眼差しとともに認めるスイスは、国民皆兵の戦時体制をとっているので、普選（女性参政権）の施行は日本よりも四半世紀以上遅れて 1972 年になる。

12 世紀から 13 世紀にかけて封建社会の安定化とともに新しいタイプの貴族社会が成立し、英雄の影の存在でしかなかった貴族の女性が心情の支配者として表舞台に登場

し、洗練と礼節を軸とする精神生活を重んじる文学が生まれた。かくして「宮廷風騎士道物語」roman courtois と称するジャンルの韻文による物語が、クレチアン・ド・トロワ、アキテーヌ公ギョーム、ジョフレ・リュデルといった様々な詩人によって作られた。内容は象徴的な変名で呼ばれる美しき「意中の奥方」dame と、彼女を崇拜し恋焦がれながらも社会的・感情的タブーに阻まれて近づけない若き騎士の憧憬と絶望と希望を切なく謳いあげるパターンが一般的である。このジャンルでは女性は常に理想化され、崇められ、偶像化されて描かれるが、それはフランス人の精神文化を運ぶ馬車の両輪の片方の車輪とも言える「優麗典雅の精神」esprit courtois を示すものである。

II. 教化文学と庶民風文学

1. 教化文学

中世フランスは13世紀に政治・文化的に絶頂を極める。パリ大学が生まれたその頃、庶民の教化を狙った教化文学が登場する。このジャンルの最高傑作は4,000行からなる夢物語、ギョーム・ド・ロリスの手になる『薔薇物語』である。嫉妬、羞恥、恐怖などの観念を擬人化した寓意的人物を駆使して恋愛論議を繰り広げる寓意文学の傑作である。

内容は、意中の貴婦人を表す「バラ」に恋した若者は擬人化された「歓待」に導かれて恋人に近づきキスしますが、「嫉妬」や「悪口」がバラを塔に閉じ込めてしまうというものです。これはいわばアレゴリー（比喻）を用いた夢物語であると同時に、正しい宮廷恋愛の教義であるとも言えよう。40年後にジャン・ド・マンが続編を書いたが、両作品には殆ど共通性はなく、エスプリ・クルトワはすっかり影を潜め、内容も自然主義的理想主義に立脚したものとなっている。そこでは「バラ」は性器の象徴となり、ロリスの騎士道的な女性崇拜に対する辛らつな批判が展開される。

2. 庶民風（笑いの）文学

Bourg・町に住む人々が徐々に豊かになり市民階級（Bourgeoisie）の勃興期ともなると、町人の生活を題材とする文学が生まれてくる。なかでも有名な二流派は『狐物語』*Le Roman de Renart* と「ファブリオ」Fabliau である。

(1)『狐物語』は動物社会に仮装した現実主義的な笑いの文学で、「誑かすのが得意なルナール狐が逆に手玉に取られて、弱いものいじめに失敗する」といったふうな中世人に好まれた状況を設定して、明るい無邪気な笑いを誘うものである。イザングラン夫妻（狼）、ノーブル王（ライオン）、シャントクレール（雄鶏）などの様々な動物が夫々の種族的特性を発揮して物語を構成する。たとえば、ルナールが狼の女房エルサンと浮気をする場面では「エルサンは高々と尻尾を上げた」のような性的なくすぐり描写もある。

(2) ファブリオ（御伽草子）は「笑話」であり、フランス短編小説の祖とも言える日常生活に取材した滑稽な風刺韻文小説で、もはや領主や教会に媚びる必要を感じなくな

った「市民」の批判的発言が風刺の姿を纏ったのである。

『アリストテレスの物語』では、インド遠征の折り土地の女奴隷に心を奪われたアレキサンダー大王を諷めるため、女の部屋に意見をしに出向いたアリストテレスは逆にその美女に魅了され、自分も素っ裸で四つんばいになって、背中に美女を乗せて歩いているところをアレキサンダーに見られてしまう。

性的・糞尿譚的くすぐりやパロディーなど、卑猥で不道德で陽気な笑いがそこにある。このジャンルでは特に聖職者と女性が手ひどい扱いを受けている。人妻に手を出して町の笑いものにされたあげく大事な一物を切り落とされるお坊さんがいたり、また女性（女房）は必ず浮気をする存在として描かれている。

このような作品が醸成するものもまたフランス精神である。それは先ほどの「エスプリ・クルトワ（優麗典雅）」と並んで両輪の片方を成す「ゴール精神」*esprit gaulois* と呼ばれるもので、後の16世紀に登場するフランソワ・ラブレーに代表される「猥雑豪快」の精神を言う。

1400年頃に書かれた『結婚15の楽しみ』*Les Quinze Joyes de Mariage* は、女の狡智と偽善に嘲笑を浴びせる。この作品は、今日的な意味で真の小説のはじまりと言える。

15章のコントのすべての結語は、「そこで亭主はへとへとになって命を削りながら、あわれ、その生涯を果てるのである」「そこで亭主は常に詫び悔いて、あわれ、哀しく生涯を終わるであろう」といった呪いの言葉で終わっていることから窺えるように、実はこれは結婚生活における夫の「楽しみ」どころか「苦しみ」を描いたものなのである。男性諸氏はすべからず身につまされながらその悲哀に共感されること請け合いの代物。

こうした作品は、中世のいわゆるマリア崇拜に由来する「貴女崇拜」*frauendienst* と対蹠的に存在した「女性嫌悪・蔑視」*misogynie* の文学であり、ここでは女性の悪知恵、妻の権力の重圧といった数々の女性の悪徳が露骨に描かれている（作者不詳）。庶民階級の夫婦生活は時代を超えて似たり寄ったりであることが分る。

III. 16世紀 ルネサンスの文学

renaissance はフランス語で「再生」を意味する言葉。精神・物質文化がキリスト教一色であった中世の時代に死に絶えていた古典古代が再生したと考えられた結果がこのような名称となった。

「神がすべてであって、人間はその意志のままに操られる虫けら同然のものである。また、人間は原罪ゆえに本性悪のものとして生まれついている」とする中世の人間観に対して、自然にあるがままの人間を肯定し、その諸能力を全面的に発現させようとする機運が人々をして、キリスト教以前の古代文化の研究に奔らせた。かくして人間尊重の精神、またそれに基づく古典語・古典文学研究にたずさわる人たちが現れる。合理主義的で実証主義的な立場から新たな人間研究を目指す文芸運動を推進する人々は、まず古代ギリシャ・ローマの文献（古典）を読むことからその研究作業を始めたので、人間主

義であるヒューマニズムを特に「人文主義」と言い、たずさわった人はユマニスト humaniste と呼ばれた。その代表者はオランダのエラスムスだが、フランスにはそのエラスムスを父とも仰いだ偉大なユマニストが登場する。この時期最大の作家フランソワ・ラブレーである。

1. ラブレー François Rabelais

優れたギリシャ学者にしてリヨン市立病院の有能な医師でもあったラブレーは『ガルガンチュアとパンタグリュエルの物語』という 5 巻からなる巨人物語を残した。ノートルダムの鐘を馬の鈴にするような巨人ガルガンチュアと息子のパンタグリュエルが繰りひろげる荒唐無稽で破天荒な騎士道的冒険物語の特色は、猥褻で糞尿譚的な表現にある。その意味でこの作品はエスプリ・ゴロワの最右翼に属しており、ために人間の尊厳性を貶めるという理由で 17 世紀古典主義の時代には等閑に付された。

しかし、後世アランが「いずれにせよ猥褻は烽火の打ち上げである」と語ったように、こうしたスカトロロジーはソルボンヌを頂点とするスコラ哲学を打破し、教会全体を揺るがす強力な武器になったことは事実であろう。

彼の主張は、理想郷とも言うべき「テレームの僧院」の規則「おのれの欲するところを行え」に端的に窺えるように、「人間は誰しも卑猥な本性を備えているのだから、自然の欲求を恥じる必要はない。さもなくば偽善者となる」ということである。要するに人間のすべての力の精神的・肉体的解放としての完全な満足の追求であり、また、キリスト教の原罪思想から来る人間性悪説に対抗する性善説の主張であり、物語は人間性と自然賛美の書と言える。

2. モンテーニュ Michel de Montaigne

モンテーニュは小説家ではないが、フランス・ルネサンス期の最後を飾る『エッセー』（随想録）を書き残したことによって後世に大いなる影響を与えたフランス文学を語るに避けてと通れない人物である。

モンテーニュは 1562 年―1598 年の 30 余年間カトリックとプロテスタントが敵対した「宗教戦争」の時代、新教のアンリ・ド・ナヴァール、旧教徒側のモンリュックなど双方の重要人物と親しく付き合い、最終的にアンリ IV による「ナントの勅令」によって戦乱が治まるまで、双方の敵対関係の是正に尽力した。ある意味で『エッセー』は彼の政治活動の苦悩が醸成した傑作ともいえる。

さて『エッセー』の内容・形式について言えば、これはユマニスト的知識の集大成であり、社会の様々な問題について古今の作家を縦横に引用しつつ論じる形をとっている。時代がそうさせたのであろうが、とりわけ彼の関心を引いていたのは、親子兄弟が敵味方に分かれて殺しあう狂気 folie についてであったと思われる。人間はもっと寛容 tolérance になれるはずだと。彼は自分自身を、また一般に「人間」を観察・考察するこ

とによって、人々が視野の狭さと偏見からくる無理解のために相争っていることに思い当たり、疑問を呈しているのである。彼は物事をある一つの立場から固定的、断定的に捉えるのではなく、あらゆる角度から眺めることを勧める。そして物事や人間の「本性」ではなく、その「動き」を描いたのである。いわば相対的なものの見方、相対主義の立場をとった人と言える。

こうした深く人間を観察し、考察する態度は 17 世紀になって「人間心理のメカニズム」を探求する形でその後のフランス文学の主流となり、ラ・ファイエット夫人の『クレヴの奥方』をもってその嚆矢とする「フランス心理小説」の芽生えにつながってゆく。思想的にはその後のデカルト、パスカル、ラ・ロシュフーコー、ルソーなどが彼から様々に養分を汲み取ることになる。

こうしたモンテーニュのものの見方は、後述する 17 世紀のモラリストの輩出につながるものであり、彼がフランス・モラリストの祖と言われる所以でもある。また 16 世紀中葉マルグリット・ド・ナヴァールは母と息子が近親相姦のタブーを犯す場面で有名な小説『エプタメロン』を著した。

IV. 17 世紀 古典主義 モラリストと合理思想の芽生え

この世紀は一口に言って古典主義演劇の時代であり、こと小説に関しては残念ながら見るべきものが多いとはいえない。ルイ XIV 世による絶対王制の確立と共に政治、宗教、文化のあらゆる面で統一の機運が高まり、秩序に対する憧れは文学においてフランス語の整理と純化となって現れた。更には教養があって魅力ある女性を中心とする社交界・サロン（パリだけで 800 を数えた）の発展がこの傾向に拍車をかけた。理性尊重、形式の完備、文章の彫琢、趣味の洗練をこととする古典主義 classicisme は、想像力の飛翔と繊細な感性を生命とする「小説」に不向きな時代であったのだろうか。

1. モラリストたち

16 世紀のモンテーニュの系譜に属する一群のモラリストと呼ばれる作家が多く輩出した。moraliste は道学者というよりは“人間性の探求者”というほどの意味である。フランス人の心理的観察の習慣とモラルに対する関心、また具体的な人間の性情を知ろうとする独特の国民的気質が作り上げた文学者のことである。モラリスト的傾向はすべての時代を通じて伝統的に流れている。

それはたとえば「芸術と想像力と情熱の流派であるイタリア文学」「感受性と詩の流派であるイギリス文学」「夢想と形而上学の流派であるドイツ文学」に対して、あくまでも「人間の研究を主体とする文学」という点で、フランス文学の精神を鮮明にイメージさせてくれる文学者なのである。

モラリスト輩出の要因はいくつも考えられるが、時代との絡みで言えば、やはり絶対王朝の成立・完成と「社交界」の形成を挙げるべきであろう。宮廷で成功したり、社交

界で貴婦人たちの寵を得たりするためには、人間の心のメカニズム、つまり人の心の動きを咄嗟に読み取る術を心得る必要があったことによる。華やかな社交界の裏側には常によどんだ野心、陰險な謀略、他人を陥れる罠が待ちかまえていたので、宮廷においても恋愛ゲームにおいても、いわゆる“勝ち組”になるためには、なによりもまず人間を“観察”研究する必要があったからであると考えられる。

こうした人間研究の成果を彼らは随筆や箴言もしくは散文に託した。代表作家としてはラ・ブリュイエール、LESS 枢機卿など様々であるが、ここでは特に有名なラ・ロシュフーコーの『箴言』*Maximes* (1665 年) から幾つかの箴言を紹介してみよう。

「われわれの美德はほとんど仮装した悪徳にすぎない」

「褒めるのは普通褒められるためだ」

「運勢と気質が世界を支配している」

「若くても美人でなければなんにもならない。美人でも若くなければなんにもならない」

ロシュフーコーの『箴言』は貴族のペシミズムを反映しており、その眼差しは人間のすべての行動を「利益」と「自己愛」に還元してしまう冷徹なものである。

2. フランス心理小説の芽生え

この時代モラリスト的傾向を持つ二人の閨秀作家が出た。そのうちの一人は、嫁いだ二人の娘に殆ど偶像崇拜に近い愛着を示す、母性愛の証言とも言うべき 1500 通の手紙を送り続けたセヴィニエ夫人である。それらの手紙はサロンで絶賛され、彼女の死後 30 年を経て書物にまとめられた。

またラ・ファイエット夫人は小説『クレヴの奥方』によって文学史上不朽の名を残すことになる。簡単なあらすじは次のようなものである。

クレヴ公のもとに嫁いだシャルトル嬢はある日のこと、若くて美しいヌムール公と知り合い互いに恋におちる。偽りの証拠に騙されたクレヴ公が妻の不貞を疑いはじめたので貞淑な妻は夫に事実を告げ、保護を求め、身の潔白を証明するが、夫は身も心もさいなまれて死んでゆく。自由の身となった妻は愛する人との結婚を断念し修道院に入る。

いわゆる精神的“不倫”のドラマであるが、精緻な心理分析と的確な描写によって、フランス心理小説の始祖として、また古典主義小説の傑作として高い評価を受けている

そのほか、エスプリ・クルトワの系譜でオノレ・デュルフェの手になる、羊飼いの娘アストレと牧童セラドンの純愛を描いた長編田園小説『アストレ』(1607-19) や、挿絵の恋愛地図 *carte de tendre* で有名なスキュデリー嬢の小説『クレリー』などがある。上記両作品は当時サロンの流行と共に育まれた、行過ぎた純化・洗練の風俗であるプレ

シオジテ *préciosité* “気取りの趣味”の作品である。

才気をてらうあまりに行過ぎた気取りに陥った才子はプレシュール、才女はプレシュールズと呼ばれた。彼らは仲間内だけで通用する隠語を用いて悦に入っていた。鏡を「美の相談相手」、一杯の水は「内部の沐浴」、白髪を「貴方はどうやら恋の領収書をお持ちになったようだ」という具合に、独りよがりで滑稽な風潮であった。

3. 合理主義の芽生え アンチ・ユマニストたち

『エッセー』のように、博覧強記で偉大な古代人に寄りかかった引用でつづられた作品とは対蹠的に、対象と主体の間に何ら狭雑物を介入させず、直接対象と対峙し、自己の理性と感覚のみに基づいて対象に取り組もうとする新しいタイプの文人が現れた。「自然という開かれた大きな書物」を自分の目で読もうというのである。彼らは小説家ではないが、後世の文学に多大な影響を与えた。

(1) デカルト René Descartes は『方法序説』(1637)によって唯物論的合理主義の発展に資する新たな思考体系を発表し、「真実」をつきとめるためには人間の理性と判断力がいかに重要であるかを述べた。彼の言った *cogito ergo sum* “われ思う、ゆえにわれあり”という有名な一節は、従来の学問はすべて疑わしいもので、人生に有用な明晰で確実な認識には無縁なものであるが、それを「疑っている自分が存在している」ことだけは疑い得ないという意味のフレーズである。こうして彼は自分の学んだユマニスト的教育を退けた。

また、『情念論』(1649)を著し、情念 *passion* はその源を肉体に発する粗暴な衝動であるので、靈魂は情念に身を任す前に理性と意志による二重の監督を情念に課すべきであると説いた。このようにデカルトは「理性」の重要性を強調し、人間の理性に至上権を与えた。この考え方は後の哲学者や科学者の思考方法を決定づけた合理主義と呼ばれるものである。当時学問上の論文はラテン語で書かれるのが慣例であったが、彼は敢えてフランス語で発表するという新機軸を試みた。お陰で哲学が一步一般人の精神世界に歩み寄ったわけである。

(2) パスカル Blaise Pascal は「考える葦」の章句で有名であるが、11歳で『音響論』を書き、12歳でユークリッド幾何学の問題を自己流に証明した神童だった。その後『真空序論』『円錐曲線試論』など数学、物理学の研究で名を馳せるが、文人の領域でも大きな仕事を残した。病弱であったパスカルは1654年心の中に神の声を聞き、科学と理性が自分の心の無限の広さを満たしえないことに思い到り決定的回心をする。ジャンセニスムの牙城ポール・ロワイアル修道院に出入りしていた頃の1655年『アウグスチヌス』に関する命題をめぐる生じたイエズス会派との抗争・論争で彼はジャンセニスム擁護に立ち上がり『田舎人への手紙』を著した。精緻で辛らつな論法と生き生きとした文体による18通の手紙はフランス語散文の傑作とされている。

また1670年には無心論者をキリスト教に導く意図で、「人間は考える葦である」とい

うフレーズで有名な『パンセ』*Pensées*という断章を書いた。それは「合理主義」「宗教的無関心」「懐疑主義」「無神論」などに対してキリスト教を弁護するためのものであった。人間の常態は「空しさ」にあり、その空しさを払拭するために人間は様々な行動を起こすが、そうしたすべては「気晴らし」*divertissement* でしかないと彼は考える。パスカルにとっては信仰以外の人間の営為は学問でさえも気晴らしにすぎない。人間の偉大さは「考える」という行為にあるが、神なき人間は、また神を求めぬ限りは「悲惨な」存在でしかない。

最終的に彼は「科学の領域は極めて狭いものであり、科学によっては人間存在の実体も原理も原因も認識しえない、つまり科学は全く相対的な(不完全な)ものにすぎない」ことを悟り、絶対的に無限に確実なものを求めて半ば科学を捨てた。言ってみれば、彼はデカルトの唱えた人間理性の“限界性”に、つまり、“論理の整合性が必ずしも万能ではない”ことに思い到ったのではないだろうか。

V. 18 世紀 啓蒙思想と小説

この世紀は「光明 *lumières* の世紀」と呼ばれる。光は悟性、認識、精神の明晰を意味するものである。絶対王政下、窮屈さと息苦しさを感じていた国民は太陽王ルイ XIV 世の死を祝い、誰はばかることなく現世の生活を享楽し始める。人々は生きる喜びが楽天的に肯定される時代が来たのだと感じた。それは、ロココ調の建築、バッハやモーツァルトの音楽、ヴァトーやフラゴナールの絵画に端的に表れている。貴族の没落が始まり、ブルジョワジーが台頭し、奢侈享楽を求める傾向が強まってゆく。パリの人口 60 万人に対して 2 万人もの娼婦がいた事実が文化の爛熟ぶりを物語っている。

他方知識への欲求の高まりはジャーナリズムの隆盛を招くことになった。それは最終的に大革命を導く原動力となった。

1. 批判精神と小説

この時代になると、小説というジャンルが徐々に市民権を獲得してくる。モンテスキュー、マリヴォー、ヴォルテール、ディドロ、ルソー、ラクロ、サドなどが登場し多くの作品を残したが、内容的には概して理性を普遍的審判者とした「自由検討の精神」から政治問題・社会問題を対象にしたものが専らであって、全体としてこの時代の小説は前世紀のデカルトの合理主義や自由思想家の思想の趨勢に拍車がかかった、懐疑と批判検討の精神が横溢したものである。一見矛盾するようだが、彼らは合理主義者でありながら、同時に感性の称揚を重視した。「わたしは誰よりも感じやすい」(ルソー)。

(1) モンテスキュー Charles-Louis de Montesquieu は、日本では『法の精神』によってよく知られているが、実は彼の小説『ペルシャ人の手紙』は空前の大ヒット作品であった。

フランスに初めて接したユスベックとリカというペルシャ人の驚きや、フランス人に

とって当たり前のことが彼らに奇異に映る様子を描いたものである。結局それは東洋文明との対比によってフランス文明が絶対性を失う過程、いわば自国の文明批評になっている。カフェ、オペラ座、社交界、僧、軍人など様々な現象を手紙形式の小説に詰め込んでいる。軽妙なふざけた文体の奥に、真面目な鋭い風刺の潜むこの作品は、当時の人々の異国趣味を、またユスベックの後宮の妻妾たちの情事などを盛り込んだために、好色趣味をも満足させたことが成功につながった。

(2) アベ・プレヴォー Abbé Prévost は幾多の長い回想録小説を残したが、現在も読まれているのは恐らく『マノン・レスコー』だけであろう。「隠棲した貴族の回想」である作品の主人公デ・グリューが、恋人マノンとの破滅的な恋の顛末を回想する。聖職者を志していた青年デ・グリューは美しいマノンへの恋情絶ちがたく、彼女のために名誉も地位も財産もすべてを捨てて尽くす。結局彼女は社会から放逐されてルイジアナ（当時はフランス領）の流刑地に送られ、デ・グリューもついて行くが、マノンは死に、青年はその亡骸を抱いてアメリカ大陸をさまよう。

道徳や宗教を凌駕する情念の強さ、煩悩に振り回される主人公の宿命的な半生が如実に描かれたフランス文学史上屈指の恋愛・心理小説であり、理性に対する感情の優位という点では、19 世紀のロマンチズムを先取りした命題が窺える。爾来マノンは男を振り回して破滅させる「宿命の女」femme fatale の原型になった。

(3) コデルロス・ド・ラクロ Choderlos de Laclos の『危険な関係』は情事に飽き、愛を感じられなくなった男女が、恋愛遊戯の果てに破滅する物語。この書簡体小説に盛り込まれた内容は、ある意味で女性征服（誘惑）の快楽による人間悪の追究であるが、登場人物の心理を様々な角度から照らし出したこの作品は『クレヴの奥方』以来の心理小説の傑作とされる。

その他にはヴォルテール、ディドロ、ルソーらの哲学者 philosophes と呼ばれる作家たちの膨大な小説群がある。

2. 「本当らしさ」 vraisemblance の追究

当時の作家は小説技法上の形式にこだわった。小説というジャンルが市民権を得て、文学の領域のなかでヒエラルキーの頂点に登りつめるのは 19 世紀の半ばである。小説は、作家が勝手に空想を膨らませて作った荒唐無稽なお話で、人間を墮落させるものとしか思われていなかった時代が長く続いていた。そこで、「これは虚構ではありません。本当のことなのです」という衣装を纏う工夫がなされた。こうして 18 世紀に生まれたのが「書簡体小説」である。手紙のやりとりの形は「本当らしさ」に貢献するだろうと作家たちは考えた。モンテスキューは自分が初めて書簡体を採用したと思い悦に入っていたが、実は、イギリスのリチャードソンが既にこの形式で書いていた。そのほか、他人から聴いたお話である風を装う「聴取型」、ふとしたことから文書を見つけたとする「発見原稿型」など、18 世紀の作家たちは様々な工夫して「本当らしさ」を演出した。

VI. 19 世紀 小説の世紀

19 世紀初頭ベートーヴェンの登場によって音楽の世界は頂点を極めた、という言う人がいる。あとは衰退とは言わぬまでも横ばいもしくは実験的作品のみであると。が、その流儀で言うならば「小説」も、形式的にも内容的にも 19 世紀後半から 20 世紀前半で完成を見て、あとはその亜流もしくは実験的な作品のみということが言えるかもしれない。そういう言い方が許されるくらいに小説はこの世紀に大いに発展・隆盛を極め百花繚乱と咲き乱れた。

1. ロマン主義

18 世紀後半、合理主義的擬古典主義の時代に傍流であった感性的な作品や自然尊重の思想が後のロマン主義を生み出す源であるが、その先駆けと看做されるのが J.-J.ルソーの『新エロイズ』である。またスタール夫人によって紹介されたゲーテやシラーのドイツ文学や、イギリスのシェークスピアなどの影響のもとに発展したフランス・ロマン主義の特徴は、想像力の飛翔と深化にある。要するに誰はばかりことなく自分の感情を謳いあげ、自我を解放し、同時になにものにも捕らわれない目で歴史を新しく見直し、相対的な考え方・ものの見方を深めることに目覚めた近代精神はフランス革命の原動力であったが、同時にロマン主義の文学運動を触発した。主要なジャンルはユゴーやヴィニールに代表される詩作品である。

(1) シャトーブリアン François-René de Chateaubriand の『ルネ』(1802) は大革命によってすべての生活基盤を失った青年ルネが、亡命の惨めな生活を余儀なくされ、過剰な情熱をもてあましながらも未来への展望も持てず、孤独感に苛まれて次第に気力を喪失し、絶望的な虚無感に到る当時の貴族の子弟に共通する、青年のやりきれない心情を描く。

(2) ジョルジュ・サンド George Sand の作品では特に『魔の沼』と『愛の妖精』をお勧めしたい。1839 年以来ふるさとノアンに定住した彼女は地方の農民の素朴な姿に感動し、彼らを主人公にした田園小説を発表したが、その作品には一貫して共和主義、人道主義的な主張が伏流として認めらる。

(3) スタンダール Stendhal の『赤と黒』(1830) は彼が 47 歳で書いた綿密な心理分析とリアリズムの白眉ともいえる傑作として名高い。野心満々で上昇志向の強い百姓の子せがれが女性を籠絡することによって出世の階段を登りつめるが、その後破滅することで本当の愛と幸せに目覚めてゆく。コンプレックスの強い青年が自分の臆病な気持ちにどうにか打ち勝って、他人との心理的駆け引きを演じる屈折した心理が見事に描かれる。

2. 写実主義の小説

ロマン主義の感情の露骨な吐露や空想の飛躍が徐々に感傷過多で懦弱な傾向に奔るようになると、反動的に理性によって統制された世界への信頼を人々は回復するようになった。こうして感性よりも理性、内面よりも外観の観察を重視する「小説は現実を映す鏡」という考え方が生まれる。しかしながら、19 世紀後半・第二帝政期を支配したこの文芸思潮は、創作行為や表現形式において統一された型をもつものではなく、せいぜい実証主義の支配と科学の進歩という近代性・近代社会を見据えた視座が作家に共通する精神と言えよう。

細かく日常の情景を映し出し描写する技法を採用したこのやりかたは「写実主義」*réalisme* と呼ばれる。この文芸思潮は一般にスタンダール、バルザックに始まるとされているが、一応フロベールの『ボヴァリー夫人』*Madame Bovary* (1857)をもってその典型とするのが通説だ。しかしフロベール自身はリアリストと言われるのを嫌った。フロベールの作品は客観主義 *objectivisme*、不動不感性 *impassibilité*、没個性 *impersonnalité* などをその性格とする。

彼の小説作法の特徴は客観描写にある。人間と事物の外観だけを自分の目に映るままに読者に伝えることを目指す。つまり人間の内面を描かない、事物に感情移入をしない、要するにカメラアイに徹することであった。

たとえば「おお雄々しい山」というような描写は客観的でない。「山」は「山」とだけ記述すればよい。「おお雄々しい」は作者の感情移入であるから、そのような描写は避ける。さらに没個性や客観主義の方法は作者の自己主張を作中から消去せしめてしまった。バルザックは作中のドラマが進展している最中突然「ところで私はこう思うのだが」と自分（作者自身）の顔を覗かせることがあるが、フロベールはあくまで外観描写に固執した。こうしたフロベールのこだわりは「語り手の不在」と「主題の無形化」が小説芸術の理想であるとする考えになり、結局「何について書かれたのでもない本 *livre sur rien*」の執筆へ彼を駆り立てた結果が作品『ボヴァリー夫人』になった。

VII. 20 世紀の小説

総体的に見て 20 世紀の小説と 19 世紀のそれは書き出しに違いが認められる。19 世紀では小説の導入部に大きなスペースが割かれているものが多い。平凡で月並みな生活感覚の情景で始まり、徐々に生活から冒険へ、平静から興奮へ、無関心から執念へと大きくうねるように少しずつ移動操作・トラヴェリングしてゆき、突然ある出来事が起きる。その手法は往時の映画の冒頭部を思い起こしていただければよい。たとえばバルザックの『ゴリオ爺さん』の冒頭はドラマが始まる場所の遠景描写から徐々に焦点が近景へとフォーカス・移動し、その情景・家のたたずまいや植物群をカメラアイが舐めるようにきめ細かく記述してゆく。

この様式はたとえばモーパッサンの『帰村』のような短編小説でも同様である。人物

が登場するまで、かなりのスペース（ページ）が情景描写に充てられている。今から 150 年前のノルマンディーの海辺の寒村風景、海、山、ペンペン草の生えた漁師小屋、にわとり、畑に生えた野菜、網などの描写が続き、やっと「母ちゃん、あの人また来たよ」という長女の声でドラマが始まる。

ところで、20 世紀小説の冒頭部ではこうした情景描写がないことが多い。

—きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かもしれないが、私にはわからない。
(アルベール・カミュ『異邦人』)。

—なにかが私のうちに起った。もう疑う余地はない。
(ジャン＝ポール・サルトル『嘔吐』)

このように小説の導入部においてドラマの生起する情景の描写がなくなって、いきなり読者が作中場面の中に放り込まれる技法が採用されている。いわゆる「唐突性」と呼ばれる書き出しになっているのである。こうしたやり方の理由の一つはやはり、空間(国境・人種)と時間(時代)を超えた、人間の普遍的な有り方の提示にあるのではないかと思われる。すなわち、“現実の複写”と称される正確な観察と詳細な描写、細部表現が幾重にも塗り重ねられれば塗り重ねられるほど、劇的行為(アヴァンチュール)は読者から遠のくからである。たとえば、先ほどの『帰村』を読み終えたあと、しばしの余韻に浸ることはあるだろうが、結局この話は、150 年前のフランス・ノルマンディー地方で生起したことであって、現在日本で暮らすわれわれとは関係のないことだ、ということになってしまうのである。情景描写が詳細で丹念であればあるほど、それは「他人事」に終始してしまうことに気づいたのではなかろうか。20 世紀の小説家は、ドラマを国境や時代を超えて、読者自身のこととして味わってほしいと思ったのではないだろうか。

(川神傳弘／かわかみ・もりひろ：文学部名誉教授)

IV

フランス演劇

—劇的状況の探求—

はじめに

演劇というジャンルは、現在あまり人気がありません。

我々は今日、普通「作家」というと小説家のことを思い浮かべますし、書店に行っても戯曲や演劇関連書などほとんど置かれていないのが現状です。全然売れないからです。しかし、演劇は、決して小説や詩より劣ったジャンルなどではないのです。

歴史を遡ってみましょう。ヨーロッパ文学の源泉は、「詩人の父」と称されるホメロスの叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』です。ところがこの二作と並んで、世界文学の最初の頂点とも言うべき作品を著したのは、実は劇作家たちなのです。紀元前五世紀、ギリシアに三大劇詩人といわれる作家が生まれました。アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスです。そして彼等の残した戯曲（代表作は、アイスキュロス『オレスティア』三部作、ソフォクレス『オイディプス王』、エウリピデス『フェニキアの女たち』）は、後のヨーロッパ文学・思想に多大な影響を与えたのでした。例えば精神分析学のフロイト(1856-1939)が「エディプス・コンプレックス」という概念を見つけたのは、ソフォクレスの『オイディプス王』の筋立ての中でした。またアリストテレスの『詩学』（紀元前四世紀）という著作は、現代最先端の文学理論研究家が必ずといっていいほど参照する本ですが、『詩学』とは、一冊のギリシア演劇論にほかならないのです。

つまりギリシア人たちは、人類の文化的な世界遺産のようなものを「演劇」という形で残したわけですが、これを出発点として、ヨーロッパ演劇は数多くの名作・傑作を生み出します。ギリシア劇の偉大な継承者セネカ（紀元後一世紀ローマ帝国の作家・哲学者。ちなみにローマ人の文学はラテン語で書かれたので、ラテン文学という）の激越な悲劇は、十六世紀のエリザベス朝演劇に強く影響を及ぼし、イギリスはかの天才シェークスピアを生み出しました。またフランス演劇は、十六・十七世紀からギリシア・ラテン文学を積極的に模倣・研究し、フランス古典劇といわれる作品群を生み出しましたが、これは、後のヨーロッパ文学の規範、つまり一種のお手本として機能することになるのです。

とここまで文学史的に、ヨーロッパに於ける演劇の特権的な位置について強調してきましたが、演劇の価値というものは、もっと身近なものとして確認できるはずです。現

代の日本人で、映画や漫画やテレビドラマが嫌いな人は少ないと思います。つまり、それがスクリーン上であれ、テレビの画面であれ、舞台上であれ、世の中の一切の「ドラマ」（そもそもはギリシア語で「行動 action」を意味する言葉）というものは、我々を魅する強烈な力を持っていて、我々は、常に、何故か、「劇的（ドラマチック）」なフィクションに無性に飢えている存在なのです。

勿論、昔から、「演劇嫌い」という人は多く存在してきました。ある人々にとって演劇というものは、少し重たくて、濃厚過ぎるジャンルかもしれません（役者の生々しい存在感、様式的で「芝居がかった」胡散臭い世界、等々）。しかし、劇的なもの、激しいもの、普通じゃないもの（例えば、人間の欲望、情念、狂気、暴力、矛盾、阿呆らしさ、愚かしさ、不正、苛酷、純粹……）を体験する（観る・読む）こと、そしてそれらに興奮し感動することを通じて、我々は恐らく、強烈に、生の核心のようなものに触れることができると思うのです。

話がやや抽象的になってしまいましたが、以下からは、フランス演劇がいかに「劇的な」ものを作り出そうと工夫したか—つまりいかに面白いものであろうとしたか—を具体的に見てみましょう。ただしフランス演劇と一口に言っても、その切り口は時代・作家によって当然異なっていて、芝居の素材や形式や主題は多種多様です。このセクションでは、中途半端な「フランス演劇史」を書くことはせず、フランス演劇のうち飛び切り「普通じゃない」話をふたつだけ選んで、戯曲の楽しさをほんの少しですが紹介してみます。

I コルネイユ (1606-1684)

フランス演劇は、中世のキリスト教劇（^{ミラークル}奇蹟劇、^{ミステール}聖史劇、^{パッション}受難劇、等）や、民衆的な世俗劇（^{ファルス}笑劇、^{モラリテ}教訓劇、^{ソ・テ・イ}阿呆劇、等）の時代を経たのち、十七世紀にヨーロッパ文学の中心的な位置を占めることになりました。後の人はフランス十七世紀を「偉大な世紀 ^{ル・グラン・シエークル}le Grand Siècle」、十七世紀演劇を「古典劇 ^{ル・テアートル・クラシック}le théâtre classique」と呼びならわすことになりますが（ちなみに classique とはもともと、「教室 classe」で教えて大事に継承していくべき、という意味です）、この呼称には恐らく誇張がありません。当時フランスは、三人の傑出した演劇人を生んだのです。即ち、ソフォクレスの再来といわれたコルネイユ、エウリピデスの継承者と目されたラシーヌ、そして天才喜劇作家モリエールです。ここでは、彼等のうちの最年長者で「フランス演劇の父」とも言われるコルネイユを取り上げることにしましょう。

コルネイユの特質は、一言で言ってしまうと、「常ならざるもの ^{エクストラオルディネール}extraordinaire」への飽くなき志向、にあります。多作家の彼は、悲劇、喜劇、悲喜劇など様々な作品を書きましたが、基本的にはいつも観客を驚かせたり圧倒したりすることを念頭に置いて劇作するタイプの作家でした。コルネイユはある時「美しい悲劇の主題とは、決して本当ら

しくあってはならない」と述べていますが（『エラクリュス』「読者へ」）、これは彼の劇作家としての特徴を示す極めて重要な言葉です。彼は通常ありそうもない話、「普通 ordinaire」を「越えた extra」ものこそが、劇的なものの本質だと考えていたのです。コルネイユの代表作は「四大悲劇」といわれる『ル・シッド』『オラース』『シンナ』『ポリュクト』ですが、ここでは、彼の「尋常ならざるもの」への志向をあますところなく伝えている悲劇『エラクリュス』を紹介したいと思います。非常に込み入った筋ですが、要約すると以下ようになります。

コルネイユ『エラクリュス』（Corneille, *Héraclius*, 1647）

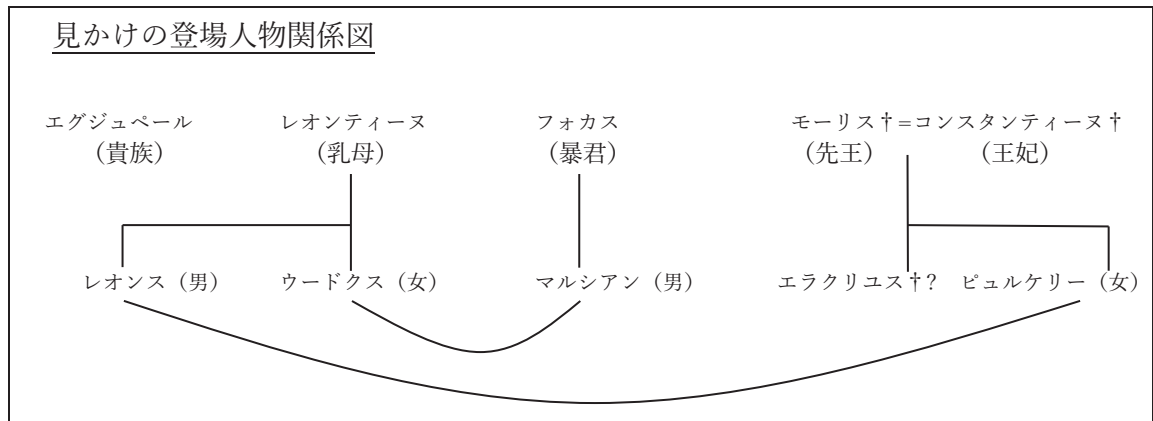
舞台は東ローマ帝国のコンスタンチノーブル。時代は紀元後六〇〇年頃。

今から二十年前、フォカスは皇帝モーリスを殺し、コンスタンチノーブルに君臨した。皇女ピュルケリーを除いて、皇子は全員抹殺した筈だった。しかし現在、町には皇子のひとりエラクリュスが存命との噂が走っている。民衆の反乱を恐れるフォカスは、息子マルシアンとピュルケリーとの結婚をもくろむ。正当な王位継承者のピュルケリーとマルシアンとが結ばれば、先王を愛した民衆の怒りも鎮まる筈だからだ。ところがピュルケリーとマルシアンは結婚を拒絶。フォカスはピュルケリーに「結婚か、死か」と迫るが、ピュルケリーは暴君の脅しに一步も譲らない。彼女は勇敢なレオンス（かつて戦場で、レオンスはマルシアンの命を救ったこともあった）と相思相愛であり、またマルシアンはウッドクス（レオンスの妹）と愛しあっているのだった。

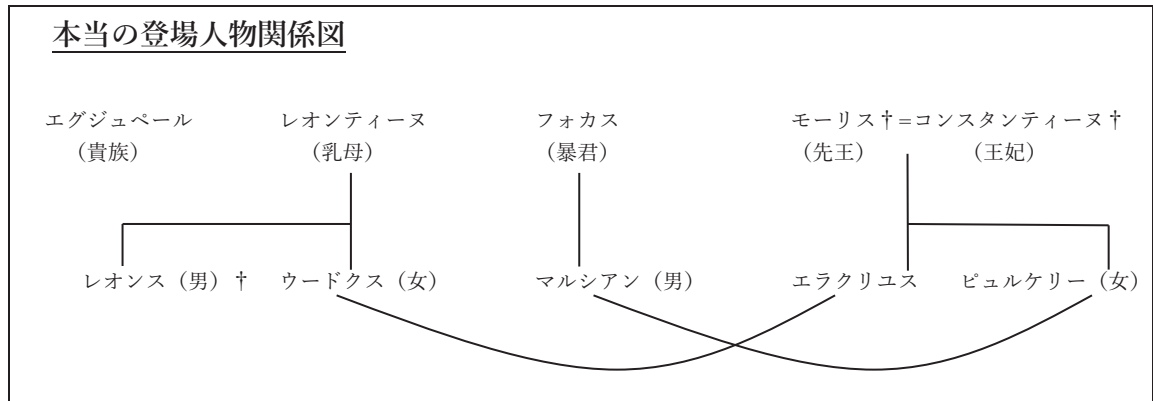
ところがレオンスとマルシアンの素性には秘密があった。二十年前。エラクリュスの乳母レオンティーヌは、実の子レオンスをエラクリュスだと偽って暴君フォカスに差し出し、その褒美としてフォカスの息子マルシアンの乳母となる。さらにレオンティーヌは、暴君がペルシア戦争で不在の間、助けたエラクリュスとマルシアンとをすり替えていた。そして現在この秘密を知っているのは、レオンティーヌ、ウッドクス、そして（マルシアンと思われている）エラクリュスのみ。つまり、暴君フォカスは、先王モーリスの嫡子エラクリュスを自分の息子として育てているのである……

ここまでいかがでしょうか？ 話があまりに錯綜していると思うので人間関係を図示しておきます。（記号†の付いた登場人物は戯曲の開始時には死んでいます）。

見かけの登場人物関係図



本当の登場人物関係図



以上の人間関係を踏まえて、話は乳母レオンティース（この戯曲の事実上の主役）の激越な性格にスポットを当てながら急転直下で進行します。

先王モーリスに忠誠を誓っている貴族エグジュペールが、レオンティース家を訪れ、モーリスが処刑される前に遺した手紙を見せる。モーリスはレオンティースが差し出した赤ん坊が息子ではないことに気付き、「エラクリュスはレオンティースの家にかくまわれている」と書き残したのだった。この手紙を見て、レオンス（実はマルシアン）は自分がエラクリュスであると思い込み、エグジュペールの仲間と共に仇討ちを決心する（レオンティースも偽エラクリュスに真実を明かさない）。ところがエグジュペールは暴君フォカスに、レオンス（実はマルシアン）がエラクリュスであると密告し、レオンス（実はマルシアン）は逮捕される。

（マルシアンと思われている）エラクリュスは、レオンス（実はマルシアン）を救うべく、自分こそが本物のエラクリュスだと真実を明かすが、迷った暴君は全ての鍵を握るレオンティースを尋問。真相を語れと脅しをかけるが、レオンティースは死んでも真相を明らかにしなないと逆に勝ち誇って宣言する。レオンティースの謎めいた態度のため、エラクリュスは自分が本当は何者なのかと迷い始める。暴君の筈のフォカスがエラクリュスの前で涙を流し「息子はお前だ」と嘆くからでもあった。しかしフォカスはやはり最後はエゴのかたまりで、エグジュペールが反乱の首謀者たちを宮殿に連行したとの報せを受けると、「反乱の危機が去った上は息子などもう

どちらでもよい、二人とも殺して、ピュルケリーとは自分が結婚すればよい」と宣告。若い三人の危機は頂点に達するが、その時、裏切り者と思われていたエグジュペールが仲間とともにフォカスを殺害（エグジュペールの見かけの裏切りは全て暴君に接近するためであった）。レオンティースは、二度目のすり替えを知っていた亡き王妃コンスタンティースの手紙を示し、エラクリュスはウッドクスと婚約。マルシアンには、これまで通りレオンスと名乗り国を支えよと命じて幕がおりる。

巧くまとめきれたか不安になりますが、先ず『エラクリュス』という戯曲は、コルネイユがさまざまな手を使って観客を混沌の中に引きずり込もうとする芝居、最高の眩暈^{イリュージョン}で我々を驚かせようとする劇だと言えます。中心にいるのは乳母レオンティースです。二度も赤ん坊をすり替えるレオンティースの策略は、登場人物と同時に観客の「目を眩ます」もので、全てを知る人間が欺く者・嘘つきである以上、真実がどこにあるのか全く分からなくなってしまうのです（エラクリュスは自分も騙されているかも知れぬと感じて、アイデンティティ・クライシスを経験しています。自分は、最良の人間なのか最悪の人間なのか？）。さらに彼女の謎以外にも、コルネイユは『エラクリュス』の筋を「未決の原理」に従って展開して我々を眩惑します（「サスペンス」とは、そもそもは、先行き・結末が宙ぶらりんになっていることです。^{サスペンダー}ズボン吊りを思い出して下さい）。観客に展開を読ませまいとするコルネイユの意図は、以下の二点、1) 大悪人フォカスが一度はエラクリュスに真率な父性愛を示し善人であるかのごとく振る舞い、更にまたそれを否定する、2) 善玉の筈のエグジュペールが仲間を裏切り、しかし最後には一番の功労者・忠義者であったと分かる、にも明瞭に表れています。

コルネイユには『舞台は夢』と題する傑作喜劇もありますが、『エラクリュス』とは我々の知覚・判断力を掻き乱し、好奇心を刺激し、最後に「あっ」と言わせることを至上命題とする、極めてエンターテインメント性に満ちた演劇的「夢の装置」なのです。

次に指摘すべきは、こうした驚くべきシチュエーションに匹敵する、人間の情念の異常さ・激越さです。「女傑、女丈夫」として造型されたレオンティースの性格がそれです。レオンティースは、皇帝モーリスの為なら我が子の命をも惜しまない女です。しかも、復讐の鬼となった彼女が暴君の子マルシアンをレオンスとして育てたのは、ただ、成長したマルシアンがフォカスを討てばよいからであり、さらに、もしもマルシアンがフォカス暗殺に失敗して殺されたとしてもその時フォカスは実子を殺したことになる訳で、レオンティースは「肉親殺し」という罰をフォカスの一族に与えようと画策していたのです（しかも二十年がかりの計画）。

この悪魔的とも言うべき烈女は、実際、単なる乳母でありながら、人間的な大きさでは皇帝を上回っていることが舞台上で示されます（四幕四場）。二人の若者のどちらが本物のエラクリュスか白状せよとフォカスから脅され、レオンティースは昂然と拒否して、次のように答えます。「出来るものなら見抜くがいい。勇気があるなら選ぶがいい。二人のうちの一方がお前の息子、一方がお前の主人だ。息子を愛して震えるがいい。王子を探して震えるがいい。二人の間にせいぜい揺れ動くがいい、私はお前の不安を見るのがたまらない。大笑いしてやるのさ。私を殺すというのかい。私と一緒に息子の秘密は、永遠に闇の中だ」（四幕四場）。これに対して暴君は、よろしい、言わぬのなら二人とも殺してやる、と凄みます。するとレオンティースは「殺すがいい、その時お前は、エラクリュス様と一緒に、お前のたった一人の息子を自分の手で殺すのさ」とやり返し、フォカスは驚きいって、いままでお前にあれほど目をかけ貴族にもしてやったというのにその恩返しがこれか、となじります。すると烈婦は、「私がいま、ふたりのどちらかに「お前がマルシアンだ」と言ってやっても、ふたりともそれを否認するに決まっている。何故なら私は、お前の汚れた血が流れる息子を、立派な人間に育ててやったからだ。これ以上の恩返しがあるかい？ お前はむしろ、私に礼を言うべきじゃないか」と、さらにフォカスの上を行く返答をするのです。コルネイユ劇の最大の魅力のひとつは、こうした劇的高揚感のエスカレートしてゆく対決・論争・舌戦（agon と言います）にあるのですが、わけでもレオンティースの「出来るものなら見抜くがいい。勇気があるなら選ぶがいい。《Devine, si tu peux, et choisis, si tu l'oses》」という挑発的な台詞は非常に有名で、まるで「大見得を切る」歌舞伎役者のような、巨大な人格が突如舞台上に立ち上がるかのような興奮がこもっていると思います。

以上ごく簡単に、『エラクリュス』の特質を述べてみましたが、コルネイユのこうした娯楽性を重視する姿勢、その錯綜した「異常な世界」への志向には、（当然ながら）反論もありました。芝居というものは「自然な naturel」、 「本当らしい vraisemblable」展開を見せなければ、全くの絵空事として観客にそっぽを向かれてしまう、という考え方です。コルネイユの最大のライバルだったラシーヌがその急先鋒でしたが、この「驚くべき筋」か「自然な筋」か、という対立は実はなかなか解決しがたい問題です。我々はあまりにも荒唐無稽な話にはついていけません、かと言って、全く「普通」で何の起伏もない筋にもあまり入り込めないからです。いずれにせよ、もし我々が演劇体験に、興奮や眩惑や戦慄といった「快感」を求めるなら、コルネイユの『エラクリュス』はその最良の形のひとつを提供していると言えるでしょう。

II マリヴォー (1688-1763)

次に、十八世紀フランスの最良の劇作家のひとりであるマリヴォーを取り上げましょう（十八世紀ではほかにボーマルシェ、ディドロといった劇作家が有名）。喜劇作家マリヴォーの代表作には、『恋の不意打ち』『愛と偶然の戯れ』『偽りの告白』といったも

のがあり、長い間彼は、恋愛感情の微妙な襞を描く典雅な、甘ったるい作家とみなされていました。事実マリヴォー劇に頻繁に現れるテーマは「恋の不意打ちを食らって戸惑う自尊心」というもので、「マリヴォー＝恋愛作家」という図式は決して誤ってはいません。ところが1980年代から、「残酷なマリヴォー」像が再発見されはじめ、現在ではマリヴォーは十八世紀演劇におけるサドとも言われるようになりました（サド侯爵（1740-1814）はフランスの作家でサディズムの元祖。恐るべき小説をたくさん書いている）。

例えば『愛の勝利』という喜劇は、一般的な道徳をあざ笑って勝ち誇る美しい王女レオニードの話で、王女は男装して登場すると、美青年、中年女、老哲学者を次々と愛の奴隷にしてゆきます。また『二重の不実』という喜劇は、愛し合う若い二人が互いを裏切り、別の相手と恋に落ち、つまり「不実」によって喜劇の伝統的なエンディング（カップルの成立）を成就する、という極めて逆説的な「愛の勝利」を謳う芝居なのです。マリヴォーは、現代の我々が読んでも退屈する場面のほとんどない実にモダンな作家なのですが、ここでは、恐らくは最も実験的な喜劇『いさかい』を紹介してみましよう。

マリヴォー『いさかい』（Marivaux, *La Dispute*, 1744）

舞台はいずれとも知れぬ田園。時代はどうやら十八世紀。

大公とエルミアヌはひとつの「論争、いさかい」、即ち「恋においては、男と女とどちらが浮気者であるか？」を巡って言い争っている。しかし実は今から十八年前、既に大公の父が同じ「いさかい」をしたことがあって、ある思い付きを持っていた。富裕な大公の父は、男女四人の赤ん坊を誘拐して十八年間幽閉。世話をする二人の黒人奴隷以外の人間とは誰とも会わず、まともな教育も受けさせず、一種の野人として育てていたのだ。大公は今日これから、四人の男女—エグレ（女）、アゾール（男）、アディーヌ（女）、メスラン（男）—を初めて出会わせ、彼等の振る舞いをこっそり覗き見して、恋愛問答に対する解答を得ようとする。大公とエルミアヌは、「世界の起源」にあったであろう「最初の恋」の姿を見物することにする。

まずエグレ（女）が黒人奴隷とともに登場。彼女は、小川に映る自分の顔を初めて見て、その美しさにうっとりする（ナルシズムの発現）。ついでエグレは生まれて初めて白人男性アゾールと出会う（恋の発生）。エグレとアゾールは黒人奴隷から男性・女性というものが愛し合うべく創られたことを学ぶが、同時に、愛を長続きさせるには時に別離の時間を持たねばならぬとの忠告を受ける（磨耗する美の力、持続・時間の前での愛の鈍化）。しかしエグレ、アゾールは全く信じない（個別性への執着。「私たちの愛は永遠だ、何故なら特別なものなのだから」）。奴隷たちは、別離の淋しさに耐える手段として肖像画と鏡を渡す。二人は肖像画に見ほれる（自己の映像の誘惑。フェティッシュの暗示）。エグレとアゾールはしばらく鏡で戯れるが、奴隷たちの言葉を信じてしばし離れてみることにする。アゾール退場。

ついでエグレは初めて同性のアディーヌと出会う（アディーヌは既にメスランという白人青年に愛されている。つまり観客は、アディーヌもまたエグレと同じ処遇を受けていることを知る）。出会った瞬間からエグレとアディーヌは憎み合い、どちらがより美しいかを巡って激しく

対立し、「この鏡を見よ」と挑発し（虚栄心の発生。ナルシス対ナルシス）、「私の美を認めないお前は狂人だ」と言いあう（他者からの承認の渴望、或いは、自己を承認しない他者の排除）。エグレもアディーヌも、それぞれ男たちに聞いてみれば誰が一番綺麗か分かったと言う。エグレ退場。

アディーヌはメスランに「いけすかないエグレという女がいるから、行って軽蔑せよ」と命じて退場。メスランは先ずアゾールと出会う。すると男たち（メスランとアゾール）は、友情を発見する（男性と女性における虚栄心の差異が示されていると考えるべきか）。そこへエグレが登場。メスランはエグレを軽蔑するどころか完全に魅了され、彼女の手に接吻しようとする（最初の不実の発生）。アゾールは「彼女は僕の恋人だ」と怒るが（嫉妬の発生）、エグレは「別離の時間を持つ約束でしょ」と言ってアゾールを遠ざけメスランと話したがる（二つ目の不実）。アゾールは不満たらたら退場するがメスランも連れて行く。

舞台に残ったエグレはやって来た黒人奴隷に、アゾールが嫌いになったと打ち明け、自己弁護を始める。「アゾールは私を独占しようとするが私は自由だ。誰からも愛されたい。それにアゾールよりメスランの方が素敵だ。さっきアゾールに永遠の愛を誓ったが、それはアゾールしか知らなかったからだ」。それに対して黒人奴隷は「あなたがメスランに惹かれているのは単に彼が後から来たからだ」と宣告する。エグレは困惑するが、メスランがアディーヌの恋人であることを知り、ためらいを一挙に捨て去る（憎たらしいアディーヌが愛している男だからこそメスランには素晴らしい価値がある。虚栄心のテーマの再利用。恋愛の墮落）。一方、アゾールはアディーヌを愛し始めていて、エグレの心変わりを知ってむしろ喜ぶ（三つ目の不実）。アディーヌもまたアゾールを愛しており（四つ目の不実。不実の完成）、しかも女達は既に心変わりしてはいるが、昔の恋人をも自分のもとに繋ぎ止めておこうとする。哄笑する黒人奴隷たち。

最終場面、エルミアーヌが「もうこれ以上見たくない」と叫びつつ大公とともに登場。そして突然、ディナ（女）とメスリス（男）というもうひと組のカップルがいたことが明かされる。彼等は大公とエルミアーヌの前で永遠の愛を誓いあう（純愛の肯定）。大公は悠然として、男も女も、どちらも美德と悪徳とを均しく持っている、互いに非難しあうまでもない、と結論づけるが、エルミアーヌは「私たちはとても笑ってる場合じゃないわ」といって退場。幕。

以上が、喜劇『いさかい』の粗筋ですが、最後のエルミアーヌの台詞に顕著のように、これはとても素直に「笑って」済ませられない喜劇です。

先ず時代的なことを見てみますと、マリヴォーの生きた十八世紀フランスとは「百科全書」の成立した時代、いわゆる「啓蒙の世紀」（合理主義、自由検討の精神）であり、『いさかい』は如実にこうした時代精神を反映しています。つまり抽象的な「議論」をするのではなく、万事「実証」によって物事を確かめようとする風潮を、この芝居は使っているのです。

しかし『いさかい』の実験は、純粋な知的欲求などというレベルを越えています。実験者（大公とその父）には貴族的な冷笑・倨傲が、更には非人間的とも言える心理が感じられます。そこでは、被験者（六人の拉致された男女）の人格・人生などは、全く無視されていますし、そもそも、エデンの園の一天地開闢の一の始原の物語を再現するということは、神の視点を手に入れるということであり、実に尊大な態度であるとも言え

る訳です。(また戯曲を仔細に読めば、養育係りの黒人たちは狂言廻しであって、全ては仕組まれていることが分かりますし、さらにラストで大公は、エグレ、アゾール、アディーヌ、メスランを指して「この者たちは言いつけておいたようにするがよい」と黒人奴隷に命じます。彼等は「処分」されてしまうことが暗示されているのです)。

そしてひとつの恋愛問答を巡って行われた筈のこの実験の射程は、結果的に、単なる恋愛にはとどまりません。この実験は、社会性(という仮面)を奪われた人間の「ありのままの姿」というものが、いかに醜悪であるかを暴き出してしまっているのです。他人の目とか羞恥心というものを知らないエグレ、アゾール、アディーヌ、メスランの四人の若者は、結局、何を獲得するのでしょうか？ 彼等は順に、自己愛を発見し(エグレは「私は一生、自分の姿を見て過ごせるわ」と言います)、従って鏡に映る自己の映像に取り込まれ、次いで虚栄心にとりつかれ(他人に勝つことの快樂)、恋愛の美しさを学びつつもその直後には四人とも不実を学びます(純愛の否定)。つまりエデンの園を復活してみる筈のこの実験が完成したのは、全くの反エデンであった訳で、蛇の誘惑も何もしないに、人間は自分たちだけで勝手に、全く自然に、墮落してゆく存在なのだと、マリヴォーはどうやら言っているのです。(確かに最終場面にマリヴォーは純粋な愛を生きるディナとメスリスを登場させ、愛の永続の可能性も示していますが、彼等の出て来るのはほんのわずかの時間で、ほとんど印象に残りません)。

結局、「愛」について語りながら、マリヴォーは人間の「欲望」のメカニズムを語っているのです。とりわけ第十五場で黒人奴隷とエグレが提示する「心変わり」の真相は、実に恐るべきものだと思います。

黒人奴隷：あなたは変わらずに彼(アゾール)を愛しつづけると、あれほど約束したじゃないの！

エグレ：待ってよ、約束した時に居たのは彼だけだったのよ。お友達(メスラン)のことなんか知らなかった。

黒人奴隷：そんなことは理由にならないでしょう？

エグレ：そうね……でも立派な理由がひとつある。アゾールよりあの人のほうが、優れた男性なのよ。

黒人奴隷：また思い違いをしている。優れているからではないでしょう。新しく来た人だからひかれたんでしょう？

エグレ：でも、新しいって強みじゃないの、今までと違う人って何かあるでしょう？ そりゃやっぱり、すてきなことよ、アゾールにはない美点よ。(『いさかい』第十五場)

美しいエグレは、美しいアゾールと出会い、互いの若さと美に打たれ、永遠の愛を「確信」し「約束」しました。ところが、その日のうちにエグレは、「新しい人 un nouveau venu」「別の人 un autre」には必然的に「前の人」にはない美点があることを知ります。「新しい人」と「前の人」の間の本質的な差はここでは問題とはなっていません(恐ら

くアゾールとメスランは同程度にハンサムで同程度に優しい男なのです)。とどのつまりマリヴォーは、人間とは次から次と「新しいもの」「今とちがうもの」を欲望せざるを得ない存在であると言っているのです。(粗筋には書きませんでした、最終場でメスリスが登場すると、エグレは「この人の愛情も手に入りたい」と言って醜く媚びを売ります)。

「男と女とどちらが浮気者か」などという一見他愛のない問題から始めて、喜劇『いさかい』は、実に悲劇的な、絶望的ともいうべき人間観を我々に提出しています。これは思想史的に見ると、教父アウグスチヌス(354-430)や思想家のパスカル(1623-1662)のペシミズムの影響を受けているとも考えられます。たがの外れた欲望マシンたるエグレの姿は、アウグスチヌスが指摘した、抑制のきかない人間の快樂原則「情欲 *libido sentiendi* (désir de sentir)」そのものですし、他人に勝ちたいというエグレやアディヌの欲望は、既にアウグスチヌスによって「支配欲 *libido dominandi* (désir de dominer)」と定式化されていることなのです。しかし『いさかい』の面白さとは、そうした「思想」が、いまや科学的な「実験」によって証明された、と我々に思わせてしまうことにあるのだと思います。社会生活(つまり濁世)を知らない、本も読んだ事の無い、全く「無垢」である筈の四人の男女が、世界に生まれ出た瞬間から、生々しい欲望をさらけ出す人間として我々の目の前で行動し始めるのですから。

勿論、『いさかい』とは単なる架空の実験に過ぎませんし、我々は戯曲全体のトーンである強烈な人間不信などではなく、最後の光とも言うべきディナとメスリスの純愛を信じることも出来るでしょう。しかしながら、生体実験としての演劇『いさかい』は、純粋な愛を、愛の永遠を信じて(願って)生きている我々にとっては、あまりに苦々しい体験をひととき強いる、何とも過激な「恋愛喜劇」なのです。

おわりに

以上、たったふたつの作品の紹介でしたが、フランス演劇の「過激さ」「楽しさ」が少しは感じられたでしょうか。

我々は普段、つかみどころがない人生に困惑したり、悩んだり、退屈してりして暮らしています。そんな訳の分からない(あるいは詰まらない)人生を、ある断面で切ってみたり、つねならざる状況に仕立てたりして、短時間のうちに完結する「劇しい行動 *action dramatique*」として観客に提示する演劇は、我々にとって極めて誘惑的な「娯楽」であり、かつ、もしかしたら、世界や人間の意味を見出せる「学校」でもあるのです。

フランス演劇にはまだまだ傑作・問題作があって、とてもここで、簡単に要約もしきれない規模なのですが(後ろに代表的な劇作家だけは挙げておきます)、最後に一言だけ、二十世紀のフランス演劇は、「劇的行動」ということの意味を大きく変えてしまったことを指摘しておきましょう。既に十九世紀、メーテルリンク(1862-1949)が「静劇」

というコンセプトを打ち出しアクションの「劇しさ」を減じているのですが、決定的な断絶は二十世紀のベケット（1906-1989）の『ゴドーを待ちながら』（1953）がもたらしました。そこでは通常の「物語」や「アクション」はほとんど皆無と言ってよく、登場人物が舞台上でなすことといえば、ただゴドーという謎の人物を待ってお喋りすることだけです。彼の『しあわせな日々』（1963）も同様に、「行動」らしきものは一切ありません（何しろほとんどひとりで喋り通しの登場人物ウィニーは、下半身が地面に埋まっ
ていて動けないのです）。ところが不思議なことにこうしたベケットの芝居にも、確実に「ドラマチック」な感動がこもっていて、我々は人間存在の闇に慄然としたり、瀕死の愛のさまに涙を流したりしてしまうのです。

演劇がこれからどこへ行くのかは分かりませんが、我々はきっといつも、演劇が提示する人間行動の様々な姿に魅せられ、揺さぶられ続けるのだと思います。

フランス演劇の代表的作家

十七世紀

コルネイユ Corneille（フランス演劇の父。英雄主義。極端な人物による極端なお話）

『コルネイユ名作集』、白水社（『舞台は夢』『ル・シッド』『オラース』『シンナ』『ポリュクト』『嘘つき男』『ロドギュヌ』『ニコメード』収録）。

『コルネイユ喜劇全集』、河出書房新社（『メリット』『未亡人』『王宮広場』『侍女』ほか収録）。

『嘘つき男・舞台は夢』、岩波文庫。

モリエール Molière（喜劇作家。フランスのシェークスピア的な存在）

『モリエール全集』、臨川書店、全十巻。

『モリエール全集』、中央公論社、全四巻。

『モリエール名作集』、白水社（『粗忽者』『亭主学校』『女房学校』『タルチュフ』『ドン・ジュアン』『人間嫌い』『守銭奴』『女学者』『病は気から』収録）。

ラシーヌ Racine（古典主義の代名詞。破滅的な恋の詩人）

『ラシーヌ戯曲全集』、人文書院、全二巻。

『フェードル・アンドロマック』、『ブリタニキウス・ベレニス』、岩波文庫。

十八世紀

マリヴォー Marivaux（恋愛感情の緻密な分析。冷酷な人間観）

『マリヴォー・ボーマルシェ名作集』、白水社（『恋の不意打ち』『愛と偶然の戯れ』『偽りの告白』『試練』収録）。

『新マリヴォー戯曲集』、大修館書店（『いさかい』『二重の不実』『賈の侍女』『愛の勝利』収録）。

『ユートピア旅行記叢書』、岩波書店、第十四巻（『奴隷の島』『理性の島』『新天地』収録）。

『マリヴォー戯曲選集』、早大出版部（『恋の不意打ち』『恋の不意打ちその二』『遺贈』『率直な人々』『試練』『本気の役者たち』収録）

ボーマルシェ Beaumarchais（喜劇作家。社会性への視線）

『マリヴォー・ボーマルシェ名作集』、白水社（『セビーリヤの理髪師』『フィガロの結婚』『罪ある母』収録）。

十九世紀

ユゴー Hugo（ロマン主義演劇。『ノートルダムの鐘』の原作者）

『ヴィクトル・ユゴー文学館』、潮出版社、第十卷（『クロムウェル序文』『エルナニ』『ルクレツィア・ボルジア』『リュイ・ブラス』収録）。

ミュッセ Musset（ロマン主義の詩人。世紀病にひたされた苦い恋愛）

『マリアンヌの気紛れ』、『戯れに恋はすまじ』、岩波文庫。

二十世紀

イヨネスコ Ionesco（伝統的演劇の否定。人間存在の不条理。言語の空無。「反演劇」の旗手）
アンチテアートル

『イヨネスコ戯曲全集』、白水社、全四巻。

『ベスト・オブ・イヨネスコ』、白水社（『禿の女歌手』『授業』『犀』ほか収録）。

ベケット Beckett（ノーベル賞作家。不毛な生。アクション無意味な劇行動。瀕死の愛。演劇の限界）

『ベスト・オブ・ベケット』、白水社、全三巻（『ゴドーを待ちながら』『勝負の終わり』『しあわせな日々』『わたしじゃない』ほか収録）。

（友谷知己／ともたに・ともき：文学部教授）

V

物語の楽しみかた、味わいかた（人生論編）

I. 感性とビジョン

私は、フランスの現代文学を専門領域にしていますが、文学の研究と言っても、ある一人の文学者を取り上げてその作家のことを研究するタイプの研究ではなく、最近話題になったいろいろな作品や、話題になっていなくても注目すべきだと思われるような作品などをできるだけ幅広く取り上げて、その意味と構成を考える作業を続けています。時には映画を取り上げたり、哲学や現代批評のような思想を分析したりもしますし、私のゼミでは、学生達といっしょに、笑いやファッションや料理などをテーマに日仏文化比較を行ったり、社会問題や文明批評まで、文化全般に対象を広げていろいろな研究を行っています。なぜ、そんなに研究対象を広げるのかというと、「その方が楽しいに決まってるやんか！」というのが本音に一番近く、最も分かりやすい説明になるでしょうが、何せ給料をもらってやっている仕事ですから、まあ、そこはそこ、他にちゃんとまじめな理由もあります。実は、これすべて、深いところで「物語論」という分野の研究に結びついているのです。「物語論」というのは、わかりやすく言えば、世の中にある物語というものの構成法や意味を研究し、物語とは一体なんだろうと考える幅の広い学問領域のことです。

さて、皆さん、「物語」って聞いたら何を思い浮かべますか？ 『竹取物語』や『源氏物語』など、日本の古典文学のジャンルの一つのことを考える人もおれば、あるいは、童話のような物語を考える人もいることでしょう。確かにそれらも物語には違いありませんが、ここでいう物語とは、ほとんど人間の言語活動全体に係わるほどの大きな広がりをもつものだと、できるだけ広い意味に捉えて下さい。実際、物語には、文学作品のように高度に洗練された芸術様式もあれば、私たちが友人との会話の中で普段使っているような極めて日常的な形態もあります。日々生活している中では、それとはっきり気付くことはあまりありませんが、実は、私たちは、いつもさまざまな物語に囲まれて、またさまざまな物語を使って生活をしているのだということに、少し考えてみれば、皆さんすぐに気付くことでしょう。朝、友達に出会って昨日の出来事を話すとき、私たちは簡単な物語として話をしますし（「昨日、家に帰ったら、ちょうどお母さんが出かけるところだったんやけど・・・。」）、相手の話も物語として理解します（「そうやねん、うちも帰ったら皆が何かそわそわしてて・・・。」）。私たちは、テレビのニュースも、新聞の記事も、大学の講義も、各種のセミナーも、すべてを物語として理解し、会話や、

日記や、あるいはプレゼンテーションなどにおいて、私たちは、物語を用いて自分を表現し、未来を想像し、また将来の予定を立てます。このように、実は、物語は世の中のあらゆるところに充ち満ちているわけですから、まあ、たとえてみれば、物語は人間にとってちょうど空気のようなものであって、普段その存在を意識することはありませんが、人間にとって、決して欠く事ができないほど重要なものなのだということが分かるでしょう。

さて、こう考えると、人がどれほど多様な物語を理解できるか、あるいはどれほど豊かな物語を思い描くことができるかということが、その人の人生に大きな影響を及ぼすだろうということは、すぐに理解することができると思います。ところで、多様な物語を理解する力というのは、単なる国語力のことではありません。もちろん、それも関係がないわけではありませんが、ここではもっと本質的な別の能力が問題になっているのです。皆さんが、人の話でも小説のような物語作品でも、なんらかの物語を理解するときには、語られた言葉や文字そのものを考えるのではなく、むしろ、言葉を通じて得られた何らかのイメージや風景、あるいは一種の物語世界を理解するわけです。ところで、このイメージや風景のことを、そのまま「風景」と呼んだのでは、まるで絵や写真のことにように思われてしまうので、ここではとりあえず「ビジョン」と呼ぶことにしておきましょう。ビジョンとは、世界「観」とか人生「観」とかいう、あの「観」によく似た意味だと思って下さい。物語を理解し、また思い描く能力というのは、つまり、このビジョンを心の中に構成する能力のことです。もちろん、この能力は個人によって違いがあり、貧素でつまらないビジョンしか描けない人もおれば、豊かで素晴らしいビジョンを描ける人もいます。この能力差は、受験の偏差値とはほとんど関係ありませんし、経済的な立場の差もあまり関係がありません。とはいえ、その人の生活経験の総和とは深く係わっています。

では、豊かなビジョンを構成する力を身に付けるためには一体どうしたらよいのでしょうか。実は、どういう科目を履修して勉強すれば身につくかとか、こういう練習をして訓練を積みば能力がアップするとかいうような簡単な方法はないので、その方法を考えるのはなかなかむずかしいことなのです。じゃあ、物語そのものを構成する技術を学べばよいのではないか、と思う人がいるかも知れません。そういう発想には確かに一理あります。実際、すべての物語には必ず構成というものがあることは今ではよく分かっていて、しかも、どのような物語の構成法があるかというような技術的な問題についての研究も最近ずいぶん進んでいるので、これを学べば物語読解の免許皆伝となるのではないかと考えることもできるわけです。この方面の研究において現在世界最先端のレベルを担っているのは、実は、フランスの学者たちですので、私は大学院で、彼らの研究業績を紹介しながら物語の構成法を考える授業をよく行っているのですが、でも、別に物語を構成する技術を学んだからといって、急にビジョンを構成する力がアップするわけではありませんし、実際、本当のところは、もともと心の中にビジョンを構成する力

がなければ、そもそも技術的な問題を理解することなどできないのです。これは、まず音楽そのものを味わう力がなければ、いくら作曲法を学習しても、音楽も作曲法それ自体も、結局よく分からないのと同じことです。つまり、技術によって音楽を極めたり、分析・分類を通して音楽の研究を深めたりすることはできますが、技術それ自体が音楽なのでは決してないからです。

では、どうすれば良いのかというと、結局のところ、近道はないのです。ゆっくりと時間をかけて、良い作品をたくさん読み、いろいろな映画を観たり美術館に出かけたりして、できるだけ多くの芸術的感動を味わってください。新聞には必ず目を通して、さまざまな社会問題を理解してください。もちろん、いろいろな人生経験も必要です。また、とりわけ外国の文化を知ることが大切です。それは、自分とは全く異なる者に触れる貴重な機会です。外国の文化を知り、自分が育ってきた文化と比較してみても相互の理解を深め、両方の文化に係わる社会的問題などをいろいろな側面から考えて、そこに横たわっている深い意味を読み解いて下さい。どんな国の文化に親しんでもらっても結構ですが、特にフランスの文化がおすすめです。なぜなら、フランスの文化は、文学、美術、映画のみならず、ファッションや食文化に至るまで、アートの宝庫だからです。他の文化を知るとは、同時に自分が所属している文化を深く考えることでもあります。そうして、いろいろな思索を続けるうちに、次第に感性が磨かれてきて、他人のビジョンを理解する能力が格段にアップし、それと同時に自分のビジョンを構成する力も付いてきます。

感性というものは何歳になっても、いつでも磨くことができるようなものではありません。皆さんのように若くみずみずしい感情を抱くことのできる世代でないと、効果的に感性を磨くことはできません。私も、学生のころには、小説を読んでいるうちに物語世界に埋没してしまい、読み終わっても、まるでタイムマシンに乗って自分の部屋に急に戻ってきたような気分になり、感動の余りしばらくイスから立ち上がれなくなってしまうことが時々ありました。歳をとるともうそんな集中力もなくなりますし、感動することもまれになってしまいます。もちろん、そのかわり、年齢が上がるとともに人は社会的な行動力を身に付けて行くわけですが、しかし、歳をとってから行動に移すその発想のほとんどは、実は若いころに感動したことがきっかけになっています。だから、歳をとってから感性を磨こうとしても、それではもう手遅れかもしれません。

ところで、感性など磨いても、社会に出れば何の役にも立たないのではないかと思う人がいるかも知れません。しかし、実はまったく逆で、それこそ人生でもっとも役に立つことなのです。感性を磨き、社会にあるさまざまな物語を豊かに読み取り、新しく物語を構成する力を持つということは、社会に対しても、また、自分自身の人生設計についても、過去や現在を分析し、より良い未来を構想する総合的な企画力を手に入れることに他なりません。人から命じられたことをただ言われたままに実行するのではなく、自ら問題を見つけてその解決策を提案できる問題解決型の人材、現代社会にもっとも必

要な問題解決型の人材とは、結局は、この総合的な企画力を身につけた人のことです。その能力は、ビジネスのみならず、家庭においても、地域のつきあいにおいても、友人関係でも、人生のあらゆる局面で力を発揮するはずです。3年になって就職活動を始めると、社会においてこのような能力がどれほど高く評価されているか、すぐに実感してもらえenと思います。

ところで、感性を磨くコツは、「楽しむ」ということです。単に知識や技術を習得するのではないので、嫌なことを無理に我慢して学習に励んでも、あまり効果はありません。感性は、むしろ、知的な好奇心を大切にして日々の生活を楽しむ姿勢を持つこと、好きなテーマを見つけてそれを思い切り楽しむことを通じて効果的に磨くことができます。私のゼミでは、美術館を訪ねたり各種のイベントに参加したり、また、皆でおもしろい話題を提供し合って話が盛り上がるような機会をできるだけ多く設けるようにしていますが、そうする理由はここにあります。楽しむと言っても、決して遊び半分のいい加減な気分ではなく、人生を「まじめに楽しんでほしい」と思っています。

で、楽しむためのネタですが、今回は、大学に入学したばかりの皆さんに、人が生きるとはどういうことかという少し重い問題を考えてもらおうと思って、20世紀のフランス文学を代表するノーベル賞作家アルベール・カミュの『ペスト』を取り上げました。

『ペスト』はシンガー・ソングライターの矢井田瞳さんが卒論のテーマに選んだ作品で、矢井田さんは、苦しい時こそ仲間と連携して、人々の心を和ませるために働くことが人間にとっていかに大切かということをつたえた、ステキな卒論を書いてくれました。

さて、最近、日本も含めて世界全体の経済が不況に陥っているということは、皆さんもご存じの通りです。世界中の国が、自由主義経済の競争原理のもとに互いに競争することを通じて切磋琢磨し、社会を活性化させ発展してきたのですが、それが少し行き詰まってしまったというのがおそらく現状ではないかと思います。では、その現状を乗り越えて再び社会が発展するようにするには、どうすれば良いのでしょうか？ その一つの答えをカミュの『ペスト』は教えてくれます。社会を活性化させるために確かに競争は必要ですが、それと同時に、人が互いに支え合って生きる姿勢も必要ではないでしょうか。人は何のために生きているのか？ 人が生きる意味とは何なのか。それをカミュは教えてくれるのです。キャリア教育のためにも大変役に立つ本ですので、是非『ペスト』（新潮文庫）を読んで考えてみて下さい。

II. ペスト

少し前に、「癒し」という言葉が流行りました、「癒し系アイドル」とか「癒しグッズ」とか。多分、この場合、ホッとするようなとか、疲れた身体や心を楽しませてくれるようなとか、そういう軽い意味で用いられていたと思います。安らぎや平穏を求めるのは、人が生きてゆく上でとても大切なことで、その意味では、私も「癒し系」は大好きです

が、ある日の新聞の投書欄で一人の宗教家の方が「癒し、癒しといって、うれしそうに皆で飛びつくのは間違っている。癒しなどというものはそう簡単に得られるものではない。」と憤慨しておられるのを読んだことがあります。なぜ憤慨しているのか理解できない人も多いと思いますが、しかし、私は、なるほど、それもそうかと思ったのです。

17世紀のフランスが生んだ思想家ブレイズ・パスカルも『パンセ』の中で、次のように述べています。「人は決して癒される事はない。なぜなら、人は自分がいずれ死すべきものだということを知っているからだ」と。人は、常に死の不安と恐怖の中に生きている。その根源的不安をまぎらわせるために、人は常に「憂さ晴らし (divertissement)」をして生きているのだと、パスカルはつまりこう言ったわけです。そうすれば、この根源的不安から解き放たれて人が本当に「癒される」のは、死の恐怖が無くなる時、つまり、人が死ぬその間際でしかありえません。人が、長い年月をかけて、幾多の苦難を乗り越え、喜びや挫折を経験し、人生の最後に至って自らの死をやっと素直な気持ちで受け入れることができたとき、人は初めて「癒される」ものである。つまり、新聞に投書した宗教家は、「癒し」という言葉を軽々しく使うなど憤慨しておられたわけです。人がいずれ死ぬものであることをごまかして生きてはいけない、それはつまり、生をごまかすことにほかならないからだ。人は、自らが死すべきものであることをしっかり受け止めて、それなら一体どのように生きるべきなのか、まじめに考えてもらいたい。投書でおっしゃりたかったのは、おそらくこういうことだったのだらうと思います。

しかし、逆に、人間がどうせすぐに死ぬものだったら、何をしても仕方ないじゃないか、という考えも成立します。どうせ数十年生きればみな死んでしまうのだから、将来のことや人のことなどあまり深く考えずに、生きている間とにかく楽しく過ごせばそれでいいじゃないかと。確かに、そういう考えも簡単に否定できるものではありません。でも、それで良いのでしょうか。人は何のために生きているのでしょうか。生きるとは、そもそもどういうことなのでしょう。なぜ人は死ぬと分かっているながら、あくせく頑張っているのでしょうか。その一つの答えが、この『ペスト』の中にあります。人生など、死を前にすれば、結局無駄なものかもしれない。世界を、宇宙の無限の広がりや人を前にすれば、人生など取るに足らないちっぽけなものかもしれない。しかし、それでも、人生には意味がある。人類が連帯して生きようとする、そのこと自体に大きな意味があるのだということを、この作品は読者に切々と伝えてきます。

物語は北アフリカにあるフランス植民地時代のアルジェリアのオランという町を舞台に展開します。この町にある日突然ペストが流行するのです。ペストなどと言っても、われわれにはあまり馴染みのない病気ですが、ヨーロッパではそうではありません。過去何度も流行を繰り返し、14世紀には未曾有の大流行のためヨーロッパ全土の人口の3割ほどが亡くなったと言われています。感染するとほとんど助からず、1週間ぐらいで死亡する恐ろしい伝染病です。そこで、町はすぐに、他の地域への伝搬を避けるために閉鎖されます。日本では、一つの町を完全に閉鎖することなど、地理的にとてもでき

ない相談ですが、ヨーロッパなどでは、昔の城塞建築の名残で町全体が塙で囲まれている場合があります、入り口を閉めてしまえば町全体を比較的簡単に閉鎖することができます。急に閉鎖されるわけですから、その時にたまたま町の外に出かけていた人たちは帰れなくなりますし、町にやってきていた人々も町の中に閉じこめられてしまいます。町の住民たちは、いつになったら終わるのかわからない閉鎖状態と家族や愛する人々との別離に苦しむことになりますし、自分や自分の家族がいつペストに感染するかもしれない恐怖の中で日々を過ごすことになります。もちろん、脱走を企てる人も出ますし、身近に感染者が出てパニックになる人も、恐怖の余り正気を失ってしま人もいますが、それでも、町の住人たちの大半は、恐怖に耐えて日々の生活を続けます。

主人公になるのは、この町で開業医を営む医師リウーです。彼は、仲間を募って保健隊を組織し、ペスト患者の治療にあたります。治療するといっても、ほとんど何もできないのが実情です。急にワクチンの増産ができるわけもなく、治療する人が何とか感染を免れる程度しか存在しないので、感染を避けるために患者を隔離し、患者の居た部屋を消毒し、患者の腫れ上がったリンパ節を切開して膿を出し、痛みを一時和らげる程度の手当てしかできず、後は、死んでゆく患者にただ付き添ってあげることしかできません。それでも、リウーは、まるでこの苦行のような活動を淡々と続けます。死んでゆく人に対して今できる限りのことを行い、結局負けることが分かっているにもかかわらず、それでも全力でペストに立ち向かいます。リウーのこの誠実な姿勢にひかれて、何人もの協力者が現れます。リウーの右腕となって働くタルー、新聞記者のランベール、年老いた孤独な老官吏グランなどです。

ところで、この作品は1947年に発表されました。1947年といえばまだ第二次世界大戦が終わって間もないころのことです。皆さんは、ご存知のことだと思いますが、フランスは第二次世界大戦の間中、ナチス・ドイツに占領されていました。ですから、ペストというのは、世界に恐怖と死をもたらしたナチス・ドイツのことであり、保健隊とは、強大なナチスに対して抵抗を続けたレジスタンスのことだと考えることもできます。でも、物語を、何か一つの解釈に縛りつけてしまうと、返って狭くやせ細ったものにしてしまうので、今は、戦争であれ病気であれ何であれ、ペストは人を死に追いやるすべてのもののことだとできるだけ大きく普遍的に解釈しておくのが賢明でしょう。

さて、こうしてみると、『ペスト』は、アメリカのパニック映画と同じような物語の構成をもっていることが分かります。豪華客船が海に沈んでしまい、閉じこめられてしまった人々が脱出を図る映画とか、火事になった高層ビルから脱出する映画だとか。しかし、『ペスト』がそれらと異なる一番重要な点は、物語の終わりに単純なハッピー・エンドが用意されていないことです。ペストは、リウーたちの活動などおさまいなしに、ある日突然去ってゆきます。これでは、リウーたちがペストに勝利したとはとても言えません。実際、保健隊の中で最も良く働いたタルーが、皮肉にも、ペストがおさまるその時に、ペストに感染して死んでゆきますし、誠実に死と戦ったリウーにも、最後には、

彼の妻の死が待っています。つまり、一生懸命頑張ればこんな良いことが待っているのだよ、などという子供だましの話ではないのです。そうではなくて、ここに描かれているのは人が生きることの大切さであり、人生の尊厳そのものです。それを理解できたとき、皆さんの心の中に、きっと深い感動が広がることでしょう。

最後に、新聞記者ランベールの言葉を紹介しておきましょう。彼は、ペストのせいで町が閉鎖になったとき、たまたま町に来ていて外に出ることができなくなってしまいます。恋人と生き別れになってしまった彼は、町に滞在した日も浅く、感染の可能性も少ないので、なんとか裏から手を回して、町から脱出しようと試みます。どういう方法を使ってであれ、自分が自分の幸福を追求するのは自由だ、と主張するランベールに対して、リウーは、それを決して否定せず、確かにそれは君の権利だと認めます。しかし、ランベールは、ある日、患者の治療に身を粉にして働いているリウーにも、実は、町の外に生き別れになった妻が、それも、いつ死ぬか分からない重病にかかった妻がいることを知ってショックを受けます。そして、ランベールは、結局、脱出を諦め、保健隊の一員として働くことを決心するのですが、「君が自分の幸福を選ぶことに何も恥じることはない」というリウーに対して、ランベールは次のように答えます。「でも、自分一人が幸福になるということは、恥ずべきことかもしれないんです」

始めに述べたように、適度な競争は、人や社会を活性化させてくれます。競争に勝つ喜びは貴重なものですし、経済的に余裕のある生活をしたいと願うのも、ごく当然の希望でしょう。しかし、人生には、勝利の喜びやお金よりもさらに価値のある目的がある。社会の役に立とうとすること、人々を幸福にするために働くこと。そんな人生のプライスレスな価値を大切にして、皆さんによりよい人生を歩んでほしいと願っています。

(奥純／おく・じゅん：文学部名誉教授)

VI

韻文とは？

みなさんは、「散文 la prose」と「韻文 le vers」の区別を御存知でしょうか？

「散文」とは、新聞、小説、エッセイ、日記、会話などで我々が普段使っている通常の文章のこと。そして、その反対語である「韻文」とは、詩（中国の漢詩や、日本の和歌や俳句を含む）に用いられる、特殊な形式に従った文章のことです。かつてヴァレリー（1871-1945）という詩人は、両者の違いを「歩行 la marche」と「舞踏 la danse」にたとえたことがありました。我々は、散文で文章をつづる時には、いわば「歩いて」いて、韻文で詩を書く時は「踊って」いる、というのです。全く同じ道具（肉体、言葉）でも、使い方によって全く異なる結果（歩行＝散文、舞踏＝韻文）が生じるわけです。

ではフランスの韻文（あるいは詩句）とは具体的にはどんなもののでしょうか。色々な形式や規則があるのですが、大事なところを少しだけ紹介してみます。

1 音綴 syllabe

フランスで最も一般的な詩句は、一行に十二個の「音綴、音節（シラブ）」（最低ひとつの母音を含んだ発音の単位）を持つもので、これを「十二音綴」あるいは「アレクサンドラン」と言います。十二音綴に次いで「十音綴（デカシラブ）」、それから「八音綴（オクトシラブ）」というものもよく用いられます。ちょっと音綴をかぞえてみましょう。最も単純な例ですと、

Le jour n'est pas plus pur que le fond de mon cœur (Racine)

（意訳「日の光すら私の心ほどに澄み切ってはいない」ラシーヌ）

という一行は、

Le / jour / n'est / pas / plus / pur / que / le / fond / de / mon / cœur

と十二の音綴で出来ているので、アレクサンドランだと分かります。ところが音綴を数える時に厄介なのはeの扱いです。以下のような原則があります。

- 1) 一行の最後にあるeは無視する。
- 2) 一行の途中にeで終る単語があり、その次の単語が母音で始まる場合は、まとめて数える。

例えば、

Ma jeunesse ne fut qu'un ténébreux orage (Baudelaire)

（意訳「俺の青春は暗い嵐だった」ボードレール）

という十二音綴は、最後の単語 *orage* の末尾の *e* をカウントしません。

¹Ma / ²j³eu/⁴nes/⁵se / ⁶ne / ⁷fut / ⁸qu'⁹un / ¹⁰té/¹¹né/¹²breux / ¹³o/¹⁴rage

と勘定します(最後のイタリック体部分 *ge* の母音を無視する)。更に次のような場合、
Horloge ! dieu sinistre, effrayant, impassible (Baudelaire)

(意訳「時計よ！ 不吉な、恐るべき、冷酷な神よ！」ボードレール)

最後の単語 *impassible* の末尾の *e* の音をカウントせず、行の途中の *sinistre* の末尾の *e* は、次に来る単語 *effrayant* の先頭の母音 *e* と一緒にしてしまいます。よって以下のように音綴をかぞえます。

¹Hor/²lo/³ge ! / ⁴dieu / ⁵si/⁶ni/⁷stre, ⁸ef/⁹fray/¹⁰ant, / ¹¹im/¹²pas/¹³si/¹⁴ble

2 脚韻 *rime*

詩句の音綴がかぞえられるようになったら、次には「脚韻」に注意しましょう。「脚韻」(あるいは単に韻)とは、二行の詩句(韻文)の少なくとも最終母音が同じ音であること、です。以下の三つの種類があります。「貧しい脚韻 *rime pauvre*」(一音が一致する)。「十分な脚韻 *rime suffisante*」(二音が一致)。そして「豊かな脚韻 *rime riche*」(三音以上が一致)。これらの区分にはあまりこだわらなくてもいいと思いますが、次のことには注意してください。脚韻とは、同じ「文字」が使われているのではなく、同じ「音」が繰り返されることなのです。例を挙げてみましょう。

Tout semble confier à l'ombre un doux secret ;

Tout aime, et tout l'avoue à voix basse ; on dirait (Hugo)

(意訳「ものみな全て、影に甘い秘密を打ち明けるようだ／全ては恋をし、全ては小声で告白をするようだ、まるで……」ユゴー)

各行の最後の単語 *secret* 「スクレ」と *dirait* 「ディレ」は、「レ」の音で脚韻を踏んでいます。綴り字が *ret* と *rait* というふうに異なっているでもいいのです。

恐らく、詩句の最後で同じ音を反復するというこの形式はフランス詩において最も重要な要素と言ってもいいでしょう。脚韻は既に中世から存在していますが、これは現代のポップスの歌詞にすら、ほとんど常に、見られるものなのです。最近流行った歌手のある曲はこう始まります。

On me dit que nos vies ne valent pas grand chose,

Elles passent en un instant comme fanent les roses (Carla Bruni)

(意訳「人生に大して意味なんてないって言われた／人生はあっという間に過ぎてゆく、薔薇のしおれてゆくように」カルラ・ブリュニ)

chose 「ショーズ」と *roses* 「ローズ」の中の「オーズ」という音が韻を踏んでいます。(ただし現代の歌詞は割にゆるやかに作られるので、ここでも二行目は、厳密には

十二音綴を越えてしまっています)。

最後に、脚韻の並べ方の種類を紹介します。四行の詩句がある場合、以下のようなものがあります。「平韻 *rimes plates*」(韻のパターンは AABB)。「交叉韻 *rimes croisées*」(韻のパターンは ABAB)。「抱擁韻 *rimes embrassées*」(韻のパターンは ABBA)。

次の詩句はどのパターンでしょう？

Comme on voit sur la branche, au mois de mai, la rose

En sa belle jeunesse, en sa première fleur,

Rendre le ciel jaloux de sa vive couleur;

Quand l'Aube de ses pleurs au point du jour l'arrose (Ronsard)

(意訳「五月の薔薇の枝の上に／若く美しい最初の花が咲く／天も うらやむ色鮮やかさ／あけぼのは朝露の涙を薔薇に注ぐ」 ロンサール)

(答は「抱擁韻」です。 *rose* A, *fleur* B, *couleur* B, *l'arrose* A)

ともあれ詩というものは、決して意味(文章の内容)だけで出来ているのではありません。そこには、独特の形式によって「律動(リズム)」や「諧調(ハーモニー)」が生まれるよう、周到的配慮がなされているのです。

(友谷知己／ともに・ともき：文学部教授)

VII

時の流れと言葉の変遷

はじめに

外国のことについて何かを学ぼうとするとき、その国の歴史と言語についての知識があれば、たいそう役に立ちます。そのようなわけでここでは、フランスという国がどのような歴史をたどってきたのか、またフランス語がいかに進展してきたのかを簡単に解説します。残念ながら紙数の関係で起源から中世の終わりまで、すなわち 15 世紀末までしか取り扱うことができませんが、あとは最後に挙げた参考書などを読んでいただき、自分自身で勉強してくださることを期待しております。

1. ローマ帝国による支配

フランス本国は六角形に近い形をしています。この地域はかつてガリア la Gaule と呼ばれ、そこにはケルト民族 les Celtes が住んでいました。ガリアはいくつかの部族によって成り立っていたのですが、それらは互いに相対立し、国家としての統一した組織体ではなかったようです。部族間のこのような勢力争いにつけこみ、ローマ帝国はすでに紀元前 2 世紀にガリア＝ナルボネンシスという属州を南仏の地中海沿岸地域に建設していました。紀元前 58 年にローマ属州の安全確保を目的として、ガリアの知事であったユリウス・カエサル（シーザー）Jules César は軍事行動を開始します。アルウェルニ族の青年ウェルキンゲトリクス Vercingétrix を隊長とするガリア軍は善戦し、相手を苦しめますが、最後にはアレシアに包囲され、ついにはローマの軍門に下るのです。そしてカエサルは紀元前 50 年までの間にガリア全土を征服します。

ローマ帝国の支配下におかれることとなったガリアには兵士たちに続いて、役人や商人など一般の人びとも移住します。つまりガリアはローマ帝国の植民地となりローマ化が進行するのです。軍事的・政治的にはローマに屈したガリアでしたが、ローマの進んだ文化の恩恵に浴することとなるのです。土木建築の技術に長けたローマ人たちはガリアに道路を敷設し、都会には石造りの立派な建造物を建設します。現在、南フランスのアルルやニームに見られる円形闘技場やポン・デュ・ガールと呼ばれる水道橋はローマがガリアを統治していた時代に造られたものです。

ローマ人たちは政治や行政の諸制度とともに、自分たちが用いていたラテン語もガリアにもたらししました。これはローマの詩人や劇作家たちが創作に使用していた古典ラテン語 *le latin classique* ではなく、民衆が日常生活で用いていた俗ラテン語 *le latin vulgaire* といわれる話し言葉です。ローマ人は学校教育などを通じてラテン語の普及に努め、ガリア人の中でラテン語の使える人材を役人に登用して優遇するなどした結果、比較的短期間のうちにラテン語がガリア語 *le gaulois* にとって代わったようです。また人びとの間に広がろうとしていたキリスト教もラテン語の伝播に一役かったものと思われます。ローマ人によりもたらされた俗ラテン語がガリアの地でガロ・ロマン語 *le gallo-roman* となり、それが長い年月の間に徐々に変化してフランス語となったのです。先住民族であるガリア人たちの言語はほとんど完全に消滅し、今のフランス語には *charrue* 「鋤」*chemise* 「シャツ」*mouton* 「羊」といったようなごく少数の単語や、若干の地名にその痕跡をとどめるのみです。

ローマ帝国は当時、地中海周辺を初めとして多くの地域にその勢力を伸ばしておりました。ガリア以外にもローマ人が持ち込んだラテン語がその地域独自の変遷を経て現在に至る例は認められます。このようにラテン語から派生した言語をロマンス語 *les langues romanes* といいます。フランス語とともにイタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語などもロマンス語のグループに属します。

栄華を極めたローマ帝国も4世紀になると蛮族の侵入に脅かされて弱体化し、376年にはゲルマン民族大移動の波が国境に押し寄せます。そして427年にはフランク族 *les Francs* がガリア北東部に侵入し勢力を拡大してゆきますが、476年には帝国の西半分にあたる西ローマ帝国がついに滅亡します。

2. フランク王国

481年サリ支族出身のクロヴィス *Clovis* がいくつかの王国を統一してフランク王国を建設し、メロヴィング朝が始まります。フランスという国名はゲルマン人の一部族であったフランク族の名に由来するのです。フランク王となったクロヴィスは数々の戦いに勝利し、自らもキリスト教に帰依し、ローマ教会の擁護と布教の名の下に領土拡大を実現しました。彼は511年に没しますが、息子の代になってフランクの全ガリア支配は事実上達成されます。

しかしメロヴィング朝にもクロヴィスの死後、第2・第3世代の子孫たちが王国を分割して相続したことにより、内乱や分裂が繰り返されるといった深刻な事態が生じます。この過程の中からメッス地方の豪族ピピン家が全王国の実権を掌握するようになります。さらにこの一族から出たシャルル・マルテル *Charles-Martel* はスペインから侵入したイスラム教徒の軍勢を732年ポワチエ＝トゥールの戦いで撃破し、地方豪族の力を見せつけたのです。そしてシャルル・マルテルの子である小ピピンが王位を篡奪し、751年ピピン3世 *Pépin III* としてフランク王に即位し、ここにカロリング朝が始まること

になります。

シャルルマーニュ（カール大帝）：カロリング朝は、初代国王ピピン3世の子シャルルマーニュ（Charlemagne 在位 768～814）の時に至ってその最盛期を迎えます。シャルルマーニュは中世ヨーロッパ史上最も偉大な支配者として各地を征服し、広大な地域を支配下におき、800年にはローマ教皇レオ3世からローマ皇帝の称号を与えられました。しかし、シャルルマーニュの非凡な資質にもかかわらず、フランク国家の真の統一はついに実現されなかったのです。843年のヴェルダン条約は東西フランクと中部フランクに王国を三分し、870年のメルセン条約で中部フランクは再分割され、後のフランス・ドイツ・イタリア3国が形成されるきっかけとなるのです。

西フランクすなわちフランスでは、パリ伯ウードが888年カロリング朝のシャルル・グロに代わって王位につくと、以後10世紀末に至るまで、この新興豪族とカロリング家は北フランスの支配をめぐり闘争を繰り返しました。そしてついに987年、ウードの孫ユーグ・カペ（Hugues Capet 在位 987～996）がカペ王朝を樹立するに及んで、フランク王国は完全に消滅します。

また8世紀末からスカンディナヴィア一帯に住んでいた北ゲルマンのノルマン人 les Normands が移動を開始し、交易を行うかたわら、ヨーロッパ各地を荒らし回りました。さらに南フランスにはイスラム教徒が入り込み、東方からはマジャール人などのアジア系民族も侵入しました。これらの侵入者に対して城を築き防衛に当たったのは地方の有力者たちです。こういった有力者たちがフランスの封建貴族の始祖を形成したのです。

3. ゲルマン侵入と言語

ローマ人がガリアに侵入した結果、ガリアの言語はほとんど完全にラテン語に取って代わられたことは前述したとおりですが、5世紀以来ガリアに侵入したゲルマン人たちは自分たちの言語を捨てて、被征服民族の言語であるガロ・ロマン語を使用するようになったのです。その理由はガリアの地には進んだローマ文化がすでに根付いていたからです。しかしゲルマン語がまったく影響を及ぼさなかったわけではありません。ゲルマン人たちにより持ち込まれた語は現在のフランス語にも存在します。それらは戦いに関する語彙：guerre「戦争」heume「兜」épieu「槍」flèche「矢」baron「男爵、諸侯」maréchal「元帥」、感情に関する語彙：honte「恥辱」orgueil「高慢、誇り」haïr「憎む、嫌う」honnir「辱める」、田園生活に関する語彙：blé「小麦」bois「森、林」gerbe「束」haie「垣根」jardin「庭」、色彩に関する語彙：blanc「白」bleu「青」brun「茶色」gris「グレー」など、いくつかの分野にかなりの数の語が認められます。またゲルマン語の発音も既存の言語に影響を及ぼしました。現在hで始まるフランス語の単語の語頭のhは、h aspiré（気音のh）とh muet（無音のh）に分類されますが、このh aspiréはゲルマン人が持ち込んだ発音習慣であり、かつては英語の hair やドイツ語の Hund のように発音されていたのですが、後の時代になってh muetと同様に発音されなくなった

のです。しかし、その前でエリジョンをしなかったり (la honte)、前の語とリエゾンしない (les / héros) といった習慣だけは存続したのです。

4. フランス語の起源

俗ラテン語がガロ・ロマン語となり、それがやがてフランス語になるのですが、それは徐々に変化していったのであって、それぞれの間に境界を設定することはできません。ところでフランス語の最古の文献は 842 年に書かれたとされる「ストラスブールの誓約」Serments de Strasbourg といわれる文書です。ヴェルダン条約が締結される前年に、シャルルマーニュの孫で東フランクのルードヴィッヒ王 Louis le Germanique と西フランクのシャルル禿頭王 Charles le Chauve の兄弟がストラスブールで会い、長兄の中部フランク王ロタール Lothaire に対抗すべく盟約を結ぶのですが、この誓約はこのときに取り交わされた文書です。このような一種の外交文書が俗語で書かれるといったことは当時としては大変稀なことであっただけに、またそこには言語進展の過程を推測することができるさまざまな要素が含まれているだけに、これは極めて貴重な資料です。ルードヴィッヒの誓約を最初の部分だけ、現代フランス語訳と対比させて示せば以下のようになります。

Pro deo amur et pro christian poblo et nostro cummun saluament d'ist di en auant,

Pour l'amour de Dieu et pour le salut commun du peuple chrétien et le nôtre, à partir de ce jour,

上段が原文で下段が Ferdinand Brunot による現代フランス語訳ですが、その大意は「神への愛ゆえに、またキリスト教徒とわれわれの共通の救済のために、今日からこの先は…」と続き、相互の援助と忠誠を誓っているものです。

公文書や学術的な著作のほとんどがラテン語で書かれるといった習慣は 16 世紀頃まで継続することになりますので、俗語であったフランス語が本格的に言語の歴史に登場するのはもう少し後の時代になります。

5. 中世封建社会

987 年ユーグ・カペが王位につくことで、西ヨーロッパ最古の王家としてカペ朝が始まります。力強く形成されようとしていた新しい社会と政治の仕組みが 11 世紀を通じて徐々に結晶し、12 世紀に完成され、13 世紀を通じて変容し、崩壊し始めるのです。これが中世の封建社会です。封建制における主従関係は領主が領地（封土）を臣下と与えることにより成立し、その社会的地位は親から子へと世襲的に継承されます。封建領主は堅固な城を築き、それを軍事上の拠点としていましたが、戦時には城門を開いて領

民を中に入れ、保護しなければならなかったのです。

カペ朝の支配は実現したものの、初期の国王たちは政治的に目立った存在ではありませんでした。それは国王の支配がパリを中心とする比較的狭い範囲に限定されていたからです。1066年にイングランドにおいてエドワード懺悔王が相続人なしに没しますが、後継者に指名された血縁関係のないウェセックス伯ハロルドに対して、ノルマンディー公ギヨームが戦闘を仕掛け、ヘイスティングズの戦いで勝利し、英仏海峡にまたがり支配権を確立します。これがノルマン・コンクエストといわれる出来事です。ノルマン・コンクエストに続く約 300 年間、イングランドの宮廷を中心とする上流階級では日常的にフランス語が使用されました。この間に多くのフランス語が英語に入り込んだことにより、現在でも英語とフランス語の単語が大変よく類似しているのです。

封建制成立とともにキリスト教は 11・12 世紀に飛躍的發展を遂げます。聖地への巡礼が盛んになるのもこの頃です。クリュニー修道会やシトー修道会が人びとの信仰心を高揚させるため大きな役割を果たしましたが、十字軍遠征 *la croisade* は聖地巡礼の問題がきっかけとなり開始されるのです。遠征には当初から現実的利害も関連していたのですが、聖地エルサレムをイスラム教徒から奪回するために第 1 回十字軍が 1096 年に派遣されます。以後 1270 年の第 7 次遠征に至るまで西ヨーロッパの封建諸侯や時には国王までもがこの軍事行動に参加したのです。

カペ朝 6 代目の王はルイ 7 世（在位 1137～80）ですが、この王が 1152 年にアキテーヌ公領の相続権を持つ王妃エレオノール・ダキテーヌと離婚したことはフランスに重大な結果をもたらします。エレオノールはノルマンディー公領の後継者であるアンジュー伯のアンリ・プランタジュネと再婚し、その後アンリが 1154 年に英国王ヘンリー 2 世として即位したことで、西フランスの広大な領域がイングランドの支配下に入ります。このようにして出現したアンジュー帝国はカペ朝の脅威となり、これがその後起こる英仏百年戦争の遠因ともなるのです。

ルイ 7 世の子、フィリップ 2 世（Philippe II 在位 1180～1223）の登位とともにカペ朝王権が活気づきます。王領地の拡大がフィリップ 2 世（フィリップ・オーギュスト）の最優先課題でした。彼は政略結婚や交渉、戦争により精力的にこれを実現させてゆきます。そして、父の時代にイングランド王の支配下に入ったノルマンディーなど多くの領地を巧みにカペ朝に帰属させました。その結果、プランタジュネ家の所有する大陸内の領地はギュイエンヌだけになってしまったのです。イングランド王ジョンは神聖ローマ帝国と組んで反抗を試みますが、1214 年 7 月ブーヴィーヌの戦いで大敗し、フランス王権の強さを内外に見せつけることとなりました。

フィリップ 2 世の孫、ルイ 9 世（Louis IX 在位 1226～1270）は幼少で即位したため、母親のブランシュ・ド・カスティーユが摂政としてとりわけ南フランスの支配に手腕を発揮しました。ルイ 9 世はローマ教会から聖人に列せられたことから明らかなように、敬虔な信仰に生きた君主として知られています。この王は 2 度にわたり十字軍遠征に参

加し、2度目の遠征の折にチュニスでペストに罹り病没します。

13世紀はフィリップ2世、ルイ9世、フィリップ4世(Philippe IV 在位 1285～1314)などの優れた国王が長期にわたって指導力を発揮し、国政を盛り上げました。しかし、フィリップ4世(フィリップ・ル・ベル)の3人の子であるルイ10世(Louis X 在位 1314～1316)、フィリップ5世(Philippe V 在位 1316～1322)、シャルル4世(Charles IV 在位 1322～1328)がいずれも世継ぎを得られなかったために、1328年カペ朝は断絶します。

6. 古期フランス語

カペ朝が継続した11～13世紀頃のフランス語を古期フランス語 *l'ancien français* といいます。この時期には共通語といえるようなものはまだ存在せず、いくつもの方言が各地に分布しておりました。これらの方言は北方方言群と南方方言群に大別することができます。北部に住む人々は「はい」(Oui) という意味の語に Oïl を用いていたことから、北方方言群をオイル語 *la langue d'oïl*、南部の人びとが Oc を用いていたことから、南方方言群をオック語 *la langue d'oc* とも言います。オイル語に属するパリを中心とした地域のフランシアン方言 *le francien* が他の方言を圧倒し、やがて共通語としての地位を確立して現在の標準フランス語に発展していくことになります。

俗語による文学作品が書かれるようになるのも古期フランス語の時代からです。まず文学史に登場するのは聖人伝です。これは文字通り聖者の生涯を描いた韻文による物語で、民衆をキリスト教の信仰に導くために編まれたものでしょうが、最も代表的なものは『聖者アレクシス伝』*La vie de Saint Alexis* という625行からなる11世紀中頃の作品です。続いて武勲詞が作られるようになります。これは主にシャルルマーニュとその配下の武将たちの戦場における勲功を称えた叙事詩で、最も有名な武勲詞は1100年前後に書かれた4002行からなる『ロランの歌』*La chanson de Roland* でしょう。12世紀中葉には聖人伝や武勲詞といったジャンルも衰退し、これらに代わってロマンと呼ばれる韻文の物語が登場します。『エネアス物語』『トロイ物語』といった古代に題材を得た作品に続き、宮廷における騎士と貴婦人の恋愛をテーマとする宮廷風恋愛物語が発達し、フランス中世文学はその最盛期を迎えます。

古期フランス語は当然のことながら現代フランスとはかなり異なっていますが、名詞や形容詞が格変化をしたのが大きな相違点の1つといえるでしょう。現代フランス語の名詞は単数と複数にそれぞれ1つの形を持つのみですが、古期フランス語においては、数による変化に加えて、主格 *le cas sujet* であるか被制格 *le cas régime* なのかによっても語尾が変化したのです。mur「壁」という名詞の格と数による変化を定冠詞とともに示せば以下ようになります。

	単数	複数
主格	li murs	li mur
被制格	le mur	les murs

主格形は主語や主語の属詞および呼びかけとしての形であり、それ以外、すなわち目的補語や前置詞の後では被制格形が使用されました。現代フランス語で複数形の指標である語尾の s が、古期フランス語では主格単数形を示す役割も担っていたのです。さらに格による変化は上記の定冠詞にも見られるように、名詞を取り巻く他の文法要素、すなわち冠詞、指示詞、所有詞、形容詞などにも認められる現象です。

Le chevalier a tué le loup. 左記の文は「騎士は狼を殺した」という意味で、主語は騎士であり、狼は直接補語です。このように現代フランス語では、名詞の文法的機能は文中の位置により判断されます。しかし古期フランス語においては、格変化が存在したことにより、主語が必ずしも動詞の前に置かれるとは限りません。Le lou ocist li chevaliers. といった語順の文も同様の意味を表すことができたのです。(ocist : ocire=tuer)

古期フランス語のほとんどの女性名詞はもともと格変化をしなかったということもあり、各体系も実は欠陥を含んだシステムだったのです。早くから主格に代わって被制格が使用されるようになり、やがて中世後期には主格形が消滅し被制格形だけが後世に伝えられることとなります。

フランス語の綴り字が確定するのは 17 世紀ですから、古期フランス語の綴り字はまだ定まっていなかったのです。印刷術が発明される以前のことから、綴り字は方言による相違に加えて、作者や写字生によっても異なり、1つの写本の中で同じ語がさまざまな綴りで筆写されることも稀ではなかったのです。発音に関しては、当時の音声資料が残っておりませんので推定の域を出るものではありませんが、今と違ってすべての文字が発音され、二重母音や三重母音も存在したといわれます。

7. 中世末期

ヴァロワ朝初代の王位についたのはフィリップ 4 世の甥にあたるフィリップ 6 世 (Philippe VI 在位 1328~1350) でした。イングランドのエドワード 3 世はこれをいったんは認めたものの後に取り消し、自分に王位継承権があると主張しました。つまり母親がフィリップ 4 世の娘であり、自分は孫であったからです。1339 年 9 月エドワード 3 世は北フランスに進軍し、ここに百年戦争の幕は切って落とされます。しかし戦争に至る真の原因はもっと別のところにもあったのです。それは毛織物生産のフランドル地方、ワインの特産地でありボルドーを有するギューイエンヌ地方、さらには穀物市場としてのガスコーニュ地方といった英国の支配・影響下にある土地に対してフランスは野望を抱いておりました。

イングランドもジョン失地王のとき以来大陸内で失った領地を回復し、やがては英仏

合体王国を成立させようともくろんでいたのです。

戦局は英国軍の圧倒的な優勢のうちに展開します。すなわちスロイスの海戦（1340年）、クレシーの戦い（1346年）、ボワチエの戦い（1356年）などでフランス軍はいずれも大敗し、ボワチエでの敗戦の結果、国王ジャン2世（Jean II 在位 1350～1364）までもが捕虜としてロンドンに連れ去られます。さらに 1347 年から 48 年にかけて大流行したペストによる人口激減が国土の荒廃に追い討ちをかけます。イングランドで客死したジャン2世の後、長男のシャルル5世（Charles V 在位 1364～1380）が王位につきますが、この王は戦乱とペストで疲弊したフランスを見事に立て直し、絶対王政へ向けて中央集権化を押し進め、文化の発展に尽くしました。特に軍事面で王を支えたのがデュ・ゲ克蘭 Du Guesclin 元帥で、彼は連戦に連勝を重ねイングランドに奪われていた土地を次々に奪回したのです。その結果 1375 年には、イングランドはボルドー、バイヨンヌ、カレーに拠点を残すのみとなりました。

シャルル5世が42歳で他界したとき、長子シャルル6世（Charles VI 在位 1380～1422）がまだ幼少であったため、従兄のブルゴーニュ公ジャン無畏公 Jean sans Peur が後見役を務めることになります。シャルル6世は1388年より親政を開始しますが、間もなく神経疾患の発作を起こすようになり、国内貴族はブルゴーニュ公側とオルレアン公＝アルマニャック伯側に別れて激しく対立します。ここに百年戦争は単に英仏両王家の争いにとどまらず、フランスを二分する新たな様相が展開されることとなるのです。好機到来とばかりにイングランド王ヘンリー5世は1415年ノルマンディーに上陸し、アザンクールの戦いでフランス軍に大勝します。この敗北でアルマニャック派は力を失いブルゴーニュ公ジャンが実権を掌握しますが、彼は1419年アルマニャック派に暗殺されます。ブルゴーニュ派は急速にイングランドと接近し、1420年トロワ条約を締結して、ヘンリー5世がシャルル6世の娘カトリーヌを妻に迎えることを条件にヘンリーにフランス王位の継承権を認めたのです。1422年ヘンリー5世とシャルル6世が相次いで没するとフランスは以下の3つの勢力に分裂し、深刻な政治危機に陥ります。

1. ヘンリー6世の叔父ベッドフォード公ジョンが摂政として支配するロワール川以北
2. 東部のブルゴーニュ公領
3. ブールジュに後退したシャルル7世(Charles VII 在位 1422～1461)が支配するギューイエンヌ地方を除くロワール川以南

このときフランスを救ったのがジャンヌ・ダルク Jeanne d'Arc です。彼女は1429年イングランド軍の激しい攻撃にさらされていたオルレアンを開放し、さらに兵を進めてランスを制圧し、その地でシャルル7世の戴冠式を実現させました。しかしジャンヌは1430年コンピエーニュでブルゴーニュ派に捕らえられイングランド側に売り渡されま

す。そして宗教裁判にかけられ、1431年に異端・魔女としてルーアンで火刑に処せられます。それは19歳のドラマティックな人生の最期でしたが、ジャンヌの悲劇を機にフランスの国民感情が次第にまとまりを見せ、戦局はフランス側に有利に展開します。アルマニャック派とブルゴーニュ派は1435年アラスの和約で和解し、フランス軍は1450年フォルミニーの戦いでノルマンディーを奪回、1453年カスチヨンの戦いではギュイエンヌからもイングランドの勢力を駆逐し、カレーのみを残してついに百年戦争は終結します。

シャルル7世に続いて王位についたルイ11世(Louis XI 在位1461~1483)は巧みな外交手腕を発揮し、国家統一の障害であったブルゴーニュ公シャルル豪胆公 Charles le Téméraire を孤立させ、1477年ナンシーでロレーヌ公の軍隊によって戦死させることに成功します。シャルルには男子がなく、この結果ブルゴーニュは王領に併合されました。ルイ11世はさらにアルトワ、フランシュ・コンテ、アンジュー、メーヌ、プロヴァンスなども併合してフランス国土の統一を達成しました。

伝統的な時代区分に従うならば、ルイ11世の息子、シャルル8世(Charles VIII 在位1483~1498)の治世を最後にフランス中世は終わることになります。シャルル8世が没する15世紀末の時点においてフランスは、軍隊組織は一新され、財政制度も整備されていて、ヨーロッパで最も近代化した国家になりつつあったようです。

8. 中期フランス語

百年戦争をはさむ14・15世紀のフランス語を中期フランス語 le moyen français といいます。この頃になるとフランシアン方言が共通語としての地位を確立し、公文書はラテン語とならんでフランス語でも多く書かれるようになります。また年代記や記録文書などが散文の発達を促します。演劇も盛んに上演されるようになり、キリストの受難や聖母の奇跡を題材とする聖史劇、庶民の日常生活を皮肉や風刺をこめて描いた喜劇や笑劇に人気が集まります。

音韻変化: 古期フランス語で発音されていた語末子音が中期フランス語では発音されなくなり、二重母音や三重母音も単純化に向かいます。この結果、peau「皮膚」と pot「つぼ」、saut「跳躍」と sot「愚か者」などは綴り字でしか区別ができなくなります。-er -ir -oir といった動詞不定法の語尾の r も一時期発音されなくなり、後に -ir と -oir の語尾については発音が復活します。

さらに、中期フランス語では動詞の活用体系にも異変が起こります。すなわち古期フランス語では、すべての活用語尾が音声面においても区別が可能であったことにより、主語人称代名詞はイタリア語やスペイン語のように用いられないこともありました。しかし語末音の弱化・消滅が動詞活用形のうち、いくつかの人称や数を識別不可能にしたのです。このために行為者を示す je, tu, il といった代名詞の使用が一般化するのです。

綴り字の改変：綴り字に関しては語源へのこだわりから改変が試みられます。現代フランス語の sept 「7」 vingt 「20」 doigt 「指」 などには発音しない p や g が含まれていますが、これらは古期フランス語においてはそれぞれ set, vint, doit といった綴り字でした。それがこの時期に語源であるラテン語の septem, viginti, digitum に近づけるために p や g が付加されたのです。こういった改変は時には誤って行われることもありました。poids 「重さ、目方」はラテン語の pensum 「計られたもの」に由来する語で、古期フランス語では pois だったのですが、pondus 「秤のおもり、重さ」が語源であると思って d が挿入されたのです。sapere が語源の savoir 「知る」も scire に由来すると考えて、sçavoir と綴られたことがありましたが、後に誤りに気づいて savoir に戻されました。しかし poids は元の綴りには戻されませんでした。それは同音異義語の pois 「えんどう豆」が存在したからです。

二重語 doublet：世の中が進歩するにつれ、それまでには存在しなかった事物や概念を表すために新語が必要となります。これを補うために多くの古典ラテン語が借用されました。フランス語の大部分は元来ラテン語が変化して出来上がったものですから、後の時代に学者によってラテン語から借用された同一語源の語が並存する状況がここで生じたのです。これを二重語といいます。古い相続語の意味が語源からかなりかけ離れると、これを補うべく借用語が導入されるときに二重語がよく生まれます。しかし使用者は通常その同一性に気づかないのです。そのいく例かを以下に示します。

古い相続語	語源のラテン語	後の時代の借用語
frêle 「きゃしゃな」	fragilis	fragile 「もろい」
loyal 「誠実な」	legalis	légal 「法律上の」
nager 「泳ぐ」	navigare	naviguer 「航行する」
naïf 「純朴な」	nativum	natif 「～の生まれの」

格体系の崩壊：前述した語末子音の無音化は中期フランス語の文法体系に重大な影響を及ぼします。すなわち主格単数や被制格複数語末の s が発音されなくなったことにより、音声の面においては格や数の区別ができなくなったのです。古期フランス語の後期からすでに格体系には乱れが生じていたこと、被制格形の使用機会が多いことなどの理由により、概して被制格形が存続し主格形は消滅します。しかし、sœur 「姉妹」 peintre 「画家」 prêtre 「司祭」 traître 「裏切り者」 fils 「息子」などは主格形の生き残りであり、主格と被制格が微妙な意味の相違を伴い、ともに存続した次のような例もあります。

主格形	被制格形
copain 「仲間、仲よし」	compagnon 「連れあい、友人」
gars 「少年、若者」	garçon 「男の子、少年」
sire 「～殿」(cf. 英語の sir)	seigneur 「領主、貴族」

また冠詞が名詞の単数・複数を区別するとともに性をも識別するための役割を担うようになり、その使用範囲が拡大します。部分冠詞 du, de la や不定冠詞複数 des が頻繁に使用されるようになるのも中期フランス語の時代からです。

9. おわりに

フランスという国家の起源から中世末に至る約 1500 年間の歴史と、それぞれの時期における言語の状況を概略的に記述しましたが、もっと深く詳細に学習するには更なる努力が必要です。フランス語史についてもフランス語の知識がない人にも理解するように、学術的・専門的事項は省略し基本的なことがらのみ採り上げました。16 世紀（ルネッサンス期）以後のフランス史やフランス語史の知識を深めるためには、これまでの記述を足がかりとして下記の参考書類を読まれることをお勧めします。

(本田忠雄／ほんだ・ただお：文学部名誉教授)

参考図書

- 福井憲彦 編 『フランス史』 2003 年 山川出版社
 井上幸治 編 『フランス史』(新版) 昭和 56 年 山川出版社
 森本英夫 著 『フランス語の社会学 ――フランス語史への誘い―』 1988 年
 駿河台出版社
 家島光一郎 他 著 『現代フランス語のできるまで』 1973 年 白水社
 島岡 茂 著 『フランス語の歴史』 昭和 49 年 大学書林
 山田秀男 著 『フランス語史』 1981 年 駿河台出版社
 ピーター・リカード 著 伊藤、高橋 訳 『フランス語史を学ぶ人のために』
 1995 年 世界思想社

VIII

フランスの食

すでに日本語化しているフランス語に、「グルメ gourmet」という言葉があります。これは「食通・美食家」という意味で、「あの人はなかなかグルメだ」と言うと、「あの人は美味しいものが好きだ、味にこだわりがある、繊細な味覚を持っている」ということになりますが、もう一つ、フランス語には「グルマン gourmet」という言葉があって（女性形は gourmette）、実はこちらの方が、フランス人にとっては自然な褒め言葉です。すなわちフランス人は、自分が「グルマン＝食いしん坊、大食漢、健啖家」と言われることを何より誇らしく思っているのです。

個人差はもちろんありますが、基本的にフランス人というのは、実によく食べる人々です。フランスのレストランで何か注文すると、普通の日本人にはとても食べきれない量の料理が出てくることがしばしばです。（一度アルザス地方のある店で「ソーセージとシュクルート」を頼んだら、信じられない分量のキャベツの山を出されたことがありました）。

またフランス人の食事時間というものは、非常に長い。これももちろん、家庭によって差はありますが、夕食だと一時間くらいは余裕で食べています。平均的なフランス人家庭へ休日の食事に招かれたりすると、大体こんな調子になります。

まずは居間のソファなどでくつろいで、軽いおつまみ（オリーブとかスナック菓子類）と食前酒で「乾杯！」（« À votre santé ! » とか、« tchin ! » と言います）。食前酒は甘口のワイン、ビール、リキュールなどです。大抵の家ではペルノ、マルティニ、チンザノといった食前酒のボトルをいくつか常備しています。子供はもちろんジュース。これをやりつつ、長々とお喋りを楽しみます。

それからゆるゆる食卓につき、サラダ、スープといった軽めの品である前菜が出てきて、「たくさん召し上がれ！」（« Bon appétit ! »）と叫びます（ちなみにフランス語には「いただきます」に対応する言葉が存在しません。非常に敬虔なキリスト教徒なら「食前の祈り bénédicité」というのを唱えて神にその日の食事を感謝するのですが、一般家庭ではまずめったに見かけません）。食事と一緒に当然飲み物（水、ジュース、ワイン）が出され、パン（大抵は baguette といういわゆるフランスパン）が出されます。（ですが、日本人の我々は注意しましょう。前菜と一緒に大量にパンを食べてしまって、次のメインの時にはもう満腹、とならないように）。

次いで、メイン・ディッシュの肉か魚です。(肉なら例えばローストビーフ、ローストチキン、ポトフ、鶏の赤ワイン煮など。魚はタイ、スズキ、シタビラメ、サケなど)。メイン・ディッシュには付け合わせに茹で野菜などが美しく添えられます。ラタトゥイユ、ジャガイモ(のピューレ)などはフランス人の大好物です。またこの時パンが非常に役立ちます。フランス人は肉や魚にかかっているソース(出来合いではない)や肉汁を非常に賞味するので、パンをつかって拭い取って食べるのです。

そして大きなプレートに乗って出されるカマンベール、ブリー、シェーヴル、ブルー・ド・ヴェルニュといった各種のチーズ、それからお手製の果物のシロップ煮や林檎のタルト(林檎とパイの上下がひっくりかえるとタルト・タタン)等々のデザート、最後は濃いめのコーヒーで締めくくります(ちなみにフランス語には「ごちそうさま」ありません。「あの魚はほんとにおいしかったですね」などと言って調理してくれた人を褒めます)。

と以上のような手順の食事が、長いときは三四時間もかかります(小食の、また「イラチ」の日本人だったらとても付き合いきれないと思います)。またフランスのお店や事務所や官公庁がお昼休みを二三時間平気でとるのも、彼等の食事時間の長さとは無関係ではありません。フランス人はこのように、ボリュームのあるおいしい食事をゆっくりと楽しむ、会話好きの「グルマン=食いしん坊」な訳です。我々はともすると、日本の多くのフランス料理店が見せる上品な感じ、お高くとまった感じ、に惑わされがちですが、フランスの食事とはいわば「生きる歓び」の時間なのであり、「気取り」などとはほど遠い世界なのです。

もちろんフランスには、洗練された味を追求する世界的にも有名な高級料理店が多数あり、フランス料理が「グルメ=美食」の代名詞であることも事実です。しかし現実には大多数のフランス人にとって、レストランガイド本「ミシュラン」の格付けする三つ星店など全く縁遠い存在であって、日常的な彼等の食事はあくまでも、質と量と価格のバランスの取れた、実質的かつ経済的なものなのです(フランス人というのは大抵ケチだと思って間違いありません)。そしてこうした「合理的な美食家」フランス人の気質は、ほとんど必然的に形成されたものだと言えます。そもそも、日本の約1.5倍の国土のほぼ55%が農地であるフランスは、気候にも恵まれた大農業国ですから、おいしい食材が豊富に、しかも極めて安価に手に入るところなのです(果物の安さときたらありません。ある時フランス人に日本のメロンの高さを話していたら、「それなら日本へ行ってメロンで大もうけしよう!」と言われました)。市場やスーパーで、日常的に上質の素材に接している彼等は、全く背伸びせずに、いとも自然に、食通となっているのです。

ところが近年、フランス人の食生活は急激に変わりつつあります。利便性に目覚めた

フランス人は冷凍食品を大量に消費するようになり、またアメリカ的なファースト・フードを受容して、食事の時間もどんどん短縮化するようになりました。ですがフランス人は同時に、こうしたアメリカン・スタイルの食事を「マズイメシ^{マル・ブッフ} male-bouffe」と呼んで軽蔑し（私が下宿していた家のお婆さんはケチャップが大嫌いでした）、伝統的な食生活を守ろうともしています（マクドナルドの支店を襲撃して逮捕された過激派ジョゼ・ボヴェのような人もいます）。フランスの食生活が変化しつつあることは確かですが、恐らくフランス人は、自分たちの「おいしい生活」の伝統を決して無くすことはないでしょう。何しろ、名うての食いしん坊ですから。

フランスのおいしい物あれこれ（ほんの一部）

飲み物：無数のワイン（ボルドー、ブルゴーニュ、アルザス等）、ペリエ、バドワ（炭酸水）、オレンジナ（炭酸飲料）。

乳製品：無数のチーズ（カマンベール、ブリー、ロックフォール、ブルー・ドーヴェルニュ、エマンタル等）、バター、ヨーグルト。

パン：クロワッサン、バゲット、田舎パン（パン・ド・カンパーニュ）、パン・デピス。

お菓子：ガレット・デ・ロワ、マカロン、フラン、チョコレート、LU（リュ）のビスケット。

野菜・果物：^{アルテイシヨール}チョウセンアザミ、^{アンディーヴ}チコリ、^{マッシュ}ノヂシャ、^{アリコ・ヴェール}サヤインゲン、セップ茸、トリュフ、洋梨、フランボワーズ。（フランスの野菜・果物はほぼ全て日本よりおいしい）。

魚介類：ムール貝、カキ、オマール海老、シタビラメ、マルセイユのブイヤベース。

肉類：鴨、ブレスの鶏、ハム、ブーダン（腸詰め）、フォワ・グラ。

調味料：塩の花、マスタード。

番外：蛙のもも肉、鳩、ヒバリのパテ、^{エスカルゴ}カタツムリ。

ミニコラム：フランス語の検定試験

フランス語能力を試し、またそれを公式に証明するものとして、英語の英検や TOEFL、TOEIC などと同様のいくつかの検定試験があります。

実用フランス語検定試験（仏検）：日本の文部科学省認定。大阪は関西大学を試験会場として実施され、外国語科目として単位認定を受けることができます。くわしくはこちらまで。

<http://apefdapf.org>

留学時などに、語学試験免除の証明となる検定試験としては、以下の3つが知られています。

TCF, DELF/DALF：フランス文部省公認。くわしくはこちらまで。

<http://www.delfdalf.jp>

TEF：パリ商工会議所実施。くわしくはこちらまで。

<http://www.ccfj.com/talk/tef/>

IX

フランスのファッション

フランスと言えばモードの国というイメージをもつ人も多いのではないのでしょうか。日本で人気のハイブランドには、エルメスやルイ・ヴィトン、シャネルやディオールといった多くのフランスのメゾンが名を連ねます。日本では「パリコレ」の名で知られる季節ごとのブランドの新作発表会は、正式には「パリ・ファッションウィーク *Semaine de la mode de Paris*」。「パリコレ」という略称があること自体、日本でフランスがモードの最先端を行く国としての地位を保ち続けてきたことを示しているでしょう。日本のファッション雑誌にも、カタカナのフランス語が踊ります。「オートクチュール *haute couture*」「デコルテ *décolletée*」「ローブ *robe*」「ビジュー *bijou*」…。フランス語を冠した日本のブランドもたくさんあります。フランスの人物名をネットで検索すると、日本のアパレルブランドが検索の上位にくることも少なくありません。

そもそも、「mode」という語もフランス語から来ています。面白いのはこの語、もともとはある社会に特徴的な習慣や伝統として現れているもの、つまり、時間の流れの中で固定化していったものを指したのです。それが1700年頃から、ある社会に見られる一時的な慣習や短期的な嗜好も指すようになります。こうした語義の変化の背景には、18世紀以降、ブルジョワジーの勃興にともない社会的地位の流動性が少しずつ増大し、その人の階級を示す記号たる衣服もまた変化の波にさらわれるようになっていったことがあります。日本語に定着した「モード」はすっかり、「流行」、つまり生まれてはやがて廃れるものを意味していますね。

1. 宮廷社会の「モード」

いわゆる「モード」が始まる前の時代に、今でいうファッション・アイコンとして名を馳せたのが、マリー・アントワネットでした。彼女の着こなしはファッション人形やモード雑誌を介して広く宮廷の外へ、そしてヨーロッパへ伝えられ、高貴な女性たちのファッション界を席卷しました。その陰の立役者として、ベルタン嬢というモード商がいたのをご存知でしょうか。モード商は18世紀半ばに現れ始めた新たな職種でした。それまで細かい分業体制が敷かれていた服飾業界のあり方を突き崩し、布地などの購入から仕立てまでをひと所で済ませられる革新的な消費形態を生みだしました。ベルタン嬢はマリー・アントワネットが「モード大臣」と呼ぶほど、王妃のお気に入りのデザイナーとなります。そして、王室の威光もあってか、1776年に最初のモード商組合の親

方となっています。この同業組合が他の組合と異なるのは、「モード製造工／商 Faiseuses et Marchandes de modes」と女性形であること。所属も全員女性でした。実はモード商が誕生する以前まで、女性は仕立ての全工程に携わることが許されておらず、他の多くの職種と同様、服飾においてもメインを張るのは男性でした。モード商という新たな業種の誕生は、女性が服飾の表舞台に足を踏み入れる動きと軌を一にしていたのです。さらにモード商は、それまで顧客に最終的な決定権があった服のデザインを、自ら提案するようになります。モードの焦点が、「誰が着るか」という点から「誰が作るか」という点へと徐々に移っていくのです。

2. 「モード」の社会的機能

フランス革命後の1793年に、服装の自由を定める法令が制定されました。それまで社会階級と明確に結びつけられていた衣服の規範が法的にはなくなりましたが、その自由の中で新たな規範が形成されていきます。貴族だけでなくブルジョワ層も「モード」を意識し、作り出す側にもなります。また、19世紀以降、「モード」といえば女性の服装を指すようになります。それだけ女性の服装が変化に富んでおり、華やかな装飾と豊かな色彩に溢れていたのです。一方の男性の服装は、ダンディズムの美意識が定着するにつれ固定化されていきます。装飾が減り、「黒の時代」が到来します。それでは、男性が流行に無頓着でいられたかということ、そういうわけではありません。女性と比べてシンプルに見える装いの中にも流行があり、着る人のセンスが問われることになりました。

ファッションが社会階層を駆け上がる大切な要素となっていたことは、バルザックの『幻滅』からうかがえます。主人公のリュシアンは、フランスの地方アングレームで、詩人を志す眉目秀麗な若者。パトロンであった地方貴族の女性バルジュトン夫人との痴情沙汰が原因で、彼女に強引に連れられて駆け落ち同然でパリに赴きます。オペラ観劇に行くことになったリュシアンは、チュイルリー公園を散歩中に、道行く人々を見て自分の一張羅である燕尾服がたいへんな流行遅れであることに気づき、大慌てで服を仕立て、靴を買います。仕立て屋に勧められるがままに購入した最新流行のアイテムを身にまとい、理髪師に髪をカールまでさせたリュシアンの出で立ちはいかにもおのぼりさん風であり、彼は手痛い嘲笑の的となります。そして早くも翌日には、彼を恋人としていることを恥じたバルジュトン夫人に袖にされるのです。階級闘争における服装が、流行の移り変わりが激しいだけに、それまでと比べより重要かつ危険な武器となったことが分かります。

3. 「モード」が生む欲望

フローベールの小説『ボヴァリー夫人』では、主人公のエンマが、トストの田舎でモ

ード雑誌を購読し、パリの地図上に指を走らせては一流洋裁店の所在地を探し当て、華やかなパリ生活の夢を繰り広げるさまが語られています。直接目にした人々の界限だけで流行するものだったファッションが、メディアの発達によって飛躍的にその影響範囲を拡大したのです。地方にいてもパリの流行に敏感だったエンマの着こなしは艶福家のロドルフの目に留まり、彼にエンマを落とす決心をさせます。

そして 19 世紀には、それまで服と言えれば仕立てるものだったのが、消費者層の変化に伴って、あるいは新たな消費者層を生み出すかたちで、既製服が生まれます。既製服の登場と大量消費時代の到来による服飾業界の激越な変化は、ゾラの小説『ボヌール・デ・ダム百貨店』にうかがわれます。主人公ドゥニーズと百貨店経営者ムーレ氏の恋の舞台は、その名も「ご婦人方の幸せ Au Bonheur des Dames」という名のデパート。それまでは仕立て屋に一度入ったら最後、客には店員がピタリとくつつき、何も買わず（注文せず）に出ることは許されませんでした。定価がないので値段交渉もしなければなりません。服を買うというのはなんとも敷居の高い行為だったのです。デパートが画期的だったのは、「Entrée libre」つまり「入場無料／出入り自由」という気安さでした。値段の明示された安価な商品を自由に手に取って吟味することができるようになったのです。ボヌール・デ・ダム百貨店のまばゆいばかりのガラス張り建築から透けて見えるのは、あふれんばかりの布、布、布。色鮮やかに美しく陳列された商品は道行く女性たちの購買欲を刺激し、彼女たちは吸い込まれるようにこのデパートへ入っていきます。この小説では、19 世紀にヨーロッパを走り始め時空間の感覚を一変させた蒸気機関車さながら、大型百貨店が昔ながらの小店商を踏みつぶし、それを糧にするようにして繁栄を極めるさまが克明に描き出されています。

しかし、「既製服」や「大量消費」が即座に現在のわたしたちと地続きのカジュアルな服装を定着させたわけではありません。ベル・エポック期あたりまで、女性はコルセットを締めて体をきつく縛り上げていました。19 世紀末から 20 世紀初めを時代背景とするプールの小説『失われた時を求めて』では、登場人物の装いが鮮やかに描き出されています。その筆致はモード雑誌さながら、服飾用語と色彩を駆使した細かい描写がメタファーと織り交ぜられて、読者の想像力をかき立てます。主人公の憧れであったゲルマント公爵夫人の洗練されたドレスをはじめとする女性の優美な服装だけでなく、シャルリュス男爵のエレガントな燕尾服など、男性の着こなしにも賛美の眼が向けられています。また、高級娼婦からスワンの妻となったオデットの服装の変化は、社会階層とモードの奥深い関係を示唆しています。モードを「沈黙の言葉」と捉えていたプールの作品を読むと、モードがいかにそれをまとう人間の本质と分かちがたく結びつき、また、それが流行する社会を反映するものなのかを思い知らされます。

4. 「モード」の国フランス

長らく身体を縛り付けてきたコルセットからついに女性を解き放ったのが、20 世紀のファッションでした。フランスを代表するブランド CHANEL。コルセットを使用しない婦人服自体はシャネルの発明ではありませんでしたが、彼女自身がファッション・アイコンとして表に出て、女性を解放するという明確な信念のもとにそのデザインを展開した点において、際立った存在感を放っています。

パリが世界のモードの発信地となり、フランスが世界的なモードの国としての地位を固めたのが 20 世紀でした。その要因となったのが、オートクチュールという仕立業の確立です。「オートクチュールの父」と呼ばれるヴォルトは、実はイギリス人（英語読みはワース）。1857 年にパリに自分の店を構えたヴォルトは、生地や工賃だけでなく、デザインにも付加価値をつけました。また、新作を生きた人間に着せて発表するスタイルを考案しました。これが現在のパリ・コレクションの原形になっています。次いでモードを支配したのが、ポール・ボワレです。1903 年に日本の着物に着想を得て作った「孔子コート」は、女性にコルセットを手放す決心をさせるのに十分なエレガンスを備えていました。そして第一次世界大戦時、シャネルの革新的なデザインは、銃後で動員された女性たちの心をつかみます。ジャージー生地を使ったその女性服のシンプルさと動きやすさは、時代の空気を鋭敏に嗅ぎとりつつ牽引するものでした。こうしてパリのオートクチュールは、1910～1920 年代に黄金期を迎えるのです。

二度の世界大戦を経て、20 世紀はアメリカが世界の主導権を握ります。それは服飾業界においても例外ではありませんでした。21 世紀の今、服飾産業におけるフランスの重要度は、とりわけ経済的な側面から見るとさほど高いとはいえません。しかし、「モードの国フランス」の威光は決して衰えてはいません。それは、パリのオートクチュールの産むモードが、単に大量購入・大量消費されることを目的としていないからではないでしょうか。もちろんその部分で、ユニクロや H&M、ZARA といったファスト・ファッションに太刀打ちできないのは事実でしょう。しかしそうした消極的な理由だけではなく、オートクチュールの衣服は、デザイナーが作品性を自負し、その時代を繊細かつ鮮やかに映し出していることによって、他にはない輝きを帯びているのではないのでしょうか。伝統に裏打ちされた高度な技術が、時代を先取りしたデザインで新たに生まれ変わる——パリのオートクチュールがそうしたものである限り、わたしたちの憧れであり続けるでしょう。

(塚島真実／つかしま・まみ：文学部准教授)

ドイツ篇

I グリム兄弟の「メルヒェン」とは何か

ドイツで生まれ、世界中で人気のあるものの一つはグリム兄弟のメルヒェンで間違いないでしょう。「白雪姫」、「赤頭巾」や「ヘンゼルとグレーテル」くらいは誰もが知っていると思いますが、しかし、グリム兄弟のメルヒェンとは何かと聞かれて、ちゃんと答えられる人は少ないと思います。ここでは、仮に以下のように定義してみましょう。すなわち、グリム兄弟のメルヒェンとは、グリム兄弟が蒐集したものから作ったものだということです。世界中に流布しているグリム童話集は 1857 年に出版された『子供と家庭のメルヒェン集』（*Kinder- und Hausmärchen*、省略: KHM）の第 7 版ですが、そこまでの道のりは長いものでした。以下ではその経緯を明らかにします。



語り伝えられてきた昔話を集めて出版するのは、16 世紀・17 世紀のイタリア語圏とフランス語圏に始まり、それらがドイツ語にも翻訳され、後のグリム童話集にも大きな影響を及ぼしました。イタリア語やフランス語からの翻訳だけでなく、1782 年から 1812 年の間には、ドイツ語のメルヒェンを集めたものが四つ出版されました。しかし、グリム兄弟をその、言わば、ヨーロッパの蒐集ブームに参加させた切っ掛けは意外な方向から現れました。

1805 年に、クレメンス・ブレンターノ（Clemens Maria Brentano, 1778–1842）とアヒム・フォン・アルニム（Achim von Arnim, 1781–1831）の『少年の魔法の角笛』（*Des Knaben Wunderhorn*）という民謡集の第 1 巻が刊行されました。当時は、上述したドイツ語圏の蒐集活動が示すように、古い民謡だけでなく、ドイツに語り伝えられてきた「Märchen」（メルヒェン・メルヘン）に対する関心も高く、ブレンターノとアルニムもメルヒェンのコレクションを刊行する計画が最初からあったと思われます。1806 年から、グリム兄弟が第三者の斡旋を経てブレンターノから頼まれ、『少年の魔法の角笛』の第 2・3 巻の蒐集活動に協力していました。

最初に頼まれたのは、当時カッセル市（Kassel）の図書館員だったヤーコプ・グリム（Jacob Ludwig Carl Grimm, 1785–1863）でしたが、まもなく彼は、同じ図書館員だった弟のヴィルヘルム・グリム（Wilhelm Carl Grimm, 1786–1859）と四男のフェルディナント・フィリップ（Ferdinand Phillip Grimm, 1788–1845）にも協力させました。彼らの蒐集活動はとても熱心だったと言われ、間もなく、民謡だけでなく、昔話・メルヒェンをも蒐集するようになりました。ブレンターノの大きな影響を受けながら、グリム

兄弟のこの最初の蒐集活動が 1810 年まで続きました。

ヤーコプとヴィルヘルムは蒐集した様々な話をもとに手書き原稿を作り、1810 年に 54 話を含む原稿をベルリン (Berlin) のブレンターノに送りました。この一番古い蒐集が「メルヒェン集の祖稿 („KMH-Urfassung“)」として知られていますが、以前はその発見の場所にちなんで「エーレンベルク手稿」 („Ölenberger Handschrift“) と呼ばれました。

1810 年 9 月、ブレンターノは出版のために、グリム兄弟に、今まで蒐集してきたメルヒェンをリクエストしました。義理もあつたに違いありませんが、グリム兄弟が希望に従いながら、(有難いことに!) 手書き原稿の写本を提出しました。しかし、ブレンターノはあまり満足しなかった模様です。「貰った」とだけ素っ気なく返事し、グリム兄弟にわざわざ頼まれたにもかかわらず、手書き原稿を返却しなかったのです。

グリム兄弟の手元にあった写本はその間処分されたものの、ブレンターノが持っていた手書き原稿の方は、彼の死後 (1842 年) に、現在フランス領のアルザス・ロレーヌにあるエーレンベルク修道院 (Kloster Ölenberg) で保管されました。これが第一次世界大戦後、発見され、今はスイスにある「ボードマー・コレクション、コロニー・ジュネーブ (Sammlung Bodmer, Cologny-Genève)」で保管されています。

2007 年に「1810 年の手書き祖稿」(*Die handschriftliche Urfassung von 1810*) というサブタイトルを持つ最初の蒐集が出版され、簡単に入手できるようになりました。目次から見ますと、54 話からなっていますが、8 話はタイトルのみが掲載され、物語自体は残っていないため、実際の総話数は 46 話となります。有名なものも含まれていますが、例えば「兄ちゃんと妹ちゃん」(*Das Brüderchen vnd das Schwesterchen*) のように、違うタイトルがついています。この物語は、現在グリム童話を代表するものの一つである「ヘンゼルとグレーテル」(*Hänsel und Gretel*) の原初形態です。

1811 年の春まで、ブレンターノからの連絡は結局来ませんでした。しかし、アヒム・フォン・アルニムに励まされて、グリム兄弟はどんどん増えてきた物語を自分で出版することにしました。1812 年、蒐集した昔話や他の資料に基づいて、グリム童話集の初版の第 1 巻が刊行されました。出版者は、アルニムが斡旋したベルリンにあるゲーオルク・アンドレーアス・ライマー (Georg Andreas Reimer) であり、9 月に提出した原稿がクリスマス頃に、出版されました。本題は『子供と家庭のメルヒェン集—グリム兄弟蒐集 (ベルリン、実科中学書店、1812 年)』(*Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Berlin, in der Realschulbuchhandlung. 1812*) でした。

完成された初版の第 1 巻は、475 ページのなかに、86 話が入っているものの、複数の話からなるものがあつたため、総話数は 100 話になっています。本の終わりに付録としてついている説明や資料が示すように、言語学者たるヤーコプ・グリムは、蒐集したメルヒェンの学問的な価値を強調したかったのです。しかし、当時の読み手は、やはり、文学的な価値のある、子供向きのメルヒェン蒐集を要求しており、不満や批判の声が聞

こえました。

1812年と1814年の間に集めてきた資料がさらに大幅に増えてきたため、1815年に、初版の第2巻が出版されました。内容は70のタイトルがあるものの、実質的に、72話からなります。この年から、蒐集の第3巻の出版計画がありましたが、しかし、いわゆる「初版」は、結局この二巻に限られており、総話数は156話です。

特に第2巻の販売は希望を満たさなかったにもかかわらず、1819年には、第2版が



出版されるようになりました。この第2版の一つの特徴として、五男のルードヴィヒ・エミール・グリム (Ludwig Emil Grimm, 1790–1863) が口絵として作った、ドロテア・フィーマン (Dorothea Viehmann, 1755–1850) の銅版画が挙げられます。本論の始まりに掲載されているグリム兄弟の肖像画も、エミールが作った銅版画です。

第2版の序文において、ヴィルヘルム・グリムに褒められたドロテア・フィーマンが、この銅版画によって「グリムのメルヒェンの女性の語り手の理想像に祭り上げられたのである」¹。言い換えれば、その銅版画がメルヒェンの語り手像を理想化しながら、語り伝えられた物語が本物であることを強調すると同時に、グリム兄弟が大幅に手を加えたことを隠蔽する効果があったに違いありません。

第2版のもう一つの特徴は、子供の教養に合わせることに文学性を高めることという要求に応じて、文学研究者たるヴィルヘルム・グリムがテキストをさらに補足・訂正し始めました。一例を挙げると以下のようなものです：²

そうやって二人は（ラプンツェルと王子）喜んで、永いこと、楽しくくらししました。フェーはそれに少しも気づきませんでした。ところが、ある日のこと、ラプンツェルが、フェーにいいました、「ゴーデルおばさん、教えてちょうだい、服が小さくなって、私に合わなくなってしまったのよ。」「全く、おまえはとんでもない子だよ」とフェーは言いました。
(初版、1812年)

そうやって二人は喜んで、永いこと、楽しくくらししました。そして、夫と妻のように愛しあいしました。魔法使いの女は少しもそれに気づきませんでした。ところが、ある日のこと、ラプンツェルが魔法使いの女にいいました。「ゴートルおばさん、教えてちょうだい、あの

¹ ハインツ・レレケ（著）小澤俊夫（訳）『Die Märchen der Brüder Grimm / グリム兄弟のメルヒェン』岩波書店、1990年、145ページ。原文：Rölleke, Heinz 『Die Märchen der Brüder Grimm – Eine Einführung』Reclam、第5版2005年、90ページ参照。

² 小澤（訳）、1990年、140~141ページ。

若い王さまをこの塔の上に引きあげるより、あなたを引きあげる方がずっと重いのよ。」

「全く、おまえはとんでもない子だよ」と魔法使いの女は言いました。(第二版、1819 年)

1819 年版から分かることが 2 つあります。まず 1812 年版ではラプンツェルが妊娠していることが暗示されているのに対して、1819 年版ではそれが隠されています。これに関してヴィルヘルム・グリムは序文の中で「けれども、子どもにふさわしくない表現は、この新しい版では慎重に抹消しました」と説明しています。もう一つ重要な点として、メルヒェン研究者であるハインツ・レレケ (Heinz Rölleke) が次のように指摘しています。

この短い引用文のなかでさえ、ある種の、ことばの国粹的傾向によって、「王子」が「若い王さま」に変えられ、「妖精」が「魔法使いの女」に変えられていること、そして、全体として、言葉の使い方が流動的であることに気づく。³

「全体として、言葉の使い方が流動的であること」とは、最初の手書き原稿 (祖稿) から第 7 版まで訂正や補足が絶え間なくあったという意味です。と言うのは、レレケがさらに指摘したように、語り伝えられてきた昔話が蒐集され印刷されたことで、口頭的な語りのもともとの流動性がなくなってしまったのは事実ですが、ヴィルヘルム・グリムが「版を追うごとに絶えず文章を変えていたおかげで、少なくとも兄弟の手による最終版までは、『グリム童話集』のなかにいくらか動きのようなものがあったのである」。

4

確かに、そうですが、しかし見逃してはいけないのは、口頭の語りの流動性とヴィルヘルム・グリムがもたらした流動性のメディア的な相違です。すなわち、口頭的な語りは各々の語りの場に合わせたの変更、すなわち潤色、声の強調や大袈裟な表現などであっても、物語の性格自体はあまり変更しなかったと思われます。それに対して、ヴィルヘルム・グリムの「動きのようなもの」は、訂正、増加と補足だけではなく、19 世紀の読者要求に合う文学そのものを作ったのです。私たちにとって、ヴィルヘルム・グリムの仕事は大きな幸運だったに違いありません。なぜかと言いますと、それなしでは、最初に蒐集した「祖稿」の物語が、短くて素朴で面白くないため、忘却の犠牲者になってしまったかも知れません。

ヴィルヘルム・グリムが施した変更については、本論の最後にもう少し説明したいと思いますが、その前に、『グリム童話集』の出版史を明らかにする必要があります。第 2 版の特徴は、あと二点あります。すなわち、一点はメルヒェンの番号付きが始まり、

³ 小澤 (訳)、1990 年、141~142 ページ。

⁴ 小澤 (訳)、1990 年、142 ページ。

もう一つは、付録されていた学問的な説明がなくなり、1822 年に、別の本として出版されました。

第 3 版は、1837 年に出版されましたが、それを可能にさせたのは、1819 年の第 2 版に基づく、1823 年の英語の翻訳であるに違いありません。この英語版が猛烈に人気を得た理由は、主に二つあったと思われます。すなわち、エドワード・テイラー (Edward Taylor) が全訳でなく、厳しく選択したものしか翻訳しなかったし、その抄訳の表現を子供のために優しくしました。それより大切なのは、ジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank) の挿絵だったに違いありません。

いずれにしても、『「German Popular Stories」 Translated from the 「Kinder- und Hausmärchen」 collected by M.M. Grimm From Oral Tradition』の素晴らしい成功を見て、グリム兄弟もいわゆる「小さな版」(Kleine Ausgabe)を選択することにし、その初版が 1825 年に刊行されました。ヴィルヘルム・グリムが選択した物語は一番人気と思われた 50 話からなり、英語の挿絵版の見本に従って、弟のルードヴィヒ・エミール・グリムに七つの銅版画挿絵を作成させました。

この方針のおかげで、ドイツ語のメルヒェン集も人気を得て、「小さな版」の 1833 年の第 2 版だけでなく、1837 年に、『子供と家庭のメルヒェン集』の「大きな版」の第 3 版も刊行されるようになりました。もちろん、今回も手が加えられたほか、メルヒェンの総話数もさらに増加されました。いわゆる「聖人伝」が入っているのも、第 3 版から始まり、最初は 9 話でした。そういう過程で、グリム童話集と挿絵の緊密な関係が始まりましたが、皮肉なことに、現在販売されている「小さな版」は文庫本であり、一つの挿絵も入っていません。

グリム兄弟生前の童話集の 1837 年以下の出版史は、1857 年までは「大きい版」がさらに、第 7 版まで改訂され、「小さい版」は、1858 年に、第 10 版が刊行されました。ヴィルヘルム・グリムが第 7 版の刊行の 2 年後に亡くなったため、第 7 版は、研究者に「決定版」(Ausgabe letzter Hand)と呼ばれ、死去しなければ、メルヒェンに他の訂正や増加があったかも知れません。以下の一覧が「大きい版」と「小さい版」との出版史をまとめたものです。

「大きい版」	第 1 巻	第 2 巻	通し番号	「小さい版」
第 1 版	1812 年	1815 年	---	1825 年
第 2 版	1819 年		161	1833 年
第 3 版	1837 年		168	1836 年
第 4 版	1840 年		178	1839 年
第 5 版	1943 年		194	1841 年
第 6 版	1950 年		200	1843 年
第 7 版	1957 年		200	1844 年
第 8 版 (小さい版)				1850 年
第 9 版 (小さい版)				1853 年
第 10 版 (小さい版)				1858 年

特に注目すべき点が二つあります。一つは、「大きい版」の第6版までは版を重ねるごとにメルヒェンの総話数（収録話数）が増えてきたことです。今一つは、「小さい版」の再刊行の速度が第2版から著しく早くなり、「大きい版」より人気があったと考えられます。現在は、「大きい版」は著作権がないため、沢山の出版社に刊行され、「小さい版」の方は、上に述べた文庫本（出版社：Insel Taschenbuch）のみです。

「蒐集した物語から作ったもの」

最後に「改編改作のプロセス」について簡単に説明したいと思います。大野寿子氏によると、「作品生成論的立場」からの研究でよく扱われるのは、ヴィルヘルム・グリムによる「改編改作」、すなわち、上で述べた変更、訂正や増加などの「加筆」なのです。⁵大野氏が指摘したように、特に初版と第2版との間の「改編改作」が顕著ですが、レレケ氏によれば、フランスの研究者トヌラ氏（Tonnelat）が検討した結果として、第3版と第7版との間に649箇所 of 文体の変更があったということです。⁶

「大きい版」の第2版から第6版までの出版物が、ドイツの大学図書館などにあり、詳しく比較研究することが可能です。残念ながら、それらの日本語の翻訳はないものの、初版のみが全訳され、卒論などの貴重な研究資料となっています（第7版は繰り返し訳されました）。⁷

初版から第7版への「加筆」を一例見てみましょう。『初版グリム童話集』の第1巻に含まれている「ヘンゼルとグレーテル」（Hänsel und Gretel）の終わりの部分を取り上げます。グレーテルが「悪い魔女」を「パン焼きかまど」の「奥のほうへ押し込」んで「みじめに焼け死」なせたあとの場面です。まず、初版の翻訳を確認しましょう。

グレーテルはヘンゼルのところへとんでいき、戸を開けてやると、ヘンゼルが跳び出してきました。ふたりはキスをしあい、喜びました。魔女の家には宝石や真珠がたくさんありました。ふたりは宝石や真珠でポケットいっぱいにして外に出ました。それから家へ帰る道を見つけました。とうさんは、またふたりの姿を見て喜びました。子どもたちがいなくなってからというもの、とうさんには一日も楽しい日はありませんでした。これでとうさんは金持ちになりました。けれどもかあさんのほうは死んでいました。⁸

実は、1810年にブレンターノに送った手書き原稿の写本（例の祖稿）の物語は、父親に関する説明もなければ、「それから家へ帰る道を見つけました」という文章もあり

⁵大野寿子『グリムへの扉』勉誠出版2015年、10～12ページに参照。

⁶小澤（訳）、1990年、142ページに参照。

⁷吉原高志・吉原素子（訳）『初版グリム童話集』（全4巻）、白水社、1998年。

⁸吉原・吉原、1998年、51～52ページ。

ません。考えてみれば、ヘンゼルとグレーテルは、もともと迷い子になってしまって不思議なお菓子の家に偶然やってきたのですから、どうして帰り道を最初から知っていたのでしょうか。こうした不合理な部分が、初版の中では上で述べたような文章で訂正されましたが、それで辻褄が合うというわけではなく、未だ不十分でした。

それで、第7版においての終わりを読んでみましょう。ヴィルヘルム・グリムの方法を一番顕著に、一番印象的に示していると思われるので、ちょっと長いですが引用します。

ところで、グレーテルはまっしぐらにヘンゼルのところへかけていき、家畜小屋の戸をあけてさげびました。

「ヘンゼル、わたしたち助かったのよ。魔女のばあさんは、死んじゃった」。すると、ヘンゼルがとびだしてきました。まるで、かごの戸をあけてもらった小鳥のようでした。ふたりが喜んだことといったら、どうでしょう。首にかじりつきあったり、はねまわったり、キスしあったりしました。いまはもうこわいものはなにもないので、ふたりは、魔女の家のなかに入りました。すると、あっちのすみにもこっちのすみにも、^{しんじゅ}真珠や宝石の入った箱がありました。

「これは小石よりましだ」と言って、ヘンゼルはポケットに入るだけつめこみました。すると、グレーテルが、

「わたしも、すこしおみやげに持っていこう」と言って、前掛けにいっぱい入れました。「でも、そろそろ出かけよう」とヘンゼルが言いました。「とにかく、魔女の森から出なくちゃ」。二、三時間歩くと、ふたりは大きな川のところに出了ました。

「ぼくたち、わたれないよ」とヘンゼルが言いました。「小さい橋も大きい橋も、なんにも見あたらないもの」。

「ここには^{わたし}^{ぶね}渡し舟もないしね」とグレーテルが返事をしました。「でも、あそこに白い^かかもが泳いでいるわ。たのんだら、わたしてくれるんじゃない」。そして、グレーテルは大きな声で言いました。

「かもさん、かもさん、
ここにいるのは、グレーテルとヘンゼルよ。
小さい橋も大きい橋も、なんにもないの、
ふたりを、あんたの白い背中に乗せてくれない？」

すると、^かかもがよってきたので、ヘンゼルが乗って、そばに座るように、と妹に言いました。

「だめよ」とグレーテルが答えました。「ふたりいっしょじゃ、かもさんには重すぎるわ。代わりばんこにわたしてもらいましょうよ」。親切な^かかもはそうしてくれました。ふたりが^{しゅび}首尾よく川をわたって、しばらく行くと、森の景色にだんだんなじみが出てきました。

そしてしまいには、遠くのほうにお父さんの家が見えました。ふたりは、かけだしていき、部屋のなかへとびこんで、お父さんの首にかじりつきました。木こりの亭主は、子どもたちを森に置きざりにしてからというもの、楽しいときがひとときもありませんでした。おかみさんのほうは、そうこうするうちに死んでいました。グレーテルが前掛けをふると、真珠や宝石が部屋のあちこちへころがっていきました。するとヘンゼルが、ポケットにつめてきたものを、ひとつかみ、またひとつかみと、ほうりだして、それにつけ足しました。これで、心配ごとはなんにもなくなりました。それからは、みんなそろって、いつも楽しく暮らしました。

わたしの話はこれでおしまい。ほら、あそこをねずみが走ってる。あれをつかまえたら、大きな大きな毛皮のぼうしがつくれるよ。⁹

いかがでしょうか。第7版の終わりはただの「文体の変更」と言えますか。一目瞭然、それだけではありません。最初に目につくのは、初版にない新しい行動や出来事が全面的に増加されたことです。「かも」との遭遇は不思議ですが、おかげで帰り道の謎が解決されました。

次に確認できるのは、人間関係の緊密化された描写でしょう。ヘンゼルとグレーテル、そして子供たちとお父さん。それに加えて、お父さんは、寂しい思いをした善人して描かれた結果、子供を捨てる責任は、完全に「おかみさん」の方に移りました。だからこそ「死んでいました」となるのです

さらに補足されてきたのは、直接話法と間接話法という形での会話文です。これらの変更を合わせてみますと、第7版の物語は生々しく、より文学らしくなっていることが確認できるのではないのでしょうか。



図29 ジョージ・クルクシャンクの絵が載された『子どもと家庭のメルヘン集』英訳版(ロンドン、1823年)の内表紙。(©2015 by Bildarchiv BGG・www.grimms.de)

最後に、一番不思議なのは、「ねずみ」に関する文章でしょう。物語との関係は全く不明ですが、それを導入する「わたしの話はこれでおしまい」という文を見逃してはなりません。この「わたし」は一体何者ですか。もちろん、答えは、語り手ですが、何故、今まで背景に姿が隠れていた語り手を表に引き張り出す必要があったのでしょうか。

関係があるかどうかわかりませんが、先に述べた英語の翻訳を思い出してみますと、本のブックカバーがイギリスのパブ(大衆酒場)らしき雰囲気のある部屋を示しています。真ん中に、語り手が椅子の上に座って大袈裟な身振りをしながら語っており、周りの人々は、大変面白がっています。英訳の本を、疑いもなく知っていたヴィルヘルム・グリムにとって、大幅に「改編」したにも関

⁹ 野村滋(訳)『完訳グリム童話集』ちくま文庫 2005年、222～225ページ。

わらず、読者が読み終わったものは、相変わらず語り伝えられたメルヒェンであることを、思い出させ、保証するというニーズがあったのかもしれませんが。いずれにしても、19世紀のドイツ文学においては、「語り手」が意識され、文学の一つのテーマになってきたのは確かです。

文学の詳細な描写、直接話法、語り手などを研究するのは、ナラトロジー（ドイツ語：Narratologie）ですが、それについては、また違う機会でお話ししたいと思います。

（Robert F. WITTKAMP／ローベルト・F.ヴィットカンプ：文学部教授）

II

ドイツ語の歴史

インドヨーロッパ語族・ゲルマン語派

ドイツ語のルーツはインドヨーロッパ語族(印欧語族)にあります。印欧語を話す人々は黒海沿岸にいたと言われ、その一派が西へ移動し、ヨーロッパに定住しました。彼らは一枚岩ではなく、言語をもって分類すればインド・イラン語派、バルト語派、スラヴ語派、イタリック語派、ケルト語派などに分かれます。その一つにゲルマン語派があります。ゲルマン語を話す人々は現在のドイツ北部からスカンジナビア半島にかけて長く定住し、紀元前1世紀ころ、ローマ帝国の資料によって歴史に登場してきます。ゲルマン語は北、東、西に下位区分されます。北ゲルマン語はいわゆる北欧語です。東ゲルマン語を話す人々は遠方まで活発に移動しながら、皮肉にもみな滅亡しています。ゴート人はゴシック様式、ゴシック体などに名を残しているほか、ゴート語聖書はドイツ語史の研究にとって貴重な資料となっています。Wandalismus(蛮行)に名を残すヴァンダル人は北アフリカに王国を築きましたが、東ローマ帝国に滅ぼされました。ブルグント人がフン族に敗れたことは、のちの叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の題材となりました。そして西ゲルマン語に属するのがドイツ語、英語、オランダ語などです。

印欧語と異なるゲルマン語独自の特徴として第一次子音推移(ゲルマン語子音推移)が挙げられます。グリムの法則とも呼ばれ、紀元前5~2世紀ごろ、印欧語の子音がゲルマン語において規則的に別の子音に変化しました。推移(Verschiebung)とは別の音へ移行するという意味です。ラテン語と英語の例で両者の違いを示します(下線部が該当する子音): pater : father, tres : three, cor : hearth, duo : two それぞれ p→f, t→th, c→h, d→t のように変化していることがわかります。

また文中の機能によって語のアクセントの位置が変わる印欧語に対して、ゲルマン語ではアクセントが語頭(第一音節)に固定されました。これはその後のゲルマン語の運命を決定づけることになります。すなわちアクセントが常に語頭にあるため、アクセントのない語中、語末の母音が弱化、あるいは脱落していきました。ゲルマン語の語彙が総じて短いのはそのためです。次の2つの例がそれを示しています: pellegrino(イタリア語): Pilger(ドイツ語)、colonia(ラテン語): Köln(ドイツ語)

ゲルマン語の動詞にはアブラウトと呼ばれる母音交替に基づく強変化動詞(例: helfen, half, geholfen)と歯音接尾辞で過去時制を作る弱変化動詞(例: suchen, suchte,

gesucht) があります。学校文法で不規則動詞、規則動詞と呼ばれているものです。ゲルマン語の時制は現在形と過去形しかなく、完了形や未来形などはのちに発展したものです。

ゴート語

4世紀の中頃、西ゴート人の司教ウルフィラが伝道のためギリシャ語原典から翻訳したゴート語訳聖書が、現存する最古のゲルマン語の資料です。時制は現在形と過去形しかありません。また数に関して、単数と複数のほかに「2つ」を表わす双数（両数）が動詞と人称代名詞の1・2人称にあります。以下は名詞の語形変化の一例（dags 日）です。4格と呼格は同じですが、それ以外はどの語形も異なる形をしているのがわかります。

単数 1 格 dags	複数 1 格 dagôs
2 格 dagis	2 格 dagê
3 格 daga	3 格 dagam
4 格 dag	4 格 dagans
呼格 dag	

ドイツ語の名詞が時代とともに格の区別を冠詞にまかせ、自らは数の違いを明示する方向へ進んできたのに対し、ゴート語では名詞単独で格も数も区別できる体系となっています。

ドイツ語の時代区分

以上、インドヨーロッパ語族、ゲルマン語派、ゴート語を順に見てきました。ここから狭義のドイツ語史に入っていきます。ドイツ語は以下のように時代区分されます。古高ドイツ語（750～1050）、中高ドイツ語（1050～1350）、初期新高ドイツ語（1350～1650）、新高ドイツ語（1650～）。ドイツは高地ドイツ（中部と南部）と低地ドイツ（北部）に分けられ、一般には高地ドイツ語の歴史をもってドイツ語史とされることが多いため、時代区分には「高」がついています。

古高ドイツ語

古高ドイツ語を特徴づけるものとしてまず第二次子音推移が挙げられます。およそ5～8世紀ごろ、高地ドイツを中心に起こった子音の変化で、高地ドイツ語子音推移とも呼ばれます。これによりゲルマン語の無声閉鎖音 p, t, k が高地ドイツで破擦音 pf, z, kh または摩擦音 ff, ss, ch へと変化しました（発音記号ではなく、便宜的にドイツ語の綴りで示しました）。この変化によって高地ドイツ語が低地ドイツ語を含む他のゲルマン語とたもとを分かつことになりました。子音推移の影響を受けなかった低地ドイツのアングル人とサクソン（＝ザクセン）人がブリテン諸島に渡って英語のもとを築いています。

従って英語とドイツ語の音の違いは子音推移の有無に起因しています。英語とドイツ語で具体例を示すので、比べてみてください。apple : Apfel、to : zu、corn : Khorn (kh の音はアレマン方言にとどまり、標準語には至りませんでした)、help : helfen、better : besser、book : Buch

さらに b, d, g → p, t, k という変化が起こっています。特に d → t の変化は広範に起こり、day : Tag、drink : trinken、dead : tot、deep : tief といった違いが生じました。

同じ第二次子音推移の連鎖反応と考えられるのが Þ (= th) → d の変化です。これは 8~11 世紀に北ドイツを含むドイツ全土で起こり、以下のような違いが生じました。that : dass、thank : danken、think : denken、three : drei、earth : Erde、north : Nord、bathe : baden

以上が第二次子音推移です。他方、古高ドイツ語の母音の特徴を一言で言えば「豊か」です。すなわちアクセントのない音節でも広い母音 a から狭い母音 i までそろっており、こうした母音が弱化、脱落していく中高ドイツ語以降との違いは歴然としています。A.Stedje: Deutsche Sprache gestern und heute (Fink, München 1989) 86 ページに基づき、古高ドイツ語と中高ドイツ語を並べてみます。

Weißenburg の教理問答 (8 世紀末)

Gilaubiu in got fater almahitigon scepphion himiles enti erda. Endi in heilenton Christ...Ther infanganer ist fona heiligemo geiste

Millstatt の詩篇 (12 世紀)

Ich geloube an got vater almechtigen schephæer himels unde der erde. unde an Jesum Christ...
der enphangen wart von dem heiligen geiste

「全能の父にして天と地の創造者、聖霊によって生まれた救世主キリストを私は信じます」

gilaubiu : geloube、enti : unde、erda : erde のように古高ドイツ語では i や a が使われているほか、himiles : himels、fona : von のようにアクセントのない語中や語末の母音が保たれています。このような音の特徴は形態的な特徴にも影響を与えます。現代ドイツ語の弱変化動詞（いわゆる規則動詞）は直説法過去と接続法過去（2 式）の形が同じで区別が付きません（たとえば suchte）。これに対して古高ドイツ語では直説法（suohta）と接続法（suohti）が語尾-ta と-ti によって区別されています。

古高ドイツ語時代、最大の文化的関心事はキリスト教を普及させることでした。今日まで伝わっているテキストの多くは宗教的な内容です。『タツィアーン』（830 頃）はラ

テン語聖書の翻訳、『オトフリートの福音書』（9世紀後半）は自由な創作で、脚韻を確立したことで知られます¹。イエスの生涯を描いた『ヘーリアント』（830頃）は古ザクセン語（低地ドイツ語）で書かれています。他方、異教的な内容のテキストもあります。たとえば『ヒルデブラントの歌』（9世紀初め）はゲルマンの英雄歌謡です。『メルゼブルクの呪文』（10世紀）は戦場で捕虜となった味方の生還を願い、また足をくじいた馬の治癒を祈願する内容です。2つのテキストとも頭韻で書かれています。

中高ドイツ語

前節で挙げた宗教テキストを再び例にとれば、広い a から狭い i まで多様な母音が現れる古高ドイツ語と違って、中高ドイツ語ではアクセントのない母音の多くが弱化し、e となっています。またウムラウト（後ろの狭い母音<多くは i>の影響を受けて、前の母音が狭くなる現象）が浸透したのもこの時期です：almahtigon > almechtigen、hohiro > höher その他中高ドイツ語の母音の特徴は、後述する初期新高ドイツ語との比較で述べます。

子音に関してはまず語末音硬化により、音節末の b, d, g が p, t, k に変化しました。これは当時の表記によって知ることができます：lîp (= Leib), kint (=Kind), kluoc (=klug)

古高ドイツ語の[sk]音は中高ドイツ語になって[ʃ]音になりました：scôni > schœne (=schön) この現象は南から北へ浸透していったため、この影響を受けなかったスウェーデン語と比較するとわかりやすいです：skep (=Schiff)、sko (=Schuh)、skön (=schön)、fisk (=Fisch)、frisk (=frisch)

次に名詞の形態論（語形変化）ですが、本来名詞は語幹末（語尾より前の部分）の音によって a-語幹、i-語幹などと区別されていましたが、母音の弱化によってこうした区別がなくなりました。これによって名詞の形態上の分類は強変化と弱変化（n-語幹）という、現代に連なる 2 種類になりました。母音の弱化によって格表示の機能も弱くなりました。たとえば複数属格（2 格）の特徴であった -o は -e となり、複数属格を示すことができなくなりました（古高ドイツ語 tago > 中高ドイツ語 tage）。

古高ドイツ語の弱変化動詞（いわゆる規則動詞）は語幹末 -ien, ôn, ên によって 3 種類に分かれ、また過去形が語尾 -ta（直説法）と -ti（接続法）によって区別されていましたが、中高ドイツ語ではこれらの区別がなくなり、過去形語尾は -te となりました。

強変化動詞（いわゆる不規則動詞）はゲルマン語以来、中高ドイツ語に至るまで母音交替のタイプによって 7 種類に分類されています。過去形の幹母音が単数と複数で異な

¹ 脚韻とは行末を似た音でそろえる作詩法で、これに対し古くは行の前部に似た音を配置する頭韻が支配的でした。

ることが、現代語と大きく異なります（例：helfen – half – hulfen – geholfen）。現代ではドイツ語も英語も過去時制を習うときに、三基本形として覚えますが、中高ドイツ語までは上の例のように四基本形でした。

さて、僧侶階級が知を独占していた古高ドイツ語期から時代が下り、執筆活動の担い手は世俗化していきました。中高ドイツ語の文学作品は騎士階級（厳密には「家士」と訳されるミニストリアーレたち）によって書かれました。中高ドイツ語文学は宮廷抒情詩、宮廷叙事詩、英雄叙事詩の3つに大きく分類されます。宮廷抒情詩は南フランス発祥のトゥルバドゥール（宮廷詩人）の影響を受けて発展したミンネザングで、貴婦人に対する愛（高きミンネ）を歌ったものが多いのですが、時とともに身分の低い女性への愛（低きミンネ）へと変質していきました。代表的な詩人にヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ（1170 頃–1230）がいます。

宮廷叙事詩の多くはアーサー王伝説をモチーフにした騎士物語で、フランスで書かれた作品を土台にしています。代表的なものとしてハルトマン・フォン・アウエの『イーヴェイン』、『エーレク』、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチファル』、ゴットフリート・フォン・シュトラスブルクの『トリスタン』などがあります。

英雄叙事詩の代表である『ニーベルンゲンの歌』は、ゲルマン民族の移動時代に起きたブルグント王国滅亡という史実を基調としながら、ジークフリート伝説、プリュンヒルト伝説などが織り込まれて 1200 年ごろ成立しました。勇士たちが繰り広げる壮絶な戦いが圧巻です。

文学作品以外では、ドイツ神秘主義のマイスター・エックハルトの著作やアイケ・フォン・レプゴウによるドイツ最初の法律書『ザクセンシュピーゲル』（低地ドイツ語）が、中高ドイツ語時代に書かれました。

初期新高ドイツ語

以前より多くの人が執筆活動を行ない、テキストの種類も多様化する中で、確固とした言語規範がまだなかったこの時代、ドイツ語は実に多様で、現代の私たちから見ると「めちゃくちゃ」と言いたくなる様相を呈しています。そうした時代のドイツ語を統一的な姿で示すことはできません。以下ではこの時期のドイツ語が中高ドイツ語からどのように変化したかを記します。

書記法に関して、まず書体ではドイツ文字（Fraktur）がこの時期に作られ、20 世紀前半まで使われることになります。句読法では 15 世紀ごろまで中黒（・）が多用され、その後ヴィルゲルと呼ばれる斜線（/）が語句や文の区切りに用いられました。ピリオドは部分的に文末に用いられていました。やがてコンマがヴィルゲルに取って代わり、ピリオドとの棲み分けが生じました。名詞の大文字書きは初期新高ドイツ語時代に増加していきました。子音の重ね書きはこの時代の特徴です（auff, hillff, hanndt）。

音変化としてはまず二重母音化が挙げられます。中高ドイツ語の長母音 î, û, iu は二

重母音 ei, au, eu へと変化しました (zît, hûs, liute > Zeit, Haus, Leute)。また中高ドイツ語の二重母音 ie, uo, üe は長母音[i:], [u:], [y:]へと変化しました (liebe<リエベと発音>, guot, güete > Liebe, gut, Güte)。これを単母音化といいます。開音節(母音で終わる音節)の短母音は長母音になりました (wonen, ligen, sagen[ウォネン、リゲン、サゲンと発音します]> wohnen, liegen, sagen)。初期新高ドイツ語時代を経て、h や ie のような長音の表記が定着していきました。舌の位置が下がることによって母音に変化する現象があり、下げまたは低舌母音化と呼ばれます。以下のような例があります。u, ü > o, ö (sun > Sonne, küneec > König)、ei[eɪ] > ei[aɪ] (ein > ein)、ou > au (ouch > auch)、öu > äu/eu (vröude > Freude)

形態論ではまず名詞において格よりも数を明確に表示しようという傾向が見られ、e 型複数形や er 型複数形が増えていきます。一方アクセントのない母音が弱化し続けており、複数形の表示が阻害されるケースも見られます。従ってこの時代、多様な複数形が見られます (man, manne, mannen, männer)。弱変化名詞はこの時代に減少しました。男性弱変化名詞は一部に限定され、女性弱変化名詞は語尾-(e)n が単数形で消失し、複数形に残りました (Frau–Frauen)。女性名詞に-en 型複数形が多いのはこのためです。

動詞に関しては強変化動詞で異なっていた過去単数と過去複数の幹母音が統一されていきます (helfen–half–hulfen–geholffen → helfen–half–halfen–geholfen)。

統語論における変化は時間、理由、目的などを明瞭に表す接続詞の発達、2 格目的語の衰退、梓構造の強化(副文の定動詞後置、助動詞構文における不定詞や過去分詞の後置)など多岐にわたります。たとえば以下の文は完了形ですが、過去分詞が文末に来ておらず、さながら英語のようです：

Ir habt gehöret die Gotteslesterung.

諸君は神に対する冒とくの言葉を聞いた。(16 世紀、M.ルター)

この時期に衰退した用法として tun+不定詞も挙げられます：

das thut mich reüwen

それが私を悔やませる (16 世紀、J.ヴィクラム)

現代ドイツ語で言えば das reut mich となります。一方、英語において do/does+不定詞が疑問文と否定文に残っていることは周知のとおりです。

この時代、執筆活動は多様化し、神学、法律、実用、文学、年代記といったさまざまなジャンルの書物が生まれました。宗教改革期には印刷術の発展と相まってパンフレットと呼ばれる小冊子あるいはビラが出回り、宗派の対立を煽りました。この時期、マルティン・ルターの印刷物は量的に群を抜いていました。文学に目を向ければ、イエルク・

ヴィクラムの作品や、またのちに民衆本というジャンルで括られる一連の散文作品が書かれました（『ティル・オイレンシュピーゲル』、『ファウスト博士の物語』、『美しきマゲローネ』、『ラーレ人物語（＝シルダの人々）』等々）。一方、ハンス・ザックスのようにもっぱら韻文を用いた作家もいます。

17世紀半ば以降はショッテル、グヴァインツ、ベーディカー、ゴットシェート、アーデルング、カンペ、ライプニッツ、ヴォルフ、トマジウスといった多くの文法家や哲学者が標準語としての規範を与え、これをゲーテを初めとする作家たちが実践に移すことで、ドイツ語は洗練され、国語としての地位を高めていきました。

（工藤康弘／くどう・やすひろ：文学部教授）

III

ドイツの現代社会と文化を知るためのキーワード

ホロコーストと過去との対峙

1. テレビドラマ『ホロコースト』

みなさんは「ホロコースト」という言葉を知っていますか。「完全に焼かれた」という意味のギリシャ語を語源とするこの言葉は、ナチスによるユダヤ人に対する虐殺という意味で使われています。同義語としてヘブライ語の「ショアー」という言葉があり、最近はこちらの表現も多く目にするようになりました。ナチス時代には、600万人のユダヤ人が虐殺されました。実は、ユダヤ人のみならず、同性愛者、精神疾患のある人たち、共産主義者やシンティ・ロマの人たち、ナチスに抵抗した人たち、ナチスをネタにしたジョークを話した人たち…つまりナチスが有害であると判断した人たちもまた犠牲となったのですが、ユダヤ人に対しては、この世界から一人残らず消してしまおうという組織的絶滅政策が実行されたのでした。

ホロコーストという言葉がドイツをはじめ、世界で一般的に知られるようになったのは、1970年代に放映され、爆発的なヒットとなったテレビドラマ『ホロコースト』（メリル・ストリープ主演、マーヴィン・チョムスキー監督、1978年、アメリカABCテレビ制作）がきっかけでした。ストリープ扮するドイツ人の娘とユダヤ人医師一家の息子との結婚式を祝うシーンから始まるこのドラマは、フィクションでありながら、帝国水晶の夜（帝国ポグロムの夜）やポーランド移送など歴史的事実を軸に、過酷な運命に翻弄される家族を描いたメロドラマで、世界中の視聴者は、冷酷で残忍なナチスによるひどい仕打ちを受けながらも、ひたむきに家族の絆を信じ、生き抜こうとする若きストリープの迫真の演技に、毎夜、号泣したのでした。このドラマは、日本でも放送され、大きな反響を呼びましたが、ドイツでは、『ホロコースト—ヴァイス一家の物語』というタイトルで4日連続で放送され、最終回は40パーセントという未曾有の視聴率を記録する社会現象となりました。世界の他の国の視聴者と同様、あるいはそれ以上に、このドラマを観たドイツ人たちの感情が激しく揺さぶられたのは想像に難くありません。

商業的に制作されたいわゆる「お涙頂戴」もののこのドラマに対しては、ドイツ国内においても当然ながら賛否両論が沸き起こったのですが、実はこのドラマは、社会文化的に極めて重要な意味があるとされているのです。それは、このドラマによって、ホ

ロコーストという出来事が、大変な苦痛や屈辱、悲しみをともなった、悲惨で残虐な出来事であるという被害者のユダヤ人側からの視点が生まれたということです。それはドイツの大衆の中に生まれたまったく新しい視点でした。それまで、ナチス時代の抵抗運動を扱ったテレビドラマはありましたが、犠牲者の視点でホロコーストを扱ったドラマは制作されなかったからです。

2. ホロコーストを娯楽映画の題材にすることは許されるのか。

ホロコーストを扱った映画としては、フランスのクロード・ランズマン監督のドキュメンタリー（一部演出あり）『ショアー』（1985年）、スティーブン・スピルバーグ監督の『シンドラーのリスト』（1993年）、ロベルト・ベニーニ監督の『ライフ・イズ・ビューティフル』（1997年）などがありますが、ドイツでは、2000年以降、それまでタブーとされていたナチスやヒトラーを正面から扱った作品が制作されるようになりました。話題になった作品をあげると、ベルント・アイヒンガー監督の『ヒトラー最期の12日間』（2004年）ティムール・ヴェルメシュの小説を映画化したダヴィット・ヴェント監督の『帰ってきたヒトラー』（2015年）、ゼーンケ・ヴォルトマン監督の『お名前はアドルフ』（2018年）などがあります。ヒトラーが2015年のドイツに蘇って、テレビのお笑い芸人となりブレイクし、難民問題に揺れるドイツで徐々に影響力を増していくという設定の『帰ってきたヒトラー』は、巧みできわどい風刺の笑いがそこそこに散りばめられ、ドイツのみならず全世界で大ヒットとなりました。

ホロコーストを扱った作品と、ヒトラーやナチスを扱ったコメディ作品、あるいは人間ヒトラーを描いた作品、これらすべてに関して、倫理的な議論や批判が存在し続けます。それは、泣くにせよ、笑うにせよ、アウシュヴィッツに象徴される、歴史に類を見ない人道に対する犯罪、その犠牲となった人たち、あるいはその罪を犯した者たちをネタにして娯楽作品を作ってよいのか、という批判です。一方で、戦後70年以上経過し、ホロコーストの生存者がどんどん少なくなっている現在、それを知らない世代に伝える意味においても、ホロコーストやナチスを題材にした映画を作り、メッセージを発信していくことは重要であり、意味がある、とする意見もあります。

みなさんは、どう考えますか。

3. 「過去に目を閉ざすものは、現在にも盲目になる。」

1960年代の終わりから、ナチスの罪との対峙は、ドイツ社会のアイデンティティを形成する理念の重要な柱の一つとなっています。そしてそれは、政治、文化、教育、メディアの分野で常に確認され、メッセージとして発せられてきました。68年世代といわれる学生運動の若者たちは、他の西側世界の若者たちと同じく、既存の権力体制に抵抗しましたが、ドイツでは、彼らは、親の世代のナチスの罪を問いただした世代でもあったのです。1970年12月には、ワルシャワ条約締結のために、ポーランドの首都を訪

れた西ドイツのヴィリー・ブランツ首相が、ワルシャワゲットー蜂起記念碑の前で地面に跪いて謝罪の意を示した映像が、取材に来ていたカメラマンたちによって、世界中に流れました。当時の西ドイツ首相のこの行為に対して、本国で世論は賛否両論、真二つに分かれました。

しかし、党派を超えて、ナチスの罪に関しての政府の姿勢は一貫しています。1985 年、終戦 40 周年の記念演説で、当時のドイツ連邦共和国（西ドイツ）のヴァイツゼッカー大統領は、偏見と敵意と憎悪に満ちたナチズムの暴力支配、人間の存在に対するとどまることを知らない冒涇、人々が被った悲惨な運命を心に刻むことの重要性を訴え、ドイツ人全員が過去に対する責任を負っていると主張しました。（「荒れ野の 40 年」と題されたこの演説は、歴史上もっとも優れた演説の一つとされています。）「過去に目を閉ざすものは、結局のところ現在にも盲目となる。」という彼の言葉は、ドイツ人のみならず私たち人類全体への警告でもあるでしょう。

（佐藤裕子/さとう・ひろこ：文学部教授）



ドラマ『ホロコースト』のシーンを掲載したシュピーゲル誌の表紙
1979 年 1 月 29 日発刊

IV

ドイツの食文化：伝統と流動性

私はドイツ人なのに、1994 年に来日した時までは肉料理を食べなかったのです。当時、東京のある大学やドイツ文化センターでドイツ語を教えており、時々ドイツ人の食文化についてお話ししたことがありました。その際に、お肉やソーセージを原則として食べないドイツ人は珍しくないという説明は、時々大きな驚きを起こしてしまったのを今でもよく覚えています。同様に、ドイツでは朝からビールを飲む人がいるに違いますが、しかし、普通ではないでしょう。そういうイメージはいわゆるステレオタイプですが、ステレオタイプ自体は消して悪いものだけではありません。なぜかと言いますと、ステレオタイプは「自」から見た「他」を理解させる重要な一歩です。しかし、あの国の状況をもう少し詳しく理解し、または、あの国の言葉を身につけてみればみるほど、ステレオタイプが崩れ、解散するようになるでしょう。

現在のドイツ食文化についてお話しする時は、いろいろ難点があります。一つは、例えば、イタリアならピザやパスターの名料理があれば、日本ならお寿司や刺身もあります。ドイツはパン、ソーセージやビールも有名ですが、ドイツの専門家である高橋憲氏が解かれましたように、ドイツの料理は「美食家（Gastronom）には魅力のない国のように思われがちです」。¹

もう一つは、最近の食文化が大幅的に変わってきたのも実情です。1960 年代に入って、(旧) 西ドイツの経済が猛烈に成長し、人手が足りないようになりました。当時のドイツ連邦共和国（Bundesrepublik Deutschland, BRD）がポルトガル、スペイン、イタリア、旧ユーゴスラビア、ギリシャやトルコの南の国々と条約を結んで、最初に「ガスト・アルバイター」（Gastarbeiter、英：「guest worker」）と呼ばれた人々が大勢に西ドイツで仕事するようになりまいた。しかし、さすがの西ドイツ経済成長も様々な危機を経て、失業者も増加してきたにも関わらず、故郷に帰らなかった人々も多く残り、現在は、「移民背景」があると言われていても、ドイツ人となりました。

もちろん、皆さんが自分の文化も持ってきており、いわゆる『文明の衝突』（Samuel P. Huntington: The Clash of Civilization, 1996）がないとはい言い難いですが、食文化に

¹ 高橋憲『ドイツの街角から』（最新版）、郁文堂、2017 年、68 ページ。

限られて言えば、様々な文化が合流して細密化し豊になりました。高級レストランからファースト・フードまで、ドイツの街角の景色が大幅に変わってきました。

それに加えて、「EU」という現実もあります。と言いますと、EUに属する国々は、ますます近似する現象です。ドイツのどんなスーパーでもフランスのチーズ、スペインのソーセージ、イタリアのピザやベルギーのビールが販売され、例えば、ベルギーの人々がポーランドのお肉を食べ、ポーランドの人々がベルギーのミルクを飲むようになりました（運搬はドイツの高速道路経由です）。

グローバル化が進むにつれて、伝統がなくなるのは今の世界ではどこでも体験され得る現象です。しかし、街角を歩き田舎を旅してみれば、元々の食文化に遭遇するのは、私もドイツに帰るごとに確認できます。以下に、ドイツの伝統的な料理の固定性とファースト・フードの流動性について簡単に説明したいと思います。いわば、食文化の「不易流行」です。

ドイツ料理の伝統

ドイツはソーセージやパンを除いて、世界中に知られている名物がないと上述しましたが、もう少し詳しく見てみますと、まず確認すべきなのは、南北東西においては「ドイツ」という同質だけが支配するわけではないのです。例えば、冗談として、東から流れてくる、ライン川に合流するマイン（Main）川が、昔の西ドイツの南北の「国境」と見做され、「Weißwurstgrenze」つまり「白いソーセージの国境」と言われました。逆に、その「国境」の北に住んでいる人々が南に住んでいる人々に「Fischkopf」つまり「魚頭」と名付けられました。なぜかと言いますと、昔は南の人々にとっては、海は遠くて海の幸を味わう機械が減多になかったのです。逆に、「Weißwurst」は今でも南ドイツの名物です。ちなみに、今のドイツでは魚を食べることが全国隅々のどこでもできながら、「Weißwurst」の方は、南ドイツ意外で味わうのは難しいと思います。

しかし、その伝統的な地方の名物は、やはり、探せば探すほど、発見できます。二つの簡単な例を挙げてみましょう。すなわち北海の港町であるハンブルク（Hamburg）の「Aalsuppe」（鰻スープ）とケルン（Köln）の「Himmel un Ääd」が挙げられます。鰻のスープは、名称から判断して料理が自明だと思われそうですが、実は肉や果物も入っているそうです。ケルンの伝統的な料理の方は、名称も説明が必要でしょう。「Himmel un Ä(ä)d」とはケルン弁（Kölsch）であり、標準語なら「Himmel und Erde」、つまり「天と地」です。ドイツにおいて、ポテト（ジャガイモ）、すなわち「地」と林檎、すなわち「天」とはどこでも栽培されています。ポテトの由来は南米だそうですが、もう以前からドイツの典型的な野菜であるようになりました（南米の由来を知っているドイツ人は少ないかも知れません）。昔は、ケルン地方の人々にとって貧窮のため選択肢がなければ、ポテトと林檎を各々湯がいて潰して、素朴な料理を作りました。

つまり、もともと貧乏の人々の料理が、今では、ケルンの有名な「Brauhaus」（レス

トラン付きのビール工場）で召し上がることができます。もちろん、ただのマッシュ・ポテト（Kartoffelbrei）とマッシュ・林檎（Apfelmus）ではなく、以下の写真が示すようにソーセージや焼いた玉ねぎの輪が加えられています。ソーセージは、いわゆる「Blutwurst」、すなわち血のソーセージであり、一番純粹のソーセージであると言われ評判が高いのです（私は食べたことはありませんが、試練...）。



ドイツを旅する機会があれば、あっちこちの料理を発見する時に、ケルンの「Brauhaus」は特別な体験だと思い、是非とも「Himmel un Ä(ä)d」を試食してください。それは、ご飯を食べる目的だけではなく、ケルンの特別な文化を体験する機会なのです。

もちろん、ミュンヘン（München）にも「Brauhaus」も沢山あり、「Weißwurst」と南ドイツのビールを楽しむことも忘れえぬ体験になるに違いありません。ベルリン（Berlin）の特有なレストランや小さな町の伝統的なレストランでもそういう発見は今でもできるはずです。

ファースト・フードの流動性

『Deutsch leicht (A1.1)』（『ドイツ語・簡単で』）という初心者向けのドイツ語教科書の第1巻に、ファースト・フードをテーマとする一節が入っています。2ページをわたる大きな写真が示すのは、ピザの一切れ、ハンバーガー、お寿司の一人前、サラダの使い捨てプラスチックのお皿、「カレー・ソーセージ」（Currywurst）、「焼き・ソーセージ」（Bratwurst）、ケバブ・パン（Döner Kebab）、フライド・ポテトと鶏のフライ・腿（Hähnchenschenkel）です。もともと「ファースト・フード」という表現は伝統的ではなく消費社会の現象でしょうが、そういう意味のドイツの伝統的なファースト・フードは、フライド・ポテト（Pommes frites、「ポム・フリット」、フランス語）、カレー・焼き・ソーセージと焼き鶏（Hähnchen）のみでした。ちなみに、フライド・ポテトを発明したのは、ベルギーだという世論があり、ある時代に、ドイツでそれについての様々な冗談が流布していました。

経済成長の（旧西）ドイツに始まった、どこでもあった小さな、立ち食いの素朴なレ

ストランは「Imbiss (インビッス)、スナック」や俗語で「Frittenbude (フリッテンブーデ)」などと呼ばれてきましたが、最近では、ドイツの街角から著しく減ってきたのです。代わりに増えてきましたのは、McDonald は言うまでもありませんが、ギリシャのインビッス (スナック) や特にトルコのインビッス (レストラン) です。トルコのインビッスは、店内での召し上がりも可能ですが、「Döner Kebab」などは、やはり、持ち帰りで、道路を歩きながら食べる人が多いです。トルコのスナックは美味しく、値段も安く、すごく人気があります。



現在のドイツの街角は以上の現実ですが、もちろん、ドイツの伝統的なファースト・フードも、未だ食べる機会が十分にあります。上の、「Currywurst mit Pommes」「フライド・ポテト付きのカレー・ソーセージ」を示す写真は、「Ruhr-Tourismus」(ルール川地域観光) のホームページから挿入したものです (https://www.ruhr-tourismus.de/de/themen/genuss.html)、ホームページを探索してみてください (「Die Currywurst」というインビッスを紹介するビデオもあります)。

ルール川地域は、1980 年代くらいまで、石炭と重化学工業として有名だったものの、工業が減びて、現在は、緑、つまり自然が帰ってきたようになり、スポーツ・文化活動やテーマパークなどを提供する街が多くなりました。上記のホームページによれば、ルール地域において、「Pommes」(フライド・ポテト) はファースト・フードではなく、「kulinarisches Kulturgut」(食べ物の文化財) なのです。もちろん、それはルール地域の特有なヒューモアが生んだ説明です。

ちなみに、新型コロナウイルスが世界を覆うてきた前に、関西大学の学生さんがドイツを観光した時に、街角のインビッスを歩き、「焼き・ソーセージ探検」をやってきました。帰国した後の「食文化」の授業中、びっくりさせるほどソーセージの沢山の種類の写真を見せてくれ面白かったのです。

以上、簡単にドイツ食文化の伝統的な料理と最近のファースト・フード文化を紹介しました。「ドイツのワイン」へ進む前に、研究について一言を説明したいと思います。すなわち、食文化をテーマとする卒論です。私が関西大学に採用されてから、ドイツ食文化について卒論が決して珍しくないのです。様々なテーマの中に、ドイツの有名なクリスマス・マーケットの歴史と現状やドイツ家庭のお菓子から若者とビール消費減少や

19 世紀のある短編小説における食べ物と聖書との関係までいろいろありました。それらの卒論は、ドイツ人の本物でありながら私にとってもご参考になりました。

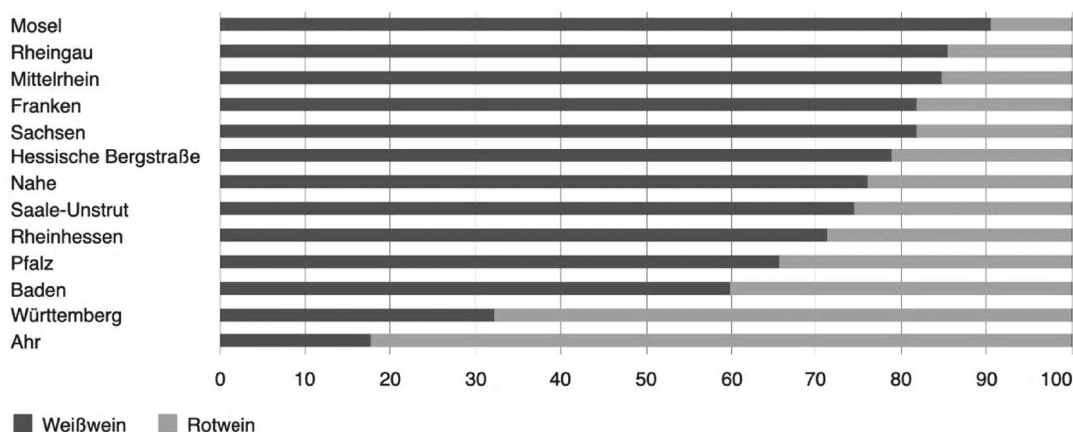
ドイツのワイン

ドイツはビールだけでなく、ワインの国としても名があります。ドイツの白ワインは世界で最も品質が高いと言われていますが、赤ワインも生産される地域があります。赤ワインは強い日光が必要で、ヨーロッパの有名な赤ワインは、フランスやそれより南の国々の生産物ですが、意外に、ドイツの赤ワインも品質が高いものもです。もともと、私はワインの専門家ではありませんが、大学の修士号を取得した際に、両親にドイツの高級赤ワインの一本を祝いプレゼントとしていただきました。蝋燭に火をつけ、ゆっくりと味わって、すごく美味しかった記憶が残っています。

以下の図が白ワインと赤ワインとの栽培面積を示します（数字は面積の％です）：

Bestockte Rebflächen (Keltertrauben) 2019

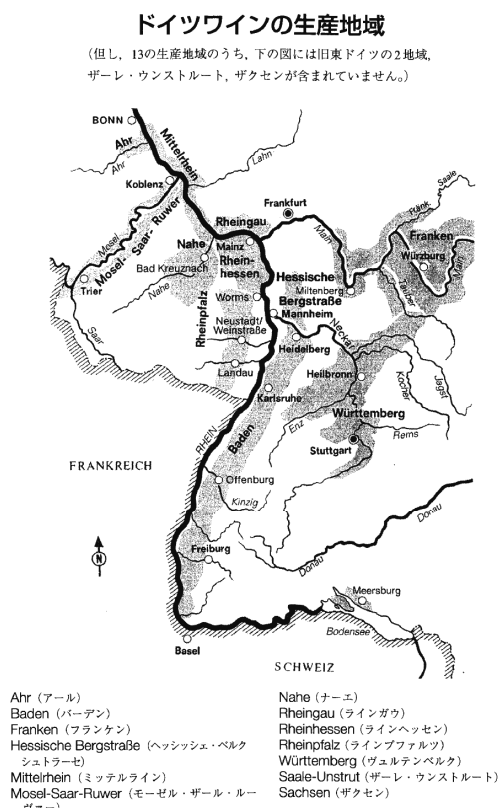
im jeweiligen Anbaugebiet in %



© Statistisches Bundesamt (Destatis), 2020

ドイツ連邦共和国の統計局（Statistisches Bundesamt, Destatis）によれば、ドイツのワイン栽培面積は合計 102900ha（ha＝ヘクター、1ha＝10000 平方メートル）です。その内訳は、68400ha は白ワイン栽培、34500ha は赤ワイン栽培であり、つまり割合は 3 分の 1 くらいです（https://www.destatis.de/DE/Themen/Branchen-Unternehmen/Landwirtschaft-Forstwirtschaft-Fischerei/Wein/_inhalt.html に参照）。上記の図は、13 栽培地域の赤ワインと白ワインの栽培割合を示す。明るい灰色（原文は赤い）は赤ワイン、暗い灰色は白ワインです。つまり、白ワインの一番多いは、モーゼル川（Mosel）、赤ワインの一番多いはアー川（Ahr）です。上記した「Destatis」（統計局）のホームページにおいて、統計や他の資料が沢山掲載されています。

以下の地図はドイツの南・南西部を表します²。すぐに分かってくるのは、ワインの産生地方と河川の関係です。つまり、一番有名なワインの出産地であるライン河(Rhein)沿岸の斜面の他に主に三つの河川・河川網があります。すなわち、マイン・タウバー河川網(Main-Tauber)、ネッカー河川網(Neckar)とモーゼル河(Mosel)です。小さなワイン生産地方としては、ナヘ河(Nahe)地域や特に評判が高いのアー河(Ahr)地域が挙げられます。



ドイツの伝統的なワイン栽培が南・南西地方に限られている理由は、ドイツは寒冷な気候に支配されているからです。地球温暖化の未来はどうか分かりませんが、すでに、より寒冷なスウェーデンにもワインの栽培が行われているのです。もちろん、スウェーデンの南部に限られていますが、インターネット検索で、例えば2006年は5000リットルのワインが生産されたという結果が出てきました。つまり、世界のワイン生産地域の中では、ドイツはすでに一番北に位置する生産地域ではありません。それに対して、ドイツの北の方でも葡萄が栽培されるようになる情報が未だないみたいですが、ヨーロッパの南の国々の葡萄栽培地域の地理を考えて見ますと、河沿岸の斜面が少ないドイツの北でもワイン生産がいつか始まるのは考えられるのではありませんか。元のテーマに戻りましょう。

² 高橋憲、2017年、75ページ。

面白いところは、ワインの生産地域がビンの形やその色でわかるということです。すなわち、茶色のビンライン河沿岸の出産物、緑色のビンはモーゼル川のワインです。「Bocksbeutel」(ボックスボイテル)と呼ばれる、平たい袋状のビンは、ポルトガルにもありますが、ドイツでは、「Frankenwein」(フランケン・ワイン)、つまり「Würzburg」(ブールツブルク市)を中心とするマイン・タウバーガー河川網のワインに限られています。この特別なビンに入っているワインは、質が高いものです。

また、ワインビンのラベルは、高橋憲氏が指摘ように、「人間でいえば自己紹介のようなもので、コツさえつかめば誰でも読みとれるものです。」³

ワインは、飲み物だけではなく、長い伝統のある文化現象です。それを毎年が一番はっきりと示すのは「ワイン祭り」(Weinfest、ワインフェスト)、すなわち、ワイン収穫の行事です。ワイン祭りの歴史は、少なくとも15世紀の始まりまで遡れます。世界一番大きなワイン祭りと言われる「Dürkheimer Wurstmarkt」(デュルクハイマー・ソーセージ市場)は、1417年に始まり、2012年は、68万5千人の訪問者がいました。

ちなみに、デュルクハイム市(Bad Dürkheim)はいわゆる「Deutsche Weinstraße」(ドイツのワイン街道)の町です。この85キロの長さのある街道は、ドイツの2番大



きなワイン栽培地域のファルツ(Pfalz)を縦断します。

このドイツのワイン街道が開かれたのは1935年ですが、1953年からは、フランスの地域につながっている「Route des vins d'Alsace」(ルート・デ・ワン・アルザス、ドイツ語: Elsässer Weinstraße)というワイン街道もあります。ドイツ文化とフランス文化が融解する地域です。

あと一例を挙げてみれば、モーゼル川のワイン祭りも大勢の人々が参加する大きな行事なのです。しかし、新型コロナウイルスがその伝統的な祭りをも大幅に脅かしています。今年(2020年)は、「Bernkastel-Kues」(ベアンカーステル・クース)という町の伝統的な祭りの代わりに、合計17の小さなワイン祭りがあっちこちの町に行われています。三密対策や人数制限などがあっても、負けずに伝統を生き残されるという強い意志が感じ

られます。ご興味あれば、次のホームページをご覧ください：

<https://www.swr.de/swraktuell/rheinland-pfalz/trier/weinfeste-an-der-mittelmosel-2020-uebersicht-geschichte-100.html>。

ホームページにワインフェストの雰囲気を理解させる写真が沢山掲載されています。

³ 高橋憲、2017年、73ページ。

「Weinfest」でインターネット検索すると、上述のホームページと一緒に他のホームページも出るはずです。

以下の写真は、ワイン祭りの雰囲気を感じさせるとはいますが、もちろん、今年の行事でわないのです（出典は上述したホームページ）。



ドイツのワイン祭りにご興味があれば、様々なホームページがあるため、研究も楽に行えます。例えば、「ドイツのワイン行事」(<https://www.weinfeste-in-deutschland.de>)というホームページに、ドイツ連邦共和国の16州のワイン祭りのデータが列挙されています。ドイツ語のwikipedia (<https://de.wikipedia.org/wiki>) も詳しいですが、ドイツ語に自信がなければ、英語の方はいかがでしょうか (<https://germanfoods.org/german-food-facts/weinfest/>)。

(Robert F. WITTKAMP／ローベルト・F.ヴィットカンフ：文学部教授)

付録1：フランス留学のすすめ

フランス語やフランス文化をよりよく理解するためには、授業や本を読むことも大切ですが、やはり直接現地に行くことで学べることは多く、また書物で学んだことをほんとうに理解するためにも必要なことです。気ままに自由旅行でフランスをたずねるのも一案ですが、関西大学では、いくつかのタイプのフランス留学を提案しています。英語圏への留学も意義深いものにはちがいませんが、みなさんの世代で、それ以外の異文化にふれることはとても貴重な体験になりますので、ぜひ検討してみてください。くわしい情報は、いずれも国際部で取得することができます。

<http://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/world/>

1. フランス語セミナー（4週間）

フランス語の語学力アップと、フランスでの実生活を学ぶための、4週間の研修旅行を主催しています。定員は20人で、選考試験はありません。例年は、フランス西部のロワール地方の中心都市のひとつであるアンジェという町で、現地の家庭にホームステイしながら、アンジェ西カトリック大学附属の国際フランス語センター（CIDEF）でフ



ランス語を集中的に学ぶ（週20～24時間の授業）コースです。授業のほかにも、毎週末にはバスにのって名所をまわったり、研修期間の前後には、パリを見学する予定も組まれており、毎年参加者には大好評です。実施時期は例年2月で、このセミナーへの参加は、卒業単位としてカウントされます。CIDEFのスタッフも

とても親切ですから、安心して留学生活をたのしむことができます。何らかの既習歴があれば（大学でフランス語を選択しているだけでもよい）1年生から参加できます。3年生の春は就職活動などもあることを考えると、2年生までの参加をおすすめします。

2. 交換派遣留学（1～2学期間）

関西大学は、パリ第3大学、パリ大学、パリ郊外のパリ・エスト・クレティユ大学、そして1.で紹介したアンジェの西カトリック大学という4つのフランスの大学と交流協定を結んでおり、毎年選考試験に合格した各校数名を派遣留学生として交換しています。こちらは語学留学ではなく、大学でフランス人と一緒に授業をうけながら、パリやアンジェでの生活をたのしむものです。ホームステイではありませんが、宿舎は原則として大学があっせんしてくれます（有料）。期間は9月から翌年7月までの1学期間もしくは

は2学期間（1年間）で、留学中も修学期間に含まれますので、4年間で卒業することも可能です。また、原則として関西大学から一定の奨学金が支給されます。1年間、フランス語だけの生活（パリ・エスト・クレティユ大学では英語での修学も可能）になるので、それなりの準備と覚悟が必要ですが、関西大学を代表して派遣留学生として学ぶことの意義は大きく、もちろん履歴書にも記載することができます。こちら、専修・学年を問わず参加申込ができますが、語学留学ではないので、選考試験までに、おおよそ仏検2級程度の語学力（パリ・エスト・クレティユ大学に英語留学するばあいは所定の英語能力の証明）が必要です。意欲のある人は、ぜひこれをめざしてフランス語の勉強にはげてください。また、留学先で取得した単位も、卒業単位としてカウントされます。大学生の時期に1年間、英語も通じにくい外国都市で学び、生活することは、学問的な意味にくわえて、みなさんの人生そのものにとって、大きな体験になることはまちがいないでしょう。



3. 認定留学（1~2学期間）

これらのほか、関西大学には「認定留学」という制度もあります。これは、留学の準備をみなさん自身が行い、フランスなどの大学で勉強してきたことに対して、所定の手続きにしたがって単位が認定されるもので、期間は1学期もしくは2学期間（1年間）です。こちら、留学を修学期間に含めることができますので、留学のために卒業が遅れることはありません。また、交換派遣とは違って、大学の学部ではなく、併設の語学学校で語学習得を主目的とする留学も認められています。1年間の交換派遣留学は敷居が高いが、4週間のセミナーではものたりない、もっとしっかりと腰をすえてフランス語を習得したい、という人には、この認定留学がおすすめです。学校の選びかたなどについては、まずは国際部か仏文のスタッフに相談してください。手続きは自分ですが、多くの学校では、ウェブサイトを通じて英語でもできるようになっていますし、2015年度より、前記西カトリック大学国際フランス語センター（CIDEF）が中期語学留学の推奨校に指定され、提携機関を通じて簡単に手続きができるようになりました。それ以外にも、こうした留学をサポートしてくれる業者はたくさんあります。

4. その他

大学が提案する枠にこだわらず、もっと自由に留学したいという場合は、みなさんの要望に応じたさまざまなものが語学学校・旅行会社などでも用意されていますし、フランスには、ワーキング・ホリデーの制度も存在します。これらの場合はどうしても大学を休学しなければなりませんが、貴重な体験のためにはそれもひとつの方法かもしれません。わからないことがあれば、気軽にわれわれにご相談ください。

付録2：ドイツ語圏への留学

フランス語圏の大学と同じく、関西大学はドイツ語圏の大学とも学術・学生交流の長い歴史があります。現地で生活しながら文化と言語を学び、さまざまな文化や宗教のバックグラウンドを持った人が暮らすドイツの「今」に身を置きながら、語学や専門知識を身につけたい…そんな希望を持ったみなさんにはぜひ留学をお勧めします。留学には、交換派遣留学、認定留学、語学セミナー等さまざまな形の留学があり、現在まで数多くの関大生が留学し、その体験をキャリアにつなげてきました。交換派遣留学は、関西大学が協定を結んでいる大学に留学して語学や専門教育の授業を履修し、条件が合えば、そちらの授業で取得した単位を関西大学の卒業所要単位に換算できる制度です。したがって、1年間留学した場合でも4年間で卒業できることになります。また、交換派遣留学では、派遣学生全員に関西大学から奨学金が給付されるという経済的サポートもあります。語学セミナーは、夏休みを利用して協定校でもあるゲッティンゲン大学の学生寮に宿泊しながら、大学の語学コースでドイツ語を学ぶというものです。午前中が語学の授業、午後は友だちと自由に街を散策したり、スポーツをしたり、「お国紹介」など大学が提供するさまざまなイベントに参加することができます。認定留学では、協定校以外の大学の語学コースなどで語学を学ぶことができます。こちらも条件を満たせば、現地の大学で取得した単位を卒業所要単位に換算することができますが、留学先の選定や住居探し、留学の諸手続きは自分で行うこととなります。

ヨーロッパは文化の宝石箱です。ドイツを足掛かりに、さまざまな魅力を持ったヨーロッパの文化と歴史、そこに生きる人びとを知る旅に出てみませんか。異文化との出会いには自分たちの文化を知ることにつながると気づくはずです。関西大学が学生交換協定を結ぶ数多くの大学から、特に、今まで多くの学生が派遣され学んできた大学、ドイツ語コースが開講されている大学をリストアップしておきます。

詳しくは、関西大学国際部ホームページ、「海外で学ぶ」を参照してください。

<https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/world/>

〈ドイツ語圏の交換派遣留学協定校〉（一部）

エアランゲン・ニュルンベルク大学

ギーセン大学

ゲッティンゲン大学

ケルン大学

コンスタンツ大学

チューリッヒ大学

ヴィアドリナ欧州大学

付録3：履修の手引き

これからみなさんが時間割を組む際、「大学要覧」（青の冊子）やWEB「シラバス」（講義要項）を読んでも、よく分からないことがあるかもしれません。そこで以下に、ヨーロッパ文化専修に進むことを考えている人のための、簡単な履修上のポイントと、2年次以降の履修モデルを記しておきます。また、ヨーロッパ文化専修の科目の基本的な性格も示しますので、今後の履修の参考としてください。

2021年度に新設されたヨーロッパ文化専修は、ドイツ・フランスを中心とするヨーロッパの豊かな文化が学べる専修であり、ドイツ言語文化コースとフランス言語文化コースを設けています。「コース」とは、専修の中で、カリキュラムが分かれることで、ヨーロッパ文化専修に分属するとき、同時にどちらかのコースを選択することになります。

履修上のポイント

関大文学部の科目には、大きく3つの種類があります。共通教養科目、外国語科目、専門教育科目です（なおここでは、専門教育科目のうち資格関連科目には触れていません。「大学要覧」を参照してください）。

共通教養科目

共通教養科目は、5つの分野にわかれています。自己形成科目群、基盤科目群、実践科目群、大学・学部連携科目群、関西大学科目群、です。これらの分野のうちから、1-2年次のうちに20単位以上を修得してください。また、自己形成科目群の各領域（人間を知る、社会を知る、自然と向き合う、世界と向き合う）から、それぞれ2単位以上取ることも忘れないようにしましょう。

外国語科目

外国語科目は2つの言語を選択しますが、そのうち英語を必ず含めねばなりません。2つ目は何語を選択してもかまいませんが、すでにヨーロッパ文化専修志望を決めている人には、フランス言語文化コースにするのか、ドイツ言語文化コースにするのかによって、フランス語もしくはドイツ語の履修をお勧めします。そうすれば、ヨーロッパ文化専修に入る前にすでに入ったあとの準備をしていることになるからです。もちろん、その他の外国語を履修していてもヨーロッパ文化専修に入ることができますし、その場合、に入ったあとで初歩からフランス語・ドイツ語をしっかりと学ぶための科目も設置し

ています。

例えばフランス語を履修した場合、1 年次で、「英語 I ab」、「英語 II ab」、「フランス語 I ab」、「フランス語 II ab」の 8 単位、2 年次には「英語 III ab」、「英語 IV ab」、「フランス語 III ab」、「フランス語 IV ab」の 8 単位になります。これらを修得すれば、卒業に必要な 16 単位は満たしますが、フランス語の力を伸ばしたい人は、3 年次に「フランス語 V ab」、「フランス語 VI ab」も履修することをお勧めします（ドイツ語履修の場合も事情は全く同様です）。

専門教育科目

なるべく 1 年次の段階で、以下の卒業所要単位は修得してしまいましょう。

- ・「学びの扉（各専修）」を 2 科目 4 単位（異なる専修から 2 科目履修する）
- ・「知へのパスポート（各専修）」か「知のナビゲーター」を 2 科目 2 単位（異なる専修の「知へのパスポート」2 科目でも、同一専修の「知へのパスポート」2 科目でも、「知へのパスポート」1 科目＋「知のナビゲーター」1 科目でもよい）

ヨーロッパ文化専修が提供している 1 年次配当の主な専門教育科目は、以下の通りです。

学びの扉（ヨーロッパ文化）〔コース共通〕

知へのパスポート I ab（ヨーロッパ文化）〔コース共通〕

知へのパスポート II ab（ヨーロッパ文化）〔コース共通〕

外国語演習 I ab（フランス語・ドイツ語）

外国語演習 II ab（フランス語・ドイツ語）

フランス文化論 ab

ドイツ文化論 ab

ヨーロッパの言語と文化（一）

ヨーロッパ文学入門

2 年次以降の履修モデル

2 年次以降に履修する専門科目は、①専修固有科目（専修ゼミ、専修研究）、②専修関連科目、③総合人文学科目、④文学部外国語科目の、4 つのグループによって構成されています。これらの位置づけをここでくわしく述べることはできませんが（「大学要覧」を参照）、①は各専修・コースの必修科目、②は専修・コースでの学習に深く関わる選択科目、そして③は、複数の専修や学部全体に関わる科目、④は第 2 外国語科目とは別に、文学部で独自に提供する外国語科目です。つまり、ヨーロッパ文化専修に入ることを選べば、毎週 1 コマの「ヨーロッパ文化専修ゼミ」（I~VI）を 2 年次から 4 年次の 3

年間（6 学期）、同じく毎週 1 コマの「ヨーロッパ文化専修研究」（I~IV）を 2 年次から 3 年次の 2 年間（4 学期）必修科目として履修しますが、これら専修固有科目については、選択したコースのものを履修しなければなりません。あとは、それぞれの興味にしたがって、ヨーロッパ文化専修が提供する専修関連科目や、総合人文科目を履修すればよい、ということになります。ヨーロッパ文化専修提供の専修関連科目には、選択したコースに関連が深い科目と、コースにかかわらない、「ヨーロッパ」全体を意識した科目があります。前者には、科目名に「フランス」「ドイツ」が含まれていて、後者には「ヨーロッパ」「欧」の語が含まれているので、それを目安に、シラバスを参照しながら、自分の関心にあった科目を選択してください。

ヨーロッパ文化専修提供の専門教育科目の基本的な性格

最後に、ヨーロッパ文化専修の主な専門教育科目の基本的な性格を記しておきます。履修登録の際の参考にしてください。（ただし、今後微調整が加えられることはあります。詳しくは、年ごとのシラバスをよく読んで下さい）。

1 年次配当科目

- ・ 学びの扉：ヨーロッパ文化専修ではどんなことが学べるかを紹介する入門講義。原則としてヨーロッパ文化専修の専任教員全員によるリレー講義の形式。
- ・ 知へのパスポート：ヨーロッパ文化にかかわる個別のテーマについて、自ら文献を調べ、内容をまとめ、発表し、議論する、という演習形式の授業。
- ・ フランス／ドイツ文化論：多彩なフランス／ドイツ文化の魅力に迫る講義科目。
- ・ ヨーロッパの言語と文化（一）：フランス・ドイツを中心にヨーロッパ全体をみずえた言語文化について学ぶリレー講義。
- ・ ヨーロッパ文学入門：フランス・ドイツを中心にヨーロッパ全体の文学について学ぶリレー講義。
- ・ 外国語演習 I-VI（フランス語・ドイツ語）：外国語科目のフランス語・ドイツ語とは別に、文学部が専門科目として提供するフランス語・ドイツ語の授業（文学部外国語科目）。単なる「語学」ではなく、言語文化の広い背景を視野にいたした授業。I, II は初学者向け、III, IV は中級、V, VI は上級という区分だが、実力に応じて、1 年次からクラスを選んで受講できる。

2 年次配当科目

- ・ ヨーロッパ文化専修ゼミ I, II：様々なテーマを自主的に調査する演習科目。「知パス」のより進んだ形（コース別）。

- ・ ヨーロッパ文化専修研究 I, II：ヨーロッパ文化専修の専門研究を深めて、「ヨーロッパ文化」を学んでいるというアイデンティティを獲得するための講義科目（コース別）。
- ・ 専修フランス語／専修ドイツ語：初級フランス語・ドイツ語の再確認から始めて、中級へのステップアップを図る。
- ・ フランス語／ドイツ語インテンシブ（一）：原則的にネイティブによる授業。フランス語・ドイツ語会話の初歩。
- ・ フランス／ドイツ文学史：フランス／ドイツ文学の全体像を提供する講義科目。広い視野でフランス・ドイツを捉える。
- ・ フランス語学／ドイツ語学研究：フランス語／ドイツ語の難問・落とし穴をじっくり吟味する。中級文法の整理や確認、また言語学的問題へのアプローチ。

3 年次配当科目

- ・ ヨーロッパ文化専修ゼミ III, IV：「専修ゼミ I, II」の発展形。少人数のゼミ形式。卒業論文のテーマを摸索（コース別）。
- ・ ヨーロッパ文化専修研究 III, IV：「専修研究 I, II」の発展形。ヨーロッパ文化の諸領域についての基礎から専門へ（コース別）。
- ・ フランス語／ドイツ語インテンシブ（二）：「インテンシブ（一）」を発展させた科目。豊かな表現力と高度な運用力のために。
- ・ フランス／ドイツ言語文化専門研究：フランス・ドイツの言語文化をめぐって、より専門性を高めた考察を行う。
- ・ ヨーロッパの言語と文化（二）：（一）を発展させ、フランス・ドイツを中心にヨーロッパ全体をみすえた言語文化についてさらなる理解を深めるためのリレー講義。
- ・ 日欧比較文化論：ヨーロッパの言語文化を日本文化と比較することで、文化研究のための客観的な視点をもつことをめざす講義。

4 年次配当科目

- ・ ヨーロッパ文化専修ゼミ V, VI：卒業論文の指導。少人数のゼミ形式（コース別）。

卒業生寄稿

本専修の前身である、関西大学文学部フランス学専修を卒業し、フランスにかかわる職業についている卒業生に稿を寄せていただきました。

Français pour tous - みんなのためのフランス語

藤岡亜美（2012 年卒業）

2014 年関西大学大学院文学研究博士課程前期課程を修了し、2016 年にパリ第 7 大学大学院でフランス語教授法（FLE）の修士号を取得した。現在、パリで難民や難民申請者、移民を対象に、フランス語とフランス語の読み書き（alphabétisation）を教えている。

みなさんがフランス語やフランス文化を学びたい、接したいと思ったきっかけは、一体何でしょう？「フランスって何だか素敵！おしゃれ！」、「フランス語って難しそうだけどちょっとでも話せたらいいなあ。」、「フランス文学や音楽、絵画が好き！」と様々な理由でこの冊子を手にはしているのではないかと思います。私もそのうちの一人で、フランス語を使って仕事をしたい、いつかフランス語教育に携わりたい、学習者のフランス語能力を少しでも向上させたいと次第に思うようになりました。2010 年に交換派遣留学制度を利用し、パリ第 3 大学に留学した時には、わからないことだらけの自分がかっかりしたこともたくさんありました。こうした経験を通して、関西大学大学院在学中にフランス語学習に力を入れて、再度留学するための準備をしようと決意することができました。

2014 年の夏に渡仏し、2016 年にパリ第 7 大学大学院で言語学とフランス語教授法（FLE : Français Langue Étrangère）の修士号を取得しました。この 2 年間は「今までこんなに勉強したことない！」というくらい机に向かい、わからないことも結局わからないまま、そのまま講義に出席することもありました。マリ、イラン、中国、アメリカからの学生もおり、クラスの半分外国人学生で構成され、様々な文化と接することができた学生生活にもなりました。

私が選択した修士課程のコース（Master Professionnel）では、修士 2 年目の秋学期に NGO 施設や語学学校などで、教育実習をするインターンシップ制度があります。この制度を通して、パリの難民申請者受け入れ施設（Centre d'accueil pour demandeurs d'asile – CADA）でスーダン、アフガニスタン、エリトリア、ナイジェリア、ウガンダ、ネパールなどから来た難民認定を待つ人たちを対象に、6 ヶ月間フランス語を教えました。大学院で学んだフランス語教授法や言語学の理論だけでは通用せず、実際にフランス語を教えることによって学ぶことがとても多かったです。難民申請などの手続きで疲れ切っている受講者たちが講義中に見せる笑顔や冗談を聞いて「もっと彼らのために何かしないとイケない」とパワーをもらい、彼らの語学レベルに合わせたプリントを自分

自身で作る原動力になりました。実習中は受講者に助けられることもとても多く、これらすべての経験のおかげでインターンシップ後にフランス政府移民局(OFIG)とパリ市市民講座でフランス語講師としての仕事を得ることができました。

2016年の秋から毎日、10ヶ国以上の国籍や文化を持つ受講者に囲まれてフランス語を使いながら仕事をしています。アラビア語や中国語、日本語やチベット語、英語やアフリカ大陸で使われる様々な言語を話す受講者たちもパリで一生懸命フランス語を学んでいます。フランス語は簡単な言語とは言えませんが、少しずつ習得していくと（たまにモチベーションが上がったり下がったりしても！）どんどん聞こえてくるようにも、口から自然に文章が出てくるようになります。語学学習を通して、自分がどんな性格なのか、自分に取って最適な勉強方法を発見することがあります。皆さんは大学在学中または卒業時、フランス語でどんなことがしたいですか？フランス旅行やワーキングホリデー、大学や語学留学を通して、フランスがそんなに遠い国ではないことに気がつくと思います。

Bon courage et bonne chance à toutes et à tous !

*

「なんとなく」から「真剣」に

橋野勇一（2009年卒業）

関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程を修了（2013年）後、奈良県立高取国際高等学校の英語・フランス語の教員となる。学校では国際教育部のメンバーとして、フランスをはじめ様々な国との交流に関わっている。

私が通っていた高校では、第二外国語の選択授業がありました。カッコ良さそうだな、という理由でなんとなくフランス語を選んだのが、私とフランス語の出会いです。当時は英語が得意だったので、フランス語もすぐにできるようになるだろうという軽い気持ちで授業を受け始めたのですが、動詞の活用、名詞の性などの複雑さにショックを受けたことを覚えています。難しい文法の習得に悪戦苦闘していくうちに、英語とはまた違った面白さにどんどん惹かれ、フランス語のことをもっと知りたいと思うようになり、関西大学文学部に進学しました。

大学入学後すぐ、「仏蘭西文学研究部」に入部し、フランス語を学習されている先輩方と出会うことができました。フランス語の授業は、個性豊かな先生方が熱心に指導してくださいました。それらが大きな刺激となり、よりいっそう学習に励みました。とにかくフランスに関わりたいと思い、「フランス」と名のつくイベントには必ずといっていいほど参加していたような気がします。

さらにフランス語について研究したいと思い、大学院修士課程（博士課程前期課程）

に進学しました。学部時代からの夢だったフランス留学も経験することができ、パリでの1年間の生活は忘れられない思い出となっています。

高校時代の恩師のような教師になりたいという思いがあったので、大学では教職課程を履修し、フランス語と英語の教員免許を取得しました。修士課程修了後は、大好きなフランス語を教えたいという気持ちがありました。しかし、フランス語を教えている高校は少ないのが現状なので、その道はあきらめ、英語の教員になるための準備を進めました。

修士課程修了と同時に、奈良県の公立高校での勤務が決まりました。幸運なことに、その勤務先は国際教育に力を入れている学校で、第二外国語の選択授業があり、その中にはフランス語の授業もあります。さらに、奈良県内で唯一フランスに姉妹校があり、隔年で短期派遣研修および受け入れをおこなっています。現在私はその高校で勤務し、英語の授業に加えてフランス語の授業も担当しています。

一度はあきらめていた、フランス語を教えるという夢が、思わぬ形で実現しました。まだまだ語学力は完璧とは言えないレベルですが、派遣研修の際には生徒引率としてフランスへ行き、受け入れの際には通訳を担当するなど、大学で学んだフランス語を活かすことができます。私のフランス語の授業を受けた生徒の中には「大学でフランス語を勉強したい」と言ってくれる人が何人かいて、高校卒業後も熱心にフランス語の勉強をしてくれています。

「なんとなく」という気持ちで始めたフランス語ですが、関西大学の素晴らしい環境のおかげで挫折することなく「真剣」に勉強することができました。英語の教員である私にとって、フランス語というもう一つの外国語ができることが大きな強みとなっています。仕事があってなかなか時間がとれませんが、現在も仏検1級合格を目標に少しずつフランス語の勉強をしています。関大の憧れの先生方に近づけるよう、これからも努力を続けていきたいです。

おわりに

この冊子を通読いただき、ありがとうございます。この薄い冊子では、ヨーロッパの言語・文学・文化についてまんべんなく紹介するにはあまりにも不十分ではありますが、それでも、関西大学文学部総合人文学科ヨーロッパ文化専修の雰囲気がおわかりいただければ幸いです。

ヨーロッパ文化専修 学びの扉

編著：関西大学文学部ヨーロッパ文化専修教員一同

発行者：関西大学文学部ヨーロッパ文化専修

